

324

562



始



信
仰
聖
安
心

324-562



信仰と安心

藤田講師口授

大正
7. 3. 26
内交

經典 壽量品——我常住於此 以諸神通力 令顛倒衆生 雖近而不見 衆見我滅度

廣供養舍利 咸皆懷戀慕 而生渴仰心 衆生既信伏 質直意柔輒 一心欲見佛

不自惜身命 時我及衆僧 俱出靈鷲山文

祖判 御義口傳下^初六即配立時此品如來理即凡夫也頭南無妙法蓮華經奉頂戴時名字即也其

故始所^レ開題目故也奉開修行觀行即也此觀行即者觀事一念三千本尊也授伏惑障云^ニ

相傳即也出化他云^ニ分眞即也無作三身究竟云^ニ究竟即佛^ト至無作三身佛所作何物時

唯南無妙法蓮華經也文

布教院長閣下の命によつて講師の責任は受けるは受けましたが、如何な事を話してよいか御要求の内容も確と判りかねましたので、特に又自坊本堂再建後殘務繁忙でもあり、且つは九月十月は殆ど晝夜兼行の布教のみならず、院長閣下の御要求の主點を御伺申上ぐる迄は草稿も腹

信仰と安心

案も定まらるので漸く上京しましてから伺つて見ますと、宗義の重なる點を講じてくれとの事、林講師は成佛論を要求せられました。其處で然らば布教院課題の中で信仰と安心との二つを土臺として其中へ自然に込めて辯ずる事にしやうと御約束して見たのであるが、何分問題が富士山のやうに大きいので、とても未熟の我輩にはかゝへきれないやうな氣持がするのであります。けれども苟も本宗僧侶として人あつて日蓮宗の「信仰とは如何」、「安心とは如何」と尋ねられた場合、問題が大きいから答へられぬとは云はれない。又何とか説明しなければならぬ。

其處で私は私の分齊だけに一應此問題に向つて解決を試みやうと思ふのであります。

私は明治七年の生れで餘り明治御維新以前の我國の文物制度凡ての状況に就きましては存じませんが、近く一昨日京都岡崎公會堂に京都佛教護國團の發會式が催されて齋藤唯信師の講演を拜聴しましたが、其話によりましても舊幕時代は一般民間の教育と云ふものは極めて惘然なものでありまして僅かに読み書き珠算の三つ丈けて、其も一部落に二三人か八九人しかなかつた相であります。漸く明治二年に小學校が京都に始めて出来、明治六年に各地に出来、十年に中學がポツ／＼出来かけたと云ふ事でありまして、成程私も五歳の春から六歳の秋までは地方の小學校に行き小學讀本を習ひました。「一二三四、神、人、天地、人ハ萬物の靈長ナリ」と教へられたのが明治十一年の春から十二年の秋までであります。其後大學も出来、哲學館も出来、明治

學院、東洋大學も出来、早稲田大學、日本大學と云ふ工合に非常なものであります。何千人の學士何百人の博士を出して居ります。一昨日護國團發會式の節、田所文部次官の談によりまして我國の教育就學人員の割合は世界の第一位を占めて居る、獨逸は次に居ると云はれてゐる。何と進んだものではありませんか。其他日々發行の新聞の種類、雜誌の種類、著述物の種類は汗牛充棟も管ならずと云ふ形容詞位では追及かぬ。寧ろ牛倒れ棟折れと云ひたい位。斯の如く實に我國現代の教育機關は十分なる設備でありまして國民の智識の進歩發達は日進月歩處ではない時々刻々であります。それなら物質方面は如何かと申しますと、之も智識の進歩と共に非常なる進み方ではありませんか。御覽なさい、土器はカンテラ(蘭語)となり、カンテラは洋燈となり、洋燈は電燈となり、笠は日傘となり、日傘は洋傘となり、足で歩くのが人力車となり、人力車が馬車となり、汽車が出来、三輪車の自轉車が出来、二ツ輪の自轉車が出来、自働車が出来、飛脚が郵便となり、電報となり、電話となり、海にも陸にも空中にも山の頂きにも水の底にも文明の機械の行届かぬ所はないやうになりました。道路橋梁家屋等衣食住の日用品に至るまで物質上の進み方と云ふものは實に目覺ましいものであります。過去僅かに二三十年間の大なる此の進歩發達を以て今日以後の我國の知識界、物質界の進歩發達を豫想しましたならば實に何處まで進みますものですか到底判らないのであります。此の如く國民の知識界や物質界の駈々

知識と實行
較との進退比

乎として進みますのは實に文明の賜物でありまして喜ばしい事ではありますけれども、さて其半面を考へて見るならば實行上の足は如何も次第に退歩して居る。兎角知識と實行とは何れの時代何れの國でも如何も伴ひ難きものと見へます。支那の儒者である孔子は何ちらかと申しますと知識より實行を重く取られたやうであります。論語の中に

事_{フルニ}父母_ニ竭_シ其力_ヲ、事_レ君_ニ能_ク致_ス其身_ヲ、與_ニ朋友_ニ交_ハ言_ニ而_レ有_レ信_{、雖_レ曰_ク未_レ學_{吾_ハ必_ズ謂_ニ之_ニ學_{一_ハ也}}、}

と云ふて居ります。結局實行さへ着々出來て行つたならば知識は要らぬ。實行の爲めの學問で

あると云ふのであります。又同じ論語の中に

葉公語_ニ孔子_一曰_ク吾黨_ニ有_ニ直_{身_者}、其父攘_羊、子證_之、孔子曰_ク吾黨_ニ之_{直_者}異_{於_此}、父爲_子隱_{、子爲_父}隱_{、直_{在_{其中}}矣_{（七十一）}}

今日の法律の學問より致しますれば、親子の間柄でも不正事件は包み隠しはならぬのであります。學問の筋道理窟の筋道と道德實行の筋道とは場合によつては合はぬ事があります。理窟には合はぬとも實際上親子の情けの道に契つて居れば道德には外れぬと云ふて居るのであります。之は知識學問よりも實行を重ぜられた證據であります。其後支那に王陽明と云ふ儒者が出まして智識と實行とを平均に主張せられて知行合一を盛に鼓吹せられました。日本でも文明の風がまだ餘りに激しく吹き込みませなんだ時代は學問知識は退歩して居ましたが實行の方面は進

んで居ました。今の時代は知識の一方は進んで居ますけれ共實行の方面は全く忘れられて居ります。如何も知慧で知つて居ましても其通り行ふ事は中々難かしいものであります。

世間の學問では吾々の心の作用を知情意の三つに分けますが、智慧は物を知り別ける作用、分別する作用、コゝすればコゝなる、アゝすればアゝなる、善いとか悪いとか白とか黒とか凡て物を知り分ける作用之を知と云ひ、情と云ふは憎いとか可愛とか欲しいとか惜しいとか嬉しい戀しい是等を佛教では五慾と分ける。眼に好き色を見て慾を起し、耳に、よき聲を聞きて慾を起し、鼻に、よき香をかぎて慾を起し、舌に美味いものをなめて慾を起し、體によい着物を着て慾を起す、之を五慾と云ふ。十界の分け方も結局心の上の情の種類分けなのであります。腹の立つのは地獄の心、慾の起るは餓鬼の心、愚痴のこぼれるのは畜生の心、我慢の出るのは修羅の心、主人に忠義、親に孝行、兄弟睦まじく夫婦仲善く朋友と交はりては信義を守り長幼次第をくづさぬは人間の心、嬉しく樂しきは天上界の心、山寺の入相の鐘の音に浮世の夢を覺まし、谷川の水の響を聞きて死に行く先の淺ましきを思ふて佛道に入るは聲聞の心、春の花の嵐に散り秋の紅葉の時雨に染むるを見て臨終の程遠からぬに氣がついて菩提の心を起すは緣覺の心、妻子可愛の念は菩薩の心、「初雪やあれも人の子樽拾ひ」縁も由緒もない更の他人までにアゝいとしいと哀れのかゝるは佛の心、之を心具の十界と云ふ。皆情の方面を分けたものであります。意

と云ふのは意志と申しまして、之は斯うしやう、彼はア、しやうと決心するのが意志であります。例へば大酒を飲めば健康を害すると知つたは智慧の作用、そこで大酒は飲まずに置こうと決心したのは意志であります。けれども如何しても飲みたくて堪まらぬは情慾の作用、何處だかで誰だかの云ふた文句を聞いた事がある、「コーしてコーすりやコーなることとは知りながら、コーしてコーしてコーなつた」結局何時でも智慧の力も意志の力も感情の力にはもろくも無造作に敗北を取るのではありません。

昔支那の國に道林禪師と云ふ禪宗の名僧があつた。同じ時代に同じく支那に白樂天と云ふ學者があつた。道林禪師も白樂天の名を聞きながら談した事がない、白樂天も道林禪師の名を聞きながら會ふた事がないので互に遺憾に思ふて居た。すると或年の事、白樂天は官用によつて全國の視察に巡回しなければならぬ事となつたので大いに喜んで遂に之を機會として道林の寺を訪問して直に面會を乞ふて佛教の要は如何と聞いた。其時道林禪師如意を取つて徐ろに一偈を誦して

諸惡莫作 諸善奉行 自淨其意 是諸佛教

とやつた。すると白樂天は、支那第一流の支那佛教學者と云ふ道林禪師にも似合はぬ餘りにすげない返答ぞと思はれ、腹立ちまされに大喝一番「三歳の兒童も尙之を知れり」ときめ込む。道

道林と白樂
の問答

林すかさず「三歳の兒童も之を知れりと雖八十の老翁も尙之を行ひ難し」とやつたので、白樂天は、がらり兩手をついて屈伏したと云ふ事は古來有名な話であるが、善根はせにやならん、惡事としてはならんと云ふ事は三つ見ても聞いて知ては居るが、さて之を實地に行ふ事となると腰には梓の弓を張り頭らには商山の白雪を頂いた八十の老翁も仲々に難かしい。だから知つたからとて仲々行はれるものではない。然らば如何すれば行ふ事が出来るであらうか。

信じにや駄目だ！、信じにや駄目だ！、知つた許りで信じないから行はぬのであります。論語と云ふ書の中に孔子と云ふ人がこう云ふ事を云はれた事があります。

知之不如好之、好之不如樂之

好み樂しむ處まで行かねば何事も駄目で結局我が物にならぬ。一株の菊を見て氣に入つたら之を好むであらう。さて好んで氣に入つたら樂しむであらう。見た許り、聞いたばかり、知つた許りでは何にもならぬ。氣に入つて好きにならねばならぬ。好きになればなる程樂しみ味はう。味へば味はう程好きになつて遂には寢食を忘れて菊道樂になるが如く。道を行うには道を知つた許りではならぬ。道を好まねば駄目だ。好めば樂しむやうになれと言はれたのであります。されば知識でどれ程知つて分つても信仰の力がなければ行はれるものではない。知つても信じなければ捨てるであります。之は何人にもよく判る實際の事柄であります。知つて其上

に信じた事なれば必ず其を模倣するやうになるであらう。一面の額を見て、ア、よく書いてあるなと氣に入つて一旦深く信じますと如何しても其の書風が自然とまねがしたくなるものであります。婦人が流行の帯地を見て氣に入れば必ず親や亭主を攻めて買はずにはをかぬ。男子ならばハイカラ帽が氣に入つたら見のがしはすまい。人は善いと知つたとて仲々實行せぬが一度善いと信じたら必ず實行するものであります。茲が昨日も申しました通り、知情意の三つの中で何時も力の強いのは情であります。信ずると云ふ事は悪いと信ずるも善いと信ずるも情の方面に屬するのであるから、如何に智識で知り別け意志で決断してみましても其處に信仰の力で認可をしなければ決して實行出來ぬものであります。法華經の根本精神、宗祖大聖人の御本懷は弱き力の知慧をばガラリと振り捨て、強き力の信心一行によつて信じた通りを實行せしめて而して一步步々人格を向上せしめ凡夫を佛にしやうと云ふが大目的大主眼であります。

全體學問と云ふものには學問の條件と云ふものがあり。宗教と云ふものには宗教の條件と云ふものがあります。此の凡て條件と云ふものは丁度汽車の軌道のやうなものでありまして學問と云ふものにも宗教と云ふものにもチャンと一種の守るべき軌道即ちレールが布設されてあるのであります。さて其學問の條件と云ふものは如何なるものでありませう……知識です……。然らば宗教と云ふもの、條件は如何なるものでありませう……信仰です……。

故に所有宗教には信仰を條件としない宗教は一つも御座いません。信仰の條件のない宗教は宗教でないのであります。でありますから試に佛教各宗を一通り調べて御覽なさい。信心を度外視した宗旨は一宗もありません。

一體此佛教各宗の色分け法には種々ありますが、且く之を自力他力で分けますと、禪宗は純自力で、眞宗は純他力であります。華嚴宗だとか三論宗だとか、法相宗とか俱舍宗とか成實宗或は律宗など云ふ奈良の都に弘まつた處の六宗なども純自力としてよろしい。天台宗は、支那の天台宗は純自力としてよろしいが、日本の天台宗も傳教大師當時は自力八分に他力二分位であつたが慈覺大師已後になりますと段々他力の重さが次第に多くなつたのであります。降つて叡山坂本西教寺を中興いたしました眞盛慈攝大師は他力念佛の大主張者で他力八分に自力二分と見てよろしい。眞言宗は自力八分に他力二分位な宗旨であります。時宗や融通念佛宗は先づ以て他力六分に自力四分位の割合であります。日蓮宗は自力他力平等平均の立場であります。淨土宗も一見純他力のやうであるけれ共親鸞上人の研究に依つて見ますると淨土宗も幾分自力の嗅があると云ふので親鸞は法然上人の門下でありながら別に一宗を開いたのであります。それといふは淨土宗も大無量壽經（上下二卷雙觀經とも或は大經とも云ふ）觀無量壽經（觀經とも云ふ）阿彌陀經（小經と云ふ）の淨土三部經を所依とし、眞宗も亦此の淨土の三部を依經と

するのであるけれども浄土宗では三部の上に別段高下淺深を認めないで平等平均に取扱つて居るに對して親鸞の考へは一層緻密である。『若しも浄土の三部經が平均の位地であるならば觀無量壽經の中に定善散善と云ふ事が説いてある。定善とは禪定に入つて修行する處の善根、即ち十六通りの觀想であります。散善とは禪定に入らず散亂の心の儘で修行する善根、即ち父母に孝養するとか、師長を尊敬するとか、五戒十善とか云ふものであります。是等は皆自力の修行であるのに其が大經と阿彌陀經との彌陀の他力本願と平等に肩を並べて高下がないとしては彌陀他力本願の權能を薄らぐる事となつて由々敷大事と氣遣いて大經第一、彌陀經第二、觀經第三と扱つて觀經は自力を捨てる助證、大經何彌陀經は他力をたのむ正しき證據とするのであります。特に眞宗では他宗に類のない他力の信心、即ち佛智施與信、他力回向信と云ふ事を主張して居ます。之は往生極樂の正因には凡夫不實の信心では駄目である、彌陀が造つて與へてくれた清淨の信心でなければ浄土往生の因とはならぬと云ふのであります。而して此の他力の信心を獲得するには無宿善と云ふて前已に善根の造つてないものは駄目だと説いて居る。之に就て私は眞宗の或る學者に質問した事がある。其はこう云ふ質問でありました。無宿善の者は信心取り難しと云ふが其宿善と云ふは自力であるか、他力であるかと問ふた。すると彼は宿善は自力と云ふた。そこで私は他力の信心も矢張り自力の宿善でなければ受取れぬとすれば他力より

他力信心の
反駁

も自力が大切でないかと反詰した、すると彼はそれでは宿善も他力でせうと瓢箪餘にずるく扱けた。そこで一層余は短刀を以て手元まで直入して曰くされば眞宗の他力信心は他因外道である。と云ふものは佛教では種子を他に播かせて果實を自分が取ると云ふ事は他因外道であると説いてある。因果と云ふものは飽までも自業自得でなければならぬ。因を他に播かせて果を自分が横取る事が出来る位なら世の中は惡の作り得、善の作り損、さては善根を修する者は一人もないではないかと切り込んだ。すると眞宗の學者は大に赤面して屈伏した。氣味がよかつたが氣の毒のやうな氣もした。兎も角も眞宗は信心までも他力と扱ふ故にこれ程純他力宗はないのであります。禪宗は修多羅の經は月を指す指だとか、一代聖經は閑文字とか、うなつて經卷を屏風に張り、佛像を焼いて尻を焙ぶる。之れ成佛だと喜んで居る宗旨で他力救済を更に認めないのであるから純自力と云はねばならぬ。此の通り佛教各宗を自力他力で分つて見たが信心を條件とせぬ宗旨は一宗もないのであります。

諸宗の信相

眞宗も自力信心は許さぬが他力信心を唯一の條件として居る。禪宗が斯うまで天魔の狂へるが如くに直指人心顯性成佛を主張して居るけれどもよく内部を調べて見ると單信、解信、圓信と云ふ三つの信心を立て、單信は下根、解信は中根、圓信は上根と組立て、居る。眞言宗は心に金胎兩部の曼荼羅を觀じ手に印相を結び口に眞言を誦する、之を三密の修行と云ふのであり

ますが。其金胎兩部の曼荼羅は如何なるものであるかと申しますと、澤山の佛やら菩薩やら天やら神が總計一千九百八十一尊(或説)列ねてある、まるで化物屋敷のやうな有様であります。此の澤山な佛や菩薩諸天諸神は何物であるかと云ふとつまり吾々の心に本來持つて居る菩提心の無盡の功德を形で説明したものであります。其本來有つて居る菩提心を本有の菩提心とも名け又は信心と云ふのであります。さすれば眞言宗の骨は結局信心であつて信心の全體を説明した宗旨と云ふてもよいのであります。天台宗では天台大師が文句の中に「信心の中に於て三寶を見る事を得る」と説き、傳教大師は依憑集の中に「信謗彼此決定成佛」と説き、そのみならず天台宗で五十二位と云ふ位を立て、凡夫が佛になるまでの道行を分つて居るが、五十二位の中には十信を本とす、十信の位には信心初めなり(題目抄往見)。華嚴宗、三論宗、法相宗、俱舍宗などと云ふやうな理屈宗でも皆信心を是認して居ます。時宗には「信心清淨なれば花開いて佛を見る」と説いて居ります。融通念佛宗には自他念佛融通の道理を聞いて深く信ずるを安心と云ふと説いて居ります。斯の如く日本佛教の各宗は皆信心を八釜敷云ふて居ります。我日蓮宗は如何でありませう。

本宗の信相

我宗の依經たる法華經一部二十八品の中に疑を戒めて信心をおすすめ下された文句の多い事は今更申上げるまでもない事ではありますが、先づ法華經一部を天台は迹門本門と二つに分けま

本迹大綱

すが、序に一言申上げて置きますが迹門本門と云ふ事を判り易く申しますと、本門と云ふ事から先に申さねばならぬが、本門と云ふ事は釋迦如來御自身みまごの身元談みもとだんをなされたので、我は久遠の昔に成佛して其より已來種々に身を現じて娑婆の衆生を教化したと、壽量品に來つて御説なされたので久遠已來の種々の名號を名乗つてお下されされて衆生を御教化下されたは皆久遠本佛の足跡(迹)であつたと云ふ事が判つたのであります。其の身元談を本門と云ふに對して見ますと安樂行品までの前十四品では二乗作佛と云ふて衆生教化の仕上げをせねばならぬので身元談を遊ばす暇がなかつたから之を迹門と云ふのであります。

迹——迹廣——横
本——本高——豎

さて其迹門十四品の御説法の聞き相手は誰で御座いましたか………智慧第一の舍利弗尊者。それなら本門十四品の御説法の聞き相手は誰で御座いましたか………補處の彌勒菩薩。サ、大したものだ！釋迦如來のお弟子五百の大阿羅漢、千二百人、或は八千人の大聲聞、是等の大勢のお弟子の中で智慧では舍利弗尊者の右に出る者がなかつた位の御方が迹門十四品の御説法の聞き相手となつてお釋迦様の高座の正面にお座はりなされて、また、さもせず一に心合掌瞻仰尊顔とあつてお釋迦様の顔を出る程ジツと見つめてお聞きなされた。先以て序品一座の儀式事終つた其時に世尊三昧より安祥として起て舍利弗に告げて曰くと愈々お説きなされ

信仰と安心

たのが述門の肝要、一代佛教の真髓たる諸法實相の法門だ。さて此の大微妙の法門を舍利弗尊者の得意の智慧でも受取りなされたかと申しますと、お釋迦様の御誠めを承つて見ますと、法華經第二の卷譬喻品と申す御經の時に

汝舍利弗尙於此經以信得入況餘聲聞其餘聲聞信佛語故隨順此經非已智分
とお誠めをなされた。我が方便品で説いて聞かした諸法實相の法門は唯佛與佛乃能究盡だぞよ

等覺以下の智慧の及ぶ處ではない。然るに汝二乗の分齊多寡の知れたる舍利弗位の智慧で如何して此難解難入の法門の味がわからうぞ。考へ損ひをするな丁見そこないをするな。唯々偏に汝が信心の力で受取れたぞ、信を以て入る事を得たり非^メ己智分^ニ何と如何だい皆様、舍利弗尊者のさしにも多き無量の智慧も成佛の一段に至つては一文の價値もなく微塵に打壞されたではないか。補處の彌勒と聞けば序品法師品の時の迹化八萬の大士の隨一に數へられた大菩薩にして五十六億七千萬歳の曉には十號の具足の如來とお成りなされて此娑婆世界に御出現遊ばし、衆生濟度を下さると言ふお釋迦様のお跡を相續さるべき大した菩薩、全體述門十四品の御説法の間は重に舍利弗尊者が高座前の主人公であつたのに前十四品が濟むや否や、急に新手の彌勒菩薩が入り代つて高座前の主人公ともなりなされたと云ふには色々な深き所以のある事でありますが其はお預りとして兎も角も折る尊き彌勒菩薩を始めとして歷々の相手許りの壽量

品の御説法、見事立派に汝等の腕一杯に智慧を絞つて承はれよと仰せられそうなものであるのに左はなくて意外にも壽量品の

爾時佛告諸菩薩及一切大衆諸善男子汝等當信解如來誠諦之語

と信心で受取れるか如何じや。信心で受取れるか如何じや、信心で受取れるか如何じや、と三返共に智慧で受取れとは仰せられずには信心信心と三度までも信心の条件をおつけ遊ばされたので

是時菩薩大衆彌勒爲首合掌白佛言世尊唯願説之我等當信受佛語

必ず必ず信心で受取るで御座らう信心で受取るで御座らうと三度のお請で足りないで更に念を入れて申して曰く必ず信心で受取るで御座らうと上の佛と下の聽衆と上と下とで双方が石山の岩より固き信心の條件は破らぬと云ふ金剛の如き契約が出来て

爾時世尊知諸菩薩三請不止而告之言汝等諦聽如來秘密神通之力

と藝題が懸つて愈々説法せられたが壽量品の一品。序に一寸お話しするが、日蓮宗で説教の後、に今身より――を三度に切つてお經頂戴するは此壽量品の儀式を移したるものである、喜ばねばならぬ喜ばねばならぬ。有難い事だ。時代は三千年を過ぎ、土地は千里萬里の海山隔てた天竺と日本なれ共疊の上に座りながらに如來在世の其儘の壽量品の儀式が拜まれる處でない、高座

の上の御出家が其儘生身の釋迦如來、我が其儘生きた彌勒菩薩となつて、此座が其儘天竺の靈鷲山である。お經頂戴には皆様も此の喜びを以て力を入れて有難くお受取なさい。無始已來の罪が消へるは此の時の題目だ。未來の土産になる題目は此時の題目だ。平生唱へるお題目には随分カスが多く御座います。此は附加。どうじや解つたかい、急ぐまいぞ、狼狽まいぞ。大切な處じや。如何に智慧自慢の舍利弗尊者でも、釋迦如來の跡續の出來る彌勒様でも智慧は一點も間に合はないで信心あつて迷が晴れて成佛得脱なされたのであります。故に提婆品には

佛告諸比丘未來世中若有善男子善女人聞妙法華經提婆達多品淨心信敬不生疑惑者不墮地獄餓鬼畜生生十方佛前

とおすゝめなされ、分別品には壽量品の御説法をお聞きなされた聽衆の功德の浅い深いの品分けをなされて滅後の衆生にもおすゝめ下されたが即ち四信五品と云ふて四つの位と五つの位があるが結局は信心の浅い深いの外はないのであります。隨喜功德品も法師功德品も信じた功德より外にはない。常不輕品は信じた功德と誇じた功德とをお説きなされ、神力品には「應受持斯經是人於佛道決定無有疑」とおすゝめなされ、其外大體に謗法を戒めて信心をおすゝめ下された外はないのであります。以上は法華經の上のお勧めの相でありませんが宗祖大聖人は此の法華一經を土臺として妙法五字の御弘通末法時期相應の宗門御建立御一代の御誠めは何だ！謗法

善星

提婆

槃特

だ。お勧めは何んだ信心だ。お書残しの御遺文三百八十七通、若は四百餘篇何れを拜みましても信心の勧めに謗法の誡めより外は御座いません。「成佛に何の智慧才覚が入るべき」佛になるのに智慧の條件は必要ないぞ、舍利弗を見よ、彌勒を見よ、釋迦如來の御在世に善星比丘と申す御出家があつたが戒行と云へば二百五十戒を持つて水も漏さぬ御修行、禪定と云へば四禪定を練り上げ、智慧はと云へば十二部經を暗で覺へた程の戒定慧の三つの學問何一つ愚はなかつたのに其で地獄に落ちたは何故であらう。提婆達多も智慧の明な事は外道の六萬藏、佛法の八萬藏を空に覺え神通神變通力の自在なる事は目連尊者も舌を捲いた程の人であつたのに其が地獄に落ちたは何故であらう。是等の二人は智慧學問もあり修行も偉まもかつたけれ共迷を離れて悟の境界に入り苦しみを捨て、樂を得やうとする宗教の根本條件たる信仰がなかつたからであります。そうかと思へば同じ釋迦如來の御在世で天竺で有名な馬鹿の大將、阿呆の總名代と云はれた槃特と云ふ人は我が名が如何しても覺えて居られぬので時々釋迦様の處へ行つて「お釋迦さん又私は名前を忘れた教へて下さい」「オ、お前はとも覺えが悪いな、可愛そうなものだどれ〜善い工風があるわい」とお釋迦様御自身で小さい板をお取りよせになつて墨黒々と槃特とお書きなされて、紐を付け「之を背にかついで居れ人が名前を聞いたら背を向いて見せろよいか、可愛相なものだわい」と親切にお育てなされた。之に就て日本で茗荷を食ふと覺えが

悪くなるとは名を荷うと書いてあるから榮特のやうになると云ふのだそうだ。成程宿屋の亭主が金満家のお客を泊めて茗荷を澤山食はせたら金側時計を忘れて行くかと思ふたら宿賃を忘れて行つたそうだ。此の榮特を相手にして五百羅漢様達が釋迦様の御命令を受けて面倒ながらも代る代るにお經の偈文七字を教へなされた。守口攝意心莫犯と十日掛つても百日かかつても如何しても覚えられないので五百羅漢も手を引いた位の愚鈍な人ではあつたが、其が法華經に來つて普明如來と申す佛にお成りなされたのは何故であらう。宗教として缺くべからざる信仰の條件一つがあつたからであります。此處を宗祖大上人は法華題目抄(遺五八四)に

宗祖の弘通

善星比丘は二百五十戒を持つて四禪定を得十二部經を暗にせし者也、提婆達多是六萬八萬の寶藏ををばへ十八變を現せしかども是等は有解無信の者也今に阿鼻大城にありと聞く、又鈍根第一の須梨榮特は智慧もなく悟もなし只一念の信ありて普明如來と成給ふ云云と仰せられた。宗祖聖人御一代中お手紙のお書き納めは何と云ふ御妙判であつたでせうか、皆様のよくお聞きなされて居る弘安五年十月十三日の御臨終から一週間前十月七日の日に波木井殿其外人々御中として遣はし下された波木井抄が大聖人最後の御筆、御遺言状とも申し奉るべき大切な御妙判、何と仰せられたい！(遺二二一四)

心に二つましまして信心だに弱く候はゞ峰の石の谷へころび空の雨の大地へ落ると思召せ、

大阿鼻地獄疑あるべからず。其時日蓮を恨みさせ給ふな返す返すも各の信心に依るべく候成佛の要件は信心だぞ、忘れてくれるな、忘れてはならぬぞ、日蓮一期の間口を開けば信心を勧め筆を取れば信心を勧め又しても又しても繰り返し〜〜〜といやうではあるが之が日蓮信心の勧め納め、よく聞けよ！返す返すも各の信心によるべく候。此の如く法華經の御精神を頂いて見ましても宗祖聖人のお思召を頂いて見ましても結局宗旨の必要なる第一の條件は信仰であります。取りわけ今般御取次を申し上げましたお自我偈の經文は極めて御親切に此信仰と云ふ事、及び修行と云ふ事、並に信仰と修行とによつて成佛の出来る委をお説き下されたお經文であります。御義口傳の御指南もヨクヨク味うて見ますと此お自我偈のお經文と寸分違はぬお思召でありますので今度は此お經文と此御妙判とに依つて「信仰と安心」と云ふ事をお話し致す事にいたしましたのであります。

壽量の肝要

釋尊一代の説法堅説横説三百餘會、之を支那語に翻譯して一卷二卷と藏に積み上げて見れば五千卷若くは七千卷、所謂一切經藏、此一切經藏の中の肝要は法華經、法華經の中の肝要は壽量品、此壽量品を末世の衆生が讀み易きやうに覺へ易き様に短く縮めて御説き下されたのが五百十字のお自我偈であります。されば五百十字のお自我偈は釋尊一代佛敎の肝要であつて釋迦様の魂魄、精靈であります。何故に此の自我偈が其程尊いかと申しますと、釋迦如來の價値が

立派に明に判つたのが此のお自我偈であります。佛様の價值が決まらねば教化を受けた衆生の價值も決まらぬのであります。學校の價值も生徒の價值も校長の價值によつて高下の差別ある如く主人の價值によつて店員までの價值が判る如く、釋迦如來の價值が尊く顯はれて來れば九界の衆生の價值も娑婆と云ふ世界の價值までも即身成佛娑婆即寂光と進んで來るのであります。でありますから此壽量品は釋迦如來の凡ての價值を度量にかけて見せて下された御說法であります。けれ共釋迦如來の凡てのお値打も命あつての物種で壽命が第一番であるから特に壽命を量り顯はした様に如來壽量品となつて居るのであります。其實此の一品の中には釋迦如來の凡ての功德が説かれてあるのであります。

且く此のお自我偈五百十字を大割にすると四段に分てるやうであります。第一番には自我得佛來より億載阿僧祇までの十二字はお悟がゆるいと云ふ事をお説きなされ。第二番目には常説法教化と云ふ處から及餘處住處まではお仕事の廣大なと云ふ事と説かれ、第三番目に衆生見劫盡と云ふ處から散佛及大衆と云ふ處まではお悟りの尊いと云ふ事をお説きなされ、第四我淨土不毀より速成就佛身まではお慈悲の窮りなき事をお説きなされたものと私は拜見したいと思ひます。無論此の四段の分け方は天台大師の説でもなければ誰の御意見でも御座いません。私の極々どつとした考へでありますから善いか惡いか存じませぬが一寸慙う割つて見たいやうな氣

がするのであります。其中で今般お取次をした一段のお經文は第二段のお仕事の廣大な事をお説きなされた中のお言葉であります。

釋迦如來は法華經壽量品をお説き遊ばすまでは御自分でも我は四月八日始めて誕生したので三十の歳に始めて悟を開いた新しい佛だとお説きなされたのでお弟子達も皆其通り新しき悟の佛であると思つて居つたのであるが考へて見ると不思議な事がある。と云ふのは梵網經と云ふお經をお説きなされた時分に娑婆往來八千返とお説きなされた事がある。けれ共お弟子達も何だか分らずに其儘で變だと思ひながら過ぎ去つてしまつたが、愈々お自我偈に來て聞いて見ると自我得佛來至億載阿僧祇、我の實際の成佛は今度此度三十の年に始めての成佛ではない、無量百千萬億載阿僧祇の昔に成佛したのである、常に法を説いて無數億の衆生を教化して佛道に入らしむ爾來無量劫なり。梵網經の時には娑婆へ往來した事八千返であるとお説きなされたが成程無量百千萬億載阿僧祇切の大昔にお悟りなされたお釋迦様じやもの、其より以來常に法を説いて無數億の衆生を教化の爲に此娑婆に八千返の御出入をなされたのであつて今度の四月八日の御誕生は第八千返目の御入來であつたと云ふ事が始めて判つたのであります。斯る廣大無邊の古き長き廣き遠き衆生教化のお仕事でありますが何時の時代にお出ましなされても、何處で教化遊ばされてもお勧めの道筋、凡夫を佛に仕上げて下さる順序次第と云ふものは過去も現在も

未來も三世くるはぬ御教化の仕事であらせられるので、無量劫の大昔より未來際の末まで釋迦如來の衆生御教化のなされ方は一分一厘もくるはぬと云ふ事が此の御自我偈で分るのであるが實に吾々は喜ばねばならぬ次第であります。其三世くるはぬ衆生教化の順序次第と云ふものは佛が何時までも生きて御座つては凡夫が馴れつこになつて墮落する即ち放逸着五慾と云ふて氣儘になつて佛道を修行せぬから方便して涅槃を現じ一寸假りに死んで見せなされる、其處で凡夫が驚き哀しんでせめては残つたお舍利を頂いて御供養申上げやうと云ふ佛を戀ひ慕う心が起る。其戀慕の心を起すによつて佛道を修行する。修行するに依つて成佛が出来る。此處だ！隠れて見せて戀慕の心を起さしめて、戀ひ慕うによつて修行する、修行するによつて成佛すると云ふ此の順序が久遠の昔より盡未來際まで千篇一律で狂はぬのが三界人天の大導師たる三世達の釋迦如來の衆生教化の秘傳であります。ヨク味はねばならぬ、味うて合點が出来たらば我等も此の順序さへ狂はねば成佛疑なき事を喜ばねばならぬ。信仰と云ふ言葉は近頃出来たやうに思ふものもあるかも知れぬが信仰の信の字は此の自我偈の衆生既信伏の信の字であります。信仰の仰の字は而生渴仰心の仰の字であります。凡夫を佛にするには第一必要なる條件は信仰であるから咸皆懷戀慕而生渴仰心衆生既信伏と説きなされた。其次に其信仰によつて實行を起し勵む相が質直意柔輒一心欲見佛不自惜身命であります。信仰と修行とに依つて成佛す

る相が時我及衆僧俱出靈鷲山と御説きなされたのであります。結局釋迦如來の三世常住の廣大無邊の御化導の仕組は信ぜよや、行せよや、佛になれるぞ、此の三段の組立て三世十方を押し通して御教化なされたのであります。幾度試みて見ても信仰と實行さへ合體すれば佛に成るは疑ないと見込みの附いた三段の仕組であるから狂ふ氣遣ひはない。法華經以前四十餘年間の飭細工のやうな衆生教化の仕方とは違ふ。さればこそ寶塔品の時には多寶如來は皆是眞實の證明あり、神力品の時には十方分身の諸佛廣長舌を梵天に附けさせ給ひ決定無有疑の證券印紙で保險の付いたる信念一行の成佛！此信ぜよ行ぜよ佛に成れるぞと云ふ三段を一言に言ひ縮めれば信行果の三字であります。此三段の順序はあるが行ずる時も成佛の果を結んだ曉も離れぬものは信仰即ち信心であります。で私は「信は萬行の最初にして而して又萬行の最終窮極なり」と云ひ度い。例へば穀を蒔いて苗となり稻となり遂に又穀となると同じであります。修行を始むるも信仰から出發せねばならぬ。而して又修行實行の最後も遂には信仰の中に落着かねばならぬ。結局信仰に生れ信仰に活き信仰に死すれば善いのである。だが千里の誤りは一步より起り、一年の悔は元旦に始まる。であるから信ぜよ行ぜよ佛に成れると云ふ其信じ始めの信じやうが大事であります。これからが愈々信仰とは何ぞやと云ふ問題に向つて正面よりの答へであります。信仰とは何ぞや！平易に云へば信心とは如何なるものだと云ふのであるが、信心とは如何な

るものだと尋ねられた場合には信ずる者があれば信ぜられる者がなければならぬ。難かしく云へば能信所信と云ふ事であるが馬でも車でも乗手があれば乗られる者がある、頭をたしかれたらたゞいた者があるに違ひない。殺されたと云ふから必と殺した者が無ければならぬ。信ずると云ふたら信ぜられる者があるに違ひない。其處で信仰とは何ぞや信心とは如何なるものだと問はるれば之を答へるには信ずる心の相と、信ぜられる者の相とを御談しせねばならぬ必要があります。信仰とは何ぞやと云ふ問題には此の信じ方と信ぜられる者とを混して尋ねて居るのであるから答へる場合には道筋を二つに分けて答へねばならぬのであります。

さて其信ずる方の相はと云ひますと、其相、其心持の様子を只今のお自我偈の經文に因其心戀慕とお説きなされ、而生渴仰心と説かれ又信伏と説かれてあります。戀慕と云ふ事は世間では多く男女の間に用ひられてあります。此戀と云ふものの心理状態を研究すれば信ずる心持がよく判るのであります。御祖師様も御妙判の中に(妙一尼御前御返事)

信心と申は別にはこれなく候妻の夫をおしむが如く夫の妻に命を捨るが如く(遺文一九四八)又上野殿御返事(遺文一八四四)

飢て食をねがひ渴して水を慕ふが如く戀て人を見たきが如く、病に藥を頼むが如く美貌人の紅粉を付るが如く法華經に信心いたさせ給へ

と仰せられてあるが、矢張りお自我偈の經文にお依りなされたのであります。試に戀と云ふもの、心理状態と云ふものから考へて見たら如何なるかと云ふに一心不亂と云ふ意味も有る(是一)意中の人は二人三人と掛代へがない唯一人を頼むと云ふ心よりすれば有難しと云ふ意味もある(是二)委せると云ふ意味もある(是三)疑はないと云ふ意味もある(是四)他人に餘念がないと云ふ處から云へば無難と云ふ意味もある(是五)夢寢寢食にも忘るゝ暇がないと云ふ處からすれば間斷がないと云ふ意味もある(是六)此人の爲ならば身命をも惜まない、華嚴の瀧も淺間の山も鐵道も切腹も驚かないと云ふ決心からすれば決定と云ふ意味もあるであらう。(是七)此人ならば大丈夫と思ふ心よりすれば安心と云ふ意味もあるであらう。(是八)己が戀人の前には何事も包み蔭しをしないと云ふ邊からすれば懺悔清淨と云ふ意味もある(是九)又何となく嬉しく楽しい心持である處からすれば歡喜と云ふ意味もあるであらう(是十)斯様な内容を含める戀慕即ち戀と云ふもの、心理状態を其儘信心の説明に用ひたならば信ずる時の心は一心不亂でなければならぬ。(是一)有り難しでなければならぬ(是二)委せねばならぬ。(是三)疑を除かねばならぬ(是四)雜りのない心でなければならぬ(是五)忘れる暇がないやうにならねばならぬ。(是六)決定の心でなければならぬ。(是七)安心でなければならず(是八)懺悔滅罪清淨心でなければならず(是九)歡喜心でなければならぬ(是十)以上は因其心戀慕の經文の戀慕の二字によつ

て信ずる心地を解剖して見たのであります。次に而生渴仰心とお説きなされてありますが此の渴仰と云ふ事は、渴とは咽喉の渴く事、仰と云ふは大旱の雲霓を望むが如しと申す言葉の通り大旱魃の時になると前の親父さんも隣の婆さんも長吉も三助も、日の暮の行水を了つて皆外へ涼みに出まして雲行の鹽梅は如何だらうと空を眺める、權兵衛さん如何でせう、お竹さん今夜あたりは一ト雨來ませうか、さやうさドーモ未だ降りませまい、仲々ドーしてお月様が赤う御座いますからね、なんと云ふて空ばかり仰いで居る。信心も又此の如く喉の渴く時に水を求めるやうに旱魃の時に天を仰いで雨を願ふやうな心地を以て信じなければならぬから之を渴仰心とお説きなされたのであります。それから其次のお經文に信伏とお説きなされてあるが、伏と云ふ字は、支那で文字を造る會意と云ふ方式から考へて見ますると大人に従ふと云ふ字でありまして人篇に犬と云ふ字が書いてある、飼犬は家の者が見えると兩手兩脚を投出して尾を振る、あれは疑はぬから信じて居るからであります。見た事のない人間が來ると犬の奴直に如何も變だなウロンを奴だぞと疑を掛けてウーと唸り出す、いよ／＼となると牙をひき出してワン／＼とやり出す、中々信じないから伏しはしない。されば信心と云ふは犬が主人の側に居るやうな心持になつて喜んで安心して赤子が母の懷にスヤ／＼と寝るやうな心持にならねばならぬのであります。普通世間一般の事で申しますと先づ信心は如何なるものでせうと問へば、先づ有

難いですと答へるであらう、が然し有り難いとは如何な氣持であると尋ねますと、左様さ矢張り有難いですと顔をしがめて見せる位のものであります。丁度砂糖の味は如何なるものだと云ふと砂糖は甘い。甘いとは如何な味がするかと云ふと矢張り甘いのですと舌を出して唇を嘗める位のものであります。唐辛は如何な味がするか、辛い、辛いとは如何な味がする、ピリッ、ピリッとは如何な味がする。ピリッ、信心とは如何な氣持がする。有難いとは如何な氣持だ、矢張り有難いでは薩張り分らぬ。世の中の日蓮宗の多くの信心と云ふものはマゝ大概こんなものだらうと思ふ。有難いとは如何なるものだと問はれた場合二の句が出ないやうでは駄目だ。さて其處で有難いと云ふた以上は何か其處に有難いものがなければならぬ信ずると云ふ以上は何か其處に信ぜられるものが無ければならぬ。今迄は信ずる心の心持の様子をお話したのであるが此からは其信ぜられるものは何であるかと云ふ事をお談しやう。

さて其信ぜられる信ぜられ手は何物であるかと云ふに、要するに佛法僧の三寶であります。扱其佛法僧と云へば佛様と、佛様のお説きなされた法と、佛様と佛法とを弘めて下されたお出家様の三つであるが、佛教の各宗には皆此の三寶のない宗旨は一宗もない。眞宗なれば立像の阿彌陀如來が佛で、三部經が法で、親鸞上人が僧、禪宗ならば應身の釋迦如來が佛で楞伽經が法で、達磨大師が僧で、眞言宗なれば大日如來が佛で、大日經と金剛頂經とが法で（宗祖は眞言

三部と云はれたから眞言も三部が依經なりと心得るが然らず三部は天台密教の扱で東密は二經也。弘法大師が僧。淨土宗なれば上品上生の座像の彌陀が佛で、三部經が法で、法然上人が僧である。天台宗なれば上品上生の座像の彌陀に法華經に傳教大師が三寶。此の如く各宗に皆佛法僧の三寶があるけれ共、然し人と云ふても天子様も人、樽拾ひも人、重々段々、先生と云ふても帝國大學の總長も先生、田舎の小學校の月給六圓の先生も先生であります。其と同じで佛法僧の三寶と云ふても其上下を等級づけて見ると千差萬別種々無量であります。其處で釋迦如來は自我偈の中で法華經本門に於て顯はれた尊き佛法僧の三寶を知らざるもの信ぜざるものを「以惡業因緣過阿僧祇劫不聞三寶名」とお説きなされてあります。此の信ぜられる物柄、即ち信ぜられ手の僧と法と佛との善惡を吟味するのが信仰と云ふ事に就て最も大切な事だ信仰でさへあれば何物を信じてもよいと心得てはなりません。世の諺に「鯛の頭も信心から」と云ひます。鯛の頭を神佛だと信じて居るやうな、なさない事がないやうにせねばなりません。

迷信正信と云ふ區別は正しき佛を正しき佛と信じ、正しき法を正しき法と信じ、正しき僧を正しき僧と信じたら之が正しき信仰であります。若しも不正のものを正しきものと信じたら之は迷信であります。結局信ぜられ手の正か不正かに依つて信仰の正不正とを區別して行くのが最も正確な迷信正信の區別法であると思ひます。即ち宗祖大聖人が國家論(遺文二七〇)と申す

御妙判の中に信仰を定めるには二種の法則キマリのある事を示しになつて居ります。一つには佛によつて信仰を定めねばなりません。結局世間の人が何と云はうとも釋迦如來の御本意に非ざる事は信じないのが之が人に依らないで佛によつて信仰を確立すると云ふ事です。二つには法によつて信仰を定める。之は釋迦如來のお説きなされた經文の儘を其通り信仰すると云ふこととあります。釋迦如來が法華經は一切經の中に第一なりとお説きなされた以上は法華經第一だと信じ、法華經が我が出世の本懷だぞとお説きなされたら其通り法華經は釋尊出世の本懷なりと信ずるが之が正しき信仰と云ふのであります。でありますから釋迦如來が信ぜよと仰せられた佛と法と僧とを信じ、捨てよと仰せられた佛と法と僧とを遠慮なく捨てねばなりません。さて然らば佛の中の最も結構な佛様、法の中の最も結構な法、僧の中に於ても最も結構な僧とは如何なものでせうか。

佛は久遠實成の釋迦如來、法は南無妙法蓮華經の題目、僧は本化上行の再生宗祖大聖人、之を名けて久遠本佛の釋迦如來、久遠本法の題目、久遠本化の大菩薩と云ふのである。どうせ同じく信仰を立つるならば善きものを善いと信じたいものであります。そこで此久遠實成の釋迦如來と本法の題目と本化の大菩薩を日蓮宗では三寶と名けますが、然らば多寶如來は何の爲で御座いませうか。之は久遠の釋尊と妙法五字と本化の菩薩を信ずれば必ず佛に成れるぞと證據

にお立なされたのが多寶如來のお役目であり御誓願であります。本佛は善き醫者の如く、題目はよき藥の如く本化の菩薩はよき看護人の如く末法の吾々は大重病人のやうなものであります此のよき醫者に脈を取つて貰つて成佛疑なしと見込をつけて戴き本化の菩薩の看護人の仰せを聞き妙法五字の良藥をば速取服之と信じたら無始の罪障忽に消滅し金剛不壞の丈夫な身體になつて即身成佛疑なしと保證にお立ち下されたが多寶如來のお慈悲でありまして恰も約定證に證券印紙をはつた様のものであります。こゝまで確かに出來上つて居る信ぜられ手の道具獻立が整つた以上は疑の掛りそらな筈はない。此上に尙ほ疑が起るとするならば如何に佛の力と雖も救濟の道は斷絶であります。畢竟それ等は惡業の因縁の爲に阿僧祇劫を過ぐれども三寶の御名を聞く事の出來ぬ罪人であつて、生れ代り死に代りて罪業消滅の時節到來を待つより外は無いのであります。さて信ぜられ手は久遠實成の釋迦如來、本法の題目、本化の大菩薩、此の本門の三寶であると云ふ事が判り、信ずる心持は戀慕心、渴仰の心、信伏の心でなければならぬと云ふ事も判つたが、然らば其本門の三寶が何故に有難いかと云ふ事を確めて置かねばならぬ。此の處を皆油斷して居るから信心とは如何なるものか、有難い、有難いとは如何なるものかと、こゝなつて來ると何だか知らぬが本門の三寶が有難いのだぞうだ位で實に曖昧朦朧とした信仰になつて了つて此處ぞと云ふ確な信仰と云ふものが立つて來ない。其處になると恐らく宗門の

學者と雖も漠たるものであらうと思ふ。信仰と云ふものは身分の高下にはよりませぬ。又學問の有無にも關しませぬ。何卒か皆さんは一日も早く、一刻も早く明な確な動かぬ信仰信念を作り上げて貰ひたい。でこれからは我々の信すべき本門の三寶が何故に有難いか何故に眞の寶であるかをお話しませう。

三寶の六義

久遠本佛と本法の題目と本化の大菩薩とを三寶と云ふて寶と名けさせるには六つの譯があるので、第一には希有難得と申しまして二つ三つと掛け代へないと云ふ事、第二には明淨無垢と申して明に淨らかなものであると云ふ事、第三には威徳勢力と申して御威光が高いと云ふ事、第四には能莊嚴と申して世の中の凡てのものを立派に莊嚴する作用があると云ふ事、第五には最上勝妙と申して此上無い尊さのものであると云ふ事、第六には不變常住と申して千萬年を経過しましても狂はないと云ふ功德があります。此六つの功德譯柄があつて寶と申すのであります。全體今迄の日蓮宗の信仰と云ふものは誠に不統一極まるもので多くの信者は鬼子母神ある事を知つて我宗の本尊の何物たるを知らず、或は妙見尊、或は清正公、或は七面天、或は池上、堀内の祖師あるを知つて肝心の本尊を知らず、世界救濟の大主人と云ふものは何物であるかを知らずに居るものが地方よりも却て中央の都會に多いやうであります。之は一つは地方よりも都會の方が實利主義に流れて居る證據であります。説教でも講演でも都會人と地方人とは聽方

信仰界の現狀

が異ふ。地方には眞面目の求道者が比較的多いに反して都會人には忠實なる求道者は少ない。此處へ行きますとどうも地方人には現世安穩よりも後生善處の要求が多い。都會人には後生善處よりも現世安穩の要求が多いやうに思はれます。都會人には道を求むる精神がない。只た金を求むる考へばかりであります。故に都會人を集めやうとするには、成金講演とか成金説教とでも廣告しなければ駄目だ。眞面目な説教や講演では人が出ない。ですから勢ひ人寄りの機會を利用して餘興的に講演説教を開かねばならぬやうになつて居る。實になさけないのであります。此處は大に寺院住職も布道家も一段の工風を廻らさねばならぬ處であります。又信徒それ自身も少しく省みて貰ひたい。今少しく眞面目に宗教と云ふものの性質根柢を味はうて貰ひたい。試に眞宗を御覽なさい。布教の盛んな事、信仰の統一せる事、信徒数の多い事、蓋し眞宗は信仰と云ふものに對しての條件が至極簡單で極く明瞭で一定して居る。第一布道家の思想が一定して居るから何人の法話でも千篇一律である。萬一一筋でも違へば異安心として御糺して以て破門である。だから信仰は統一の實が擧る譯であります。我が日蓮宗は布道家も學者も寺院住職も兎角蝸牛角上彼我を争ふ風があつて所謂島國根性とても云ひませうか互に相提携と云ふ事が出来て居らぬから能化者の頭の統一が出来て居らぬ爲に本尊に關する勸め方、別勸請許否、さては成佛論とか三秘論とか云ふ骨子の問題に對しても色々見解が異つて居るから、云

纏めて大體を信徒に向つて話そうと云ふ場合になると何と云ふてよいか確かな自信が持てぬので能化者自身がぐらついて居るから信徒は信仰が定まらぬ筈であります。我宗の信仰界は眞にどうも飽くまでも朦朧であります。此の朧月のやうな信仰界を澄み渡つた月のやうに、剛き上げた鏡のやうに明瞭になさしめ、我も人も共に一步淀まぬ、曇らぬ信仰を把持しようとするには如何にしても信ぜられ手の物柄を明瞭にして置かねばなりません。

別勸請の許否とか得意とかいふ様なことも是非解決をつけて置かねばならぬ問題であるから今此處で云ふてよろしいが、此問題も畢竟私の愚案よりすれば本末を混ぜぬ限りは別勸請も構はぬと云ふてよろしい。即ち本尊佛は久遠實成の釋迦如來唯一佛であつて其餘の諸菩薩も諸神も皆此の本佛の方便現し給へるものであると云ふ事さへ得意して居れば法華宗勸請の佛菩薩諸神に限つて之を安置する事を妨げないのであります。宗祖の日眼女抄(遺一〇八三)を以てよく了解出来る筈であります。だから本堂の正面に本尊佛を安置しないで諸菩薩諸神を安置するのは全く謗法であります。宗祖の御本意に背いた事は皆謗法と云へます。世の中には随分極端な主張者もあるが餘り極端に過ぎると稍もすると角を矯て牛を殺すの失態を招く事がある大阪府、京都府などは妙見尊に依つて改宗せるものが随分あります。熊本地方は清正公によつて改宗する者が多い。千葉縣東京府方面には鬼子母神によつて改宗する者が多數であります。

其等に向つて正面より鬼子母神や妙見尊や清正公を信ずるは迷信であるとか雜亂勸請だとか攻撃しますと折角鬼子母神妙見尊に依り清正公に依て得たる題目の信仰をも破壊する事があります。之には實例が少くないのであります。でありますから妙見尊や清正公や鬼子母神に依て得たる信仰を破壊しないやうに、其によつて次第に久遠本佛の尊きを知つて信ぜしめるやうに枝によつて本に、流によつて源に、久遠本佛の手本まで導かねばなりません。我宗の修驗祈禱は教田開拓の一方法であるから是非共必要であります。然し開拓以後の整理法は是非共布教家に依らなければなりません。恰も修驗家は外科醫、布教家は内科醫のやうなものであらう。だから修驗者は真面目の意味に自覺を以て布教家と一致して教法宣傳の業に努力して貰ひたい。此點が實に我宗目下に於ける寺院住職や布教家や修驗家たるものは一定の方針を定め極めて周到なる注意を拂ふべきだらうと思ひます。要するに本末を混ぜざる様にして種々なる方面より久遠本佛の尊き事を知らしめ妙法五字の尊無過上なる事を信ぜしむるやうに導かねばなりません。之が即ち釋尊の每自作是念以何令衆生得入無上道速成就佛身の御誓願で以何の二字の内容であります。古來我宗の先師の中にも以何の二字の解釋法に權教方便の意味を以て双用權實的に扱つた人があるが之は吾宗の網格ではありません。兎角我宗は一切を久遠本佛と妙法五字と本化の大菩薩に引き結びつけるやうに信仰の歸着を定めねばなりません。

今日日本佛教の信仰界の趨勢は恰も二大思潮としてよからう。一は釋尊崇拜、二は彌陀崇拜であります。大日崇拜もあるけれども殆ど彌陀に奪はれて居る有様であります。扱此釋迦彌陀二佛の勢力遂に何れに歸着するかは實に佛教と云ふ土俵上の一大見物であります。此時此際我日蓮宗の僧侶信徒たる者は力瘤を何れに入れてよいのであるか、投纏頭を何れにやるのであるか。信仰の統一は此處である。先に辯じた通り實際我が戀人が土俵の上に立つて勝敗を決する場合に到つたら貰入も羽織も時計も管も身命をも我が戀しき久遠本佛に一切を捧げ奉り投げ出す心にならなければならぬのであります。今日我が佛教界に向つて正しき信仰の統一を期するには此の久遠本佛崇拜の信仰を大々的に鼓吹せねばならぬのであります。而して其鼓吹の主動者、責任者は偏に我が日蓮宗であります。で私の希望よりしますると今の世の日蓮主義の唱道鼓吹も結構、法華經主義の獎勵も有難いが、今一つ進んで久遠本佛主義の唱道を盛んにして貰ひたい。思ひ返せば今より六百年前、宗祖大聖人の御出現は此の本師本佛の主義擴張の爲め披瀝讚歎の爲めであるのであります。勿論本佛法は往いては一體となるのであるが其は法體論の上の談で、法體論の上よりすれば三法一體、又は法佛人一體であります。けれども用、即ち作用、相即ち姿の上よりすれば如何しても法と佛と行人との別、特に佛陀と云ふ救濟主の客觀の本體を明瞭にして置かねば哲學と宗教との別が明にならぬ。信仰は客觀に起り、主觀に移り

主客合一に終るのが萬古不易の定義で御座いますから何處々々までも此様式は混じないやうにしなければなりません。

稍もすると本宗は本覺立脚だちである爲め（本覺無作三身如來が立脚點、印ち本來淨穢不二超脱の九識本法立脚なれば天台宗の穢を淨にする相待的始覺立脚八識中心思想とは根本立脚の差異あり）直に本體論に立入つて始覺即本覺と云ふ立場を脱線する事があるので困る（吾宗は且く天台と對する故に本覺立脚と云ふのであるが全く始覺を無視するのではない、即ち當家は本面迹裏で六即の位を立て、成佛も修行も始覺を離れない。壽量品五百塵點の成佛は始覺の成佛であつて、釋尊が我は本覺佛なりと本覺を始めて覺つたので此處を始覺即本覺と云ふのである）法體論よりすれば修行は全廢である。修行が無用なれば本尊も題目も祖師もない。信仰とか安心とか三祕とか五綱とか成佛とか云ふ事の組立は修行の上の相談である限りは如何しても救済主即ち本佛と云ふもの、觀念を明にして置かねば正式の信仰と云ふものは成立たないのであります。で私は此際、光の隠れ行かんとしてある久遠實成の釋迦如來の權威を大に振り起したいと思ひます。現宗門の布教界は恐らく此邊の注意を缺けるやうに思はれます。之は一人や二人の或る篤志布教家の力では實の擧るのが遅い。少くも今日の布教院諸師及び現在將來の巡回常任布教師が一樣に力を揃へて久遠本佛主義の怒號を激しくして彼の泡沫同然の彌陀の顔色をして

我宗本尊の
階着

木像論

蒼からしむるの大勇氣を持つて貰ひたい。無論教育家は教科書編纂員の如く布教家は學校教員の如く、寺院住職は家庭の父兄の如くであるから三者相俟たざれば完全なる功果は擧らぬ。が然し此主義の鼓吹に於ては各派の別はあるまい。恐らく宗祖本佛主義の富士派（日蓮正宗）と雖も異論はあるまいと思ふ。宗門信仰の統一は此久遠本佛の主義主張より先なるはないのであります。此主義の貫徹が極力成功した曉は十界本尊が文永式であらうが建治式であらうが弘安式であらうが、一尊四士であらうが、二尊四士であらうが、教門本尊と扱はれやうが、觀門本尊と扱はれやうが如何でもよろしい。其等は第二の問題であります。如何考へましても宗祖聖人（六老已下中九老及大先師を除く外上人と書すべし撰時抄往見）當時の御目的は彌陀を壓倒すべく起れる本佛論なる以上は宗祖の本尊論と云ふもの、定見は此から推論し割出されねばならぬ筈のものであります。して見ますれば久遠本佛本尊と云ふ歸着は動かすべからざるものであります。大體日蓮宗は宗義の内容から云へば極めて哲學趣味に富んで居るが然し其を其儘に宗教的に振回さうとするは甚しき誤解であります。此處に到りますと木像造立の必要も自然に起ります。さればこそ宗祖當代からして形像式を用ひられて居つたのであります。現に宗祖御自身としても伊東威得の立像釋尊を隨身佛と定め給ひ、御檀方の釋迦佛造立（日眼女釋迦佛供養事遺一八三〇）をも四菩薩造立（四菩薩造立抄遺一八五四）をも自ら開眼を行はせられ、或は御自

信仰と安心

三七

身で大黒天を彫刻點眼授與された形跡も御遺文(遺文十ノ富木書)に見えて居る。されば中山の一尊四士二尊四士が宗祖の眞作であらうが無からうが御遺文の上に既に佛像を是認されてある以上はよし中山の二具十一體の木像が後人の作なるにもせよ、それに依つて我宗の木像本尊が謗法だと云ふ事は云へぬ。況や宗祖當身の大事たる本尊抄に虚空會上の儀式を列ね給ひて來入末法始現佛像と仰せられてあるではないか。更に惑ふべきではないのであります。眞言の弘法が二教論の中に

文據^ハ執見^ニ而隱義^ハ逐^ニ機根^ヲ而彰^ニ

と云ふたが實にもそうである。然らば何故に宗祖當代に於て後世の異論防禦の爲に文字とか木像とか一定し給はなかつたかと云ふに予が如き凡識を以て聖境を測り奉るは實に恐惶至極ではありまするが其は文字に依つて入り易き者、木像に依つて入り易き者機根は萬差でありますから二者並存されたものと思ふ。然し強ひて末法今時の要領を得たる上よりすれば一幅の十界本尊で足りるのであります。若し然らば立像の釋尊一體としても同じではないかとも云へるが之は私も少しく考へを持つて居るのであります。と云ふのは若も十界本尊を捨て、立像釋尊一體を安置する事になつたならば或は五濁亂漫な末世としては遂に彌陀と混ざるの虞れがあると思ふのであるから萬一本佛の立像一體と十界本尊一幅との何れが得であるか失であるかと云ふ點

にまで進入して議論を試みるならば私は立像釋尊安置よりも十界本尊一幅がよからうと思ふ。かく申すと世の學者間には或は妄斷とも云ほふが私としては少しく據り處があるのであります。それと云ふは行學朝師の元祖化導記の中に宗祖御臨終の模様を記して左の如くしてある

「立像の釋尊を少しく傍に寄せて十界の本尊を掛けしめ給ふ云云」

文言は此通りではなかつたかも知れぬが確か此意味である。今回旅中書籍を所持しませぬので或は暗記の失があるか知りませぬが化導記によりますると立像尊を少しく傍に寄せられて十界本尊を中央に安ぜしめたと云ふ事になるが此處が多少末代を鑑みて萬一兩者何れか其要を得たるものかとならば形像より十界本尊一幅を可となすの意味が介在してある様に思はれるのであります。何となく傍の一字が形像と十界本尊一幅との傍正を表はして居る様な氣がする。然らば富士派の板本尊に祖像一體の安置は異論はないかと云ふ問題が起るであらうが、之は安置の形式に於ては異論はない。大崎大學の火災前の講堂奉安も十界本尊一幅と祖像一體であつたけれども得意が別である。富士派のは宗祖本佛論の意味に於て祖像を安置するのであるから釋尊が伴となつて宗祖が末法の本佛で主人公であると云ふのである。本尊抄の「本門釋尊爲脇士」の七字は「本門釋尊の脇士となつて」と云ふ意味で、其を誤解せる見解から起つて居る。本宗のは本尊は本佛、宗祖は光顯者として安置するのである。要するに宗門本尊の實體は久遠實成

本門釋尊
爲脇士
本宗
本門釋尊
爲脇士
富士派

の釋迦如來を、之を文字に顯はして説明し、木像に造つて説明する場合は久遠實成の釋迦如來は其體十方に周遍し三際に貫徹して壽命無量に(久遠偈四段之第一)化益廣大に(同第二段)慧光無邊に(同第三段)慈悲無窮(同第四段)であると云ふ事を示し下されたのが輪圓具足未曾有の大曼荼羅である。

凡そ宗祖御遺文中には七種八種の御本尊式が分れて居る。で一見感ふのでありますが、然し宗門一切の大事は本尊抄と御義口傳が根本であります。それは本尊抄を日蓮當身の大事と仰せられ御義口傳を六老僧が直に大聖人の御口傳だと名け給へるを以て動かぬ宗祖の御本意は此二抄である事が分らねばならぬのであります。其本尊抄には先にも云へる如く「其本尊爲體」と筆を起して詳細に虚空會上の儀式を列ねて之を結束して「來入末法始現佛像」と仰せられ、之を一層具體的に御義口傳の中には自我偈の時我及衆僧俱出靈鷲山の文に依て本尊の實體を指示しになつて居る。經文の上より申すと常住此説法の三世不滅の釋迦如來を見奉らんと欲して身命を惜まぬ信伏偈仰者があるならば其時には我及衆僧と俱に靈鷲山に出て、見せやうと云ふ經文であるが其を宗祖は「時とは末法第五時(大集經五種の五百歳の第五の五百歳・白法隱没の時にして佛滅後二千二百年の頃)の時なり、我とは釋尊、及とは菩薩、衆僧とは二乘、俱とは六道出とは靈山淨土に利出するなり、靈山とは御本尊、御本尊とは今日蓮の弟子檀方が南無妙法蓮

華經と唱よるもの、住處是也」と示されてある。要を取つて此の御義口傳の言葉を解釋して見ますると久遠實成三世不滅の釋迦如來を見奉らんと願まん行者があつたならば十界具足の大本尊となつて顯はれて拜ませやうと云ふ事になるのであります。其時節はと云へば因縁感應の時節は正像二千年ではない、末法に來入して二百餘年の頃であるぞと云ふのが「時は末法第五時也」の御言葉であります。是を先の本尊抄の「來入末法始現佛像」の御聖判と對照して見まするならば恰も瑠璃盤上に双壁を並べたやうな心地がするではありませんか。若し一度此處に着眼が出来たならば我宗一幅の大曼荼羅は即ち久遠實成釋迦如來の全體、全相、全用であると云ふ事は思ひ半ばに過ぎるであらう。而して之を宗祖大聖人御一期の隨身御立像の釋尊と連結して、而して船守書(遺文七卷)の立像佛に對する御説明を拜讀したならば愈々以て本尊の實體は三秘抄や報恩抄の御聖判の如く久遠五百塵點已來此土有緣深厚、本有無作三身の教主釋尊なる事は何人も議論をさしはさむ餘地はない筈である。之に異論があるならば御聖判に背ける大謗法であります。此の堅固なる立場から翻つて御遺文に散在せる凡ての本尊に關する御扱ひの不同は畢竟隨宜の御説法と見なさねばならぬのであります。其處で十界本尊の中にも文永式もあれば建治式もあり、弘安式もあるが何れを取るかと申しますと私は文永式にしても建治式にしても又弘安式にしても何れも宗祖の御眞筆なるものとすれば多少の様式に不同はありまして

も久遠本佛の實體を圖されたものに相違ないのであるから勸請の具略位で取捨をする事は甚だ以て間違つて居るだらうと思ひます。苟も佐渡後の上行内證顯發の御立脚地より末法萬年の一切衆生に向つての成佛の典範、安心の明鏡たる本尊の開顯なるからは文永十年より建治弘安近々十年間に於て本尊の價値に高下の差が生じたり、其體が狂ひそな筈が全然あるべきでないから様式の差別は唯一久遠本佛を圖し給へる上の同工異曲とでも云つてよろしいので左のみ力瘤を入れて取捨撰擇をすべきではありません。然し強いて何れを宗定の本尊とすべきやとなれば宗祖當身の大事たる本尊抄が文永十年卯月廿五日の御著述であるから其關聯上文永十年七月八日佐渡始顯の本尊でよろしいと信じます。され共之は私の信仰でありまして建治式が有難い人は建治式を信ずべく、弘安式が有難い人は弘安式を信じたらよろしい。其他十界の木像でも銅像でも畫像でも一尊四士でも二尊四士でも隨意に造立禮拜するもよろしい。要は如何なる形式でも苟も本尊として安置する場合は必ず其を久遠實成の釋迦如來なりと心得て一心合掌瞻仰尊顏供養恭敬し奉らねばならぬのである。

先づこゝ一つ本尊佛の實體を定めて置いて一安心が出来た上で大船に乗つたやうでも更に宗門學界の上を眺めますると種々なる男波女波のやうな疑問の動きが靜まりませぬ。それと云ふは十界本尊が久遠實成の釋迦如來の實體であるならば何故に十界本尊の中央に本佛の名號を置

かずして首題七字を書き顯はしたものであるかと云ふ疑問が起るのである。之は大體十界曼荼羅の圖式と云ふものは元々本尊抄の通り虚空會八品の儀式を其儘圖されたものであるから圖式の場合には虚空會の爲體の儘をお書きなされたものであるから釋迦多寶の中央に境智不二の南無妙法蓮華經七字が書かれてあるが其所詮を云へば結局虚空會の全體、全相、全用と云ふものは本佛の能證の智と、所證の境と一體不二となりて本佛の無量の壽命、無量の化益、無邊の慧光、無窮の慈悲が圓滿に備足した姿が其儘虚空會の儀式となるのであるから此大體の上より本尊の實體を考察せねばならぬので決して部分的に研究すべき性質のものでないのである。古來本尊相承として幾多の口傳類が傳はつてあるが爲に後人は動もすれば十界本尊に對して部分的な研究を試みやうとするものが往々出來て甚しきに至りますと大崎中等科の教壇にまで此口傳類を語るやうな輕卒な事を敢て爲て居るものがある。口傳相承の如きは切紙相承と申して唯授一人のもので殊に説教講演の席上や學生などに教壇に立つて披瀝すべきものではないのである。唯だ宗乘専門の教壇家が或場合に宗義の參考として發明に供する位の事に定めて置かねばならぬのであります。斯くしませぬと如何しても本尊でも何でも哲學的に流れやうとして議論がやかましくて遂に捕捉すべからざる一滑稽に終り、大なる信仰の妨げになる事が往々あるのであります。本尊は信仰の對象でありまして智識の對象ではない事をよく覺悟して置かねばなりませぬ。

せん。此中央の首題と傍邊の釋尊とが同であるか異であるかと云ふ事は中々議論のある事であるが私は只今の場合としては其等の事は申しません。申す必要がないのである。申すと反つて信仰が定まりません。

て事一念三千の題目とか本尊とかと云ふ事も論じて見れば色々の義理も扱ひもありませんが一括して申すと、事一念三千と云ふ事は本佛が久遠の昔に眞實の大悟をお開きなされた時に事實に如來の一念の上に天地法界森々羅々の萬象、有情非情、色心依正一切の諸の法が微妙の法であること映じた姿を事一念三千といふのである。(此説明は開目抄健抄に依る、天台の理事三千は凡夫の一念の上の靜動に就て云ふ、當家は佛陀の全體を云ふ)故に妙法蓮華經の五字を事一念三千の妙法とも云ひ、其大悟を離れて如來の本體は無いから本佛の實體たる本尊を事一念三千の本尊とも云ふ。ところ云ふ風に取扱つて成るべく宗教的に説明するやうにしたいのであります。兎角我宗の古來の學匠方の書籍を見ましても一念三千などの扱ひが如何も台家流に陥つて居て哲學的である。殊に優陀那和尙の一念三千論なんと云ふ書物は大した面倒のもので極めて哲學的である。信仰統一の資料には恐らく半錢の價値もないと思ふ。之に就て思出したが昨秋も今秋も名古屋に布教したが櫻町の石原清左衛門の妻は五十何歳の信女であるが名古屋の日蓮宗では知らぬものはない位の人であるが、私を招待して話が始めると直に語つて曰く、私は輪貫講

要を習ひました、西谷名目を教はりました。壽量品の宗義妙の講義を聞きました、三千論も拜讀してみましたと談したが私も感服した。成程法華經一部は僧侶とドシ／＼讀む、要品の眞讀は暗だ。讀めるのは結構だが在俗婦人として三千論を讀んで見て何れ程信仰を得たであらう。とひそかに氣遣つても見たり、なさけなくも思ふて見た。だから寺院住職も布教家も信徒に向つての讀誦以上の勧めは餘程考へて貰ひたい。萬事が信仰の統一に間に合ふやうに扱つて貰ひたい。そこで結局の處十界の本尊を佛本尊と扱ふか法本尊と扱ふかと云ふ間が起つた場合には佛本尊と答ふるがよい。其佛本尊に向つて妙法を唱ふるは何ぞやと問はゞ能證の本佛に向つて所證の本法を信唱するは此を能所一致境智冥合の姿なりと答ふればよい。禮法華式の中に妙法蓮華經大曼荼羅法寶とあるは且く中央の首題に就て立てたる禮數であると心得て置けばよろしい。であるから朝夕勤行の時に勸請するのに矢張り此立場から信仰統一の普及を計るには可成簡單にして三寶勸請の意味に定めて置きたいと思ひます。私は常に南無平等大慧一乘妙○經、南無輪圓具足未曾有大曼荼羅、南無末法大導師高祖日蓮大菩薩、總じて法華經勸請の諸天善神と勸請して勤經も引導も法要も一定に用ひて居ります。平常の回向の勸請式と云ふものは誠に大切なもので、これで信仰の統一と云ふものが出来て行くのであります。平常の回向の勸請が宗門の緇素貴賤一定せざる以上は信仰の統一は駄目である。私は十年前から「妙宗日用寶典」

を起稿せんと欲して骨だけは出来て居るが肉や皮やの仕上げに取りかゝる暇がありません。何れ脱稿の上は發表します。

扱此十界本尊を久遠本佛の實體と扱ふは壽量品の經文の儘なるが故に教門本尊の扱ひと云ひ之を進めて無作本覺の如來として主觀に移し我等行者の當體が本尊の實體であるとすれば觀門本尊と云ふのである。けれ共其は教門本尊の客觀に依つて信仰を確立し其信仰によつて得たる最後の歸着であつて始めから觀門本尊を信仰の對象とするは信仰の道程を誤つて居るので注意せねばならぬ處である。此邊の處が宗門信仰上教育家も布道家も脱線し易き處であらうと思ふ故に古來多く不注意に了られて居るやうである。以上は三寶の六義を辯じまするに就て先づ以て本佛の實體を定めたのであります。

序に本法の題目の本體を一應辯じて置ませう。本法と云ふは申すまでもなく本佛の本の字と同じ意味でよろしい。勿論本佛、本法、本化或は本迹と云ふ名目の扱ひには本地と熟字して扱ふ場合と本覺と熟字して扱ふ場合と兩意ありますが本佛の上で云つても五百塵點久遠實成の佛とすれば本地の佛である。本覺無作三身の如來と扱へば本覺佛である。本法と云ふも本地五百塵點の時の悟の法とすれば本地の法である。されど本有本法とか九識本法とか云ふ時は本覺の法と云ふ扱ひになる。本尊抄の終りに本法所持の人に非ずと書かれたるは本地の意味と心得て

宜い。本化の菩薩と云ふても五百塵點以來教化を受けられたる菩薩と云へば本地教化の菩薩と云ふ扱ひであり、本有無作の化益の菩薩とすれば本覺化益の菩薩と云ふ事になる。御遺文には兩様の扱ひになつて居るが、本佛を久遠實成の釋迦如來として本尊の實體を定めた以上は本法も矢張り本地の法として扱ふ方が宗教的になるのである。若しも單なる本來本覺の法であるとしたならば哲學の對象となつてしまふ(當體義抄の依正草木國土悉く妙法也との聖判は哲學的)然るに五百塵點實成の佛の智慧によつて照された法とすれば如來と云ふ救濟者の溫味を通したる題目となるから宗教的信仰の對象となるのであります。故に經文で拜見しても神力品の靈山別付四句の要文にも「如來一切」の四字が附せられて居る處が誠に有難い處であります。宗祖の本尊抄を拜見し奉りましても釋尊因行果德二法具足妙法五字とお書きなされて決して無味乾燥の題目として扱はれてはないのである。必ず成佛得脱と云ふ場合には如來の溫味を題目に持たせてある處に恰も病者として老婆の慈悲の籠れる妙藥を服するが如く、赤子が母の溫き乳を呑むが如く渴仰心信伏心戀慕の心が起つて始めて宗教的となるのであるから是非共久遠本佛と相對して扱ふ場合は久遠本地所證得の大法として扱はねばならぬのであります。事一念三千の扱も其通りであります。で本法と云ふ事はそれでよいとして妙法蓮華經と云ふ事は、法とは諸法と云ふ事で世の中の總てのものと云ふ事である。總ての物と云ふ中には天地宇宙間の一切の

有情非情山も川も石も草も木も飛ぶ鳥も走る獸も下は地獄より上は菩薩界に至るまで法界有情の進退ばかりではない、住んで居る世界まで皆悉くを込めて法と云ふのである。此の總てのものを無量百千萬億戴阿僧祇劫の昔（上は菩薩界に至ると云ふ事は一寸理屈がある。上佛界までの十法界の有情と云ふ事はないと云ふものは無量劫に成佛する迄は佛も菩薩であつた。それまでに佛様があつたのか無いのか。文句記の一に本佛の悟は獨悟であるか師匠があるのかと云ふ問に對して妙樂は無佛が正義なり、故に應點實成迄は佛界は無いから九界と云ふたのである之は壽量品の顯本論に於て五百塵點の佛様の悟は新成顯本である。顯本すべき本は無いと云ふのが天台の立場である。故に妙樂の説も無師説）釋迦菩薩の智慧で妙なりとお悟りなされた時釋迦菩薩の無明の煩惱一時に晴れ渡り、結ばれたる絲の解けたる如くバラリと解けて（佛陀の佛をホトケと云ふ和語に二義ある。一は歴史的意義で高麗から欽明帝の御代佛教傳來時信不信の問題から論議を生じ難波津へ佛像を捨てられたけれども後に拾ふて見たらホトケ々と温氣があつたから。ホトケ一は解けた人の意味盡諸有結三惡煩惱より脱したる人）如來とお成りなされたのである。されば妙をば微妙と云ふ事尊びと云ふ事である。宗祖は法華題目抄に妙とは蘇生の義なりヨミガヘルと申す事であると仰せられた。天地法界の有情非情は釋迦如來の智慧の光に照される以前は本來妙なりながらも妙の事業が顯はれなかつたのが（ワツトの蒸氣發明、フ

ランクリンの電氣發明は好例なり、蒸氣や電氣は發明者以前に有るのである、それが二人によつて事實として顯はれ應用されたのだ）釋迦如來の智慧の光に照されて六道輪廻の生死其儘までが、煩惱其儘までが、惡業の其儘までが、生死即涅槃、煩惱即菩提、惡業即解脱と蘇返つて來て、石も瓦も松竹梅までが當位即妙と顯はれたのであるから妙とは蘇生の義と仰せられたのである。此意味を以て彼の諸經法華難易事抄（遺文二十八卷）に照^ス生死長夜、大燈切^ニ元品無明、利劍^ハ不^レ過^ニ此法門^一歟（縮一九四九）と仰せられたお言葉も了解せらるゝ事でありませう。されば妙法は久遠本佛が天地法界の靈妙を看破された姿であるから之を宇宙の眞理であるとも云へる。又此を離れて本佛の智慧、悟はないのである。であるから直に佛智であるともいへる。故に御遺文にも妙法をば法と扱つてある處もあり、佛智として扱はれた處もある。蓮華の二字には當體と譬喩との二義あるが一口に云へば萬法が靈妙なものであると云ふ其靈妙の相や體を例へて見れば蓮華のやうだと云へば譬喩の蓮華と扱はれ、萬法は蓮華だぞ故に靈妙なものだぞと云へば當體の蓮華と云ふ扱である。經と云ふは世間普通判り易き解釋から云ふてもツネと云ふ訓もあり又堅絲と云ふ訓もある。義經と云ふ時はツネの訓で、經緯と云ふ時は横絲の緯に對して堅絲を經と云ふのである。妙法蓮華經の經の字には兩様の意味を含めて説ける本佛の悟の大法、天地宇宙の眞理と云ふものは經絲の如く三世十方に貫徹して常に變動する氣遣はないと云ふので經

と仰せられたのである。要を取つて之を云へば妙法蓮華經の五字はこれだけの事である。然し、妙法五字は天地宇宙の森羅の萬象が妙法なりと證せられた時の名であるとすれば名である(名)名を離れて體はないとすれば真理の體とも佛智の體とも云へる(體)又此妙法を信ずれば成佛が出来て如來と一致する事が出来るといふ上からすれば衆生を運載する乗物であるから一佛乘とも云へる(宗)(凡夫が佛まで漕ぎつける道程と結果)。其等の偉大なる動作、はたらしあるものとするれば妙法五字に於て力用を認める事も出来る(用)。又而して此の妙法五字は宇宙法界の靈妙なる事を知らしめ教えたるものとするれば教法だとも云へる(教)(天台は五重玄の五字を横に、妙を名に、法を體に、蓮を宗、花を用に、經を教に當て用ひ、又總合して五義を出す、今は兩義を含めて述ぶ)。此五字を八年に普遍して説かれて西方法華布一由旬(六町一里十六里)——玄奘の語——で八年の講録を羅什譯して一部となし、妙法蓮華經と題したとすれば法華經の題目だとも云へる。又此妙法五字が其儘法界靈妙の本體であるからには我等の身體が妙法五字だとも云へる。吾等の心が妙法五字だとも云へる。地獄をも餓鬼をも煩惱業をも妙法と云へる。であるから御遺文の中には種々の方面に妙法蓮華經が扱はれて居るのであるから(題目抄は一部の題目として扱ひ、當體義抄阿佛房抄は身が妙法だと扱ひ、十如是抄、初心成佛抄は心性と、諸法實相抄は地獄をも餓鬼をもと扱ふてある)感ばぬやうにせねばなりません。我

宗の優陀那和尚の學弟桓睿師が加賀の充治園に議論の花を咲かせて遂に哀れ破門の落花となつたと云ふも此五字の内容論に原因したのである。更に宗祖の聖愚問答抄を拜しましても判りませぬ通り、

凡そ八萬法藏ノ廣キモ、一部八卷ノ多キモ只ダ是レ五字ヲ説ンガタメ也、靈山ノ雲ノ上、鷲峰ノ霞ノ中ニ釋尊結_レ要地涌付囑_レヲ得ル_レア_レリシモ、法體ハ何事ゾ、只在_ニ此要法_ニ天台妙樂六千張疏連_レ玉道遂行滿數軸釋_レ竝_レ金併_レ不出_ニ此義趣_ニ

であります。抒すれば法界となり捲けば妙法五字である。

我宗各派の

我宗各派の中に於て妙滿寺派と本隆寺派は五字を本果妙と取り、興門、本成、八品の三派は本因妙と取る。本果妙と取るは久遠本法の意である。故に壽量品正意なり。即ち本法の出來た時をば主とするのである。本因妙と取るは下種と云ふ處に力を入れるからである。故に八品派の如きは壽量品よりも神力品を正意となす。従つて又宗祖本佛論の傾きである。之は至極明瞭した立義である。本因妙正意なれば神力品正意なるべく神力正意なれば宗祖本佛の主張は勢ひ行くべき筈である。興門は本因主でありながら壽量正意、壽量正意でありながら宗祖本佛と云ふのであるから理路が貫徹して居らぬ。本成寺派は本因主義で、而も壽量神力立角である。宗祖本佛は云はぬ。私に忌憚なく云はしめたならば、本果妙の題目で本因妙の題目でないと言ふな

らば壽量品正意にして末法には必ず脱益ありとするが至當なるべし、然るに妙滿寺派や本隆寺派は本果妙を主張しながら末法には唯下種益のみだと云ふ學者もあつて（妙滿寺日乗、玄義摺釋信行要義等代表的著述あり）理論の筋道が整然として居らぬ又本因妙の題目であつて本果妙の題目では駄目だと云ふなら神力正意にして末法は唯下種益なりとするが適當なるべし。然るに興門派等は本因妙主義にして壽量品正意、更に宗祖本佛であるから極めて不對の組織である。本宗は本尊抄の釋尊因行果徳二法具足妙法五字の聖判の如く本因本果圓妙具足の妙法にして壽量神力並用にして六即具足、種脱双用の立脚である。是等の事は布教家として一應意得て置かねば或場合に面を食ふ事がある。

本迹二門の一致とか勝劣とか云ふ事を論ずるにも並べてみれば種々なる義門はあるが要するに久遠本時の證得たる妙法五字の本源には二門の別はないのである。況や一致とか勝劣とか云ふ様な差別は無いのである。だが何故に宗祖が一門一部を双用し給ひながら二門の勝劣を嚴重に立てられたかと云へば天台の法華經を像法時代の扱ひで末法今時には無益であると云ふ事を主張せん爲に天台の解釋は迹門より見たる法華經なるが故に一部共に迹門となつて居る。日蓮は本門の立場から一部を見て一部悉くを本門の眼で解釋して末法時機相應の法として弘通するぞと云ふ風に天台を下さん爲に二門の淺深勝劣を立てられたのであると云ふのが本宗の大體の

主張になつて居るのである。勿論公平に判斷して見ても妙法五字の説明を出でぬ法華經一部である。と云ふ大體から考へて見れば久遠本佛の知見に照されたる本法の題目の上には縦し二門の分子を含んで居るにもせよ、其二門が勝劣のあり相な筈はない。若し妙法五時の中に勝劣の二分子を含蓄して居るとするならば一面は妙法でも其半面は即ち眞法であるから妙法とは云へぬ。天地宇宙法界の一切を悉く靈妙なりと大悟された此の妙法は一法の眞法もないのであるから本迹二門の分子を含蓄せる本源の妙法なる以上は二門共に妙ならざるべからずである。二門双壁の本迹が流れて八年の法話となり二處三會の儀式となり、一由旬に布ける阿難多羅葉の筆記となり、羅什の手によつて譯して七卷八卷となつたとして見れば（羅什は最初七卷、日本の石淵勳操僧正が法華八講の時八卷とした）如何して二門の勝劣のありそふな筈がない。然るに妙法の體内に尙ほ勝劣を認めんとするものあるは頗る偏執と云はねばなるまい。十界の本尊に對する儀式研究や取捨やさては本法の題目の内容に勝だの劣だのと云ふ様なコセツイタ芥子粒大の眼光で弄り合ひをして居る内に五百年も六百年も過ぎて仕舞て社會の物質界、知識界の文明は旭日三竿どころではない。日本文明の太陽は今や堂々として中天に輝いて居るではないか。早く宗門は各派の執壁を打壞はして僧俗貴賤一齊に久遠本佛の尊像のお前に蹲き久遠本法の妙法五字を異口同音に我慢偏執の心なく南無妙法蓮華經と唱え奉らうではないか。此の異體同心

の實行が現はれて、コソ廣宣流布の祖願は満足するのである。謬つて城者城を破るの失態を演じてはならぬ。已上は本法の題目の實體及其扱ひを辯じたのである。本化の大菩薩に對する概念は申すまでもない。扱是から此の三寶を寶と名けるに就て六義ある事を辯じやうと思ふが、三寶の六義であるから三六十八義を辯ぜねばならぬので布演する場合には一義一席に辯じても十八席を要するのであるから、とても十分の説明をする時間を持たぬ。だから布演は各自隨意力に應じて皮肉骨の三つを失はぬやうに説明すればよろしいとして今回は二つ三つを辯じて置いて餘日があれば話しませう。

希有難得

先づ第一に久遠本佛が何故に希有難得であるかと云ふに、此の久遠本佛は時間にも空間にも希有難得である。法華經に今此三界至唯一人能爲救護と説かれたは空間の上の希有難得である。天上天下唯我獨尊の句も矢張り空間上に用ひねばならぬ。嚴王品に佛難得值如優曇波羅華又如一眼之龜值浮木孔と説き給へるは時間の上の希有難得である。壽量品には本佛自らが我亦爲世父と説かれて居る。父が二人三人あつては大變である。されば我等の諸の苦患を救ひ給ふ御佛は久遠實成の釋迦如來御一體である。涅槃經には娑婆世界一切衆生の異の苦は釋尊一人の苦であると説かれて娑婆世界の一切衆生の諸の苦を釋尊一人で引受けて救はんと御誓ひ下されたのである。此の如き希有難得の唯一本佛なるが故に有難き佛様であるから寶と云ふのであ

る。次に本法の題目の希有難得にも時間と空間があらう。方便品の十方佛土中唯一乘法無二亦無三除佛方便説と説かれてあるのは空間の上の希有難得で、題目抄に法華經第一卷には聞是法亦難、第五卷には於無量國中乃至不可得聞「強敵に取られたるもの、許されて妻子を見るよりも珍らしと思し召すべき也」と説き給へるは時間空間を含めて希有難得の意味を説かれたのである。先づ（久遠本佛本法を説明するに述門の文を以てするは如何、是れ已顯の迹の意、十法界抄の釋の如し）唯一乘法無二亦無三の文を辯ずる場合に實證を擧ぐるならば提婆品の龍女成佛段を讀みますと、南方無垢世界に往いて普爲十方一切衆生演説妙法とあるから見れば南方無垢世界に於ける無垢勝如來の説法の衆生濟度も妙法である。文殊龍宮の教化も唯常宣説妙法華經の外はなかつた。然らば西方安養國彌陀の淨土と云へば觀無量壽經の九品の往生の第九下品下生の第一段によれば五逆十惡具諸不善の者が命終の時に臨んで善知識の勧めにより彌陀の名號十念の力によつて安養淨土の蓮の蕾の中に往生して十二大劫を経て愈々花の開くと云ふ時に勸音勢至微妙の音聲を以て諸法實相除滅罪の法を説くとあるが此諸法實相の法門は法華經方便品が源である。諸法とは法なり、實相とは妙なりで畢竟妙法と云ふ事である。四十八願の整ふた彌陀の淨土の安養世界でも五逆十惡具諸不善の惡業は彌陀の四十八願力で十二大劫を経て消滅はしなかつたのに時節到來して法華經の諸法實相の法門を一言聞いた功德で無量の罪惡

が一時に除滅したと説いてある。況や法華經の化城喻品を拜見すれば西方の彌陀は常樂說是妙法蓮華經だと説いてある。然らば地獄の底は如何かとみるに、天竺烏菟那國、佛種王の太子なりし眞言宗の善無畏三藏は或時頓死して地獄に落ちたりし時、法華經の今此三界の文を思ひ出したれば身體を縛りし七重八重の鐵の繩が弛んだはづみに聲張り上げて唯我一人能爲救護と叫ばつたれば七重八重の鐵繩一時に切れて四方に散し蘇生して門人に語つた事を宗祖は善無畏三藏抄(遺文廿の卷)に書き載せて、五天竺の大早魃に咒力を以て雨を降らした善無畏も地獄に落ちた其時は眞言秘密の力は役に立たず。法華經の經力に非ずば苦を免れなかつたではないかされば日本國の眞言の坊主共も眼を覺せと仰せられた。又支那の虞林通が地獄に落ちたりし時毎自作是念の經文を念じて十六の地獄忽ち十六の蓮池と變じたと法華傳記に見えて居る。法華經の中に破地獄の文と云ふのが二文あるが即ち此二つの因縁から始まつて有名なものである。されば下地獄の底に行つても、いざ惡業消滅の時は法華經の力でなければならぬと云ふ事が之で判るであらう。故に五逆の罪によつて現身に無間地獄に落ちたりし提婆達多も法華經に來つて天王如來の記前を受け、餓鬼道の鬼子母神十羅刹女も法華經の力に角を折り牙を折りて惱亂說法者頭破作七分の誓願を立てたでないか。然らば天上界はと云ふに都率天上の彌勒菩薩の本とに生るゝも法華經の力だと普賢品に説かれてある。されば南方も西方も上へ生れても下へ生

れても東西南北四維上下十方何へ行つて見ても拔苦與樂離苦得樂の一段には如何しても法華經の力でなければならぬのである。故に十方佛土中唯有一乘法無二亦無三と説かれたのである。此の唯一の二字に眼を附けて拜まねばなりません。前の本佛の希有難得の説明の中に引いた今此三界のお經文も唯我一人とあつて唯一と仰せられてある。此の唯一の二字は即ち希有難得の處を現はして下されたので此の難得の處を有り難しと云ふのである。此十方佛土中唯有一乘法無二亦無三除佛方便説の文は所有十方の凡ての佛法を一言にして振り捨てたる經文である。然るに淨土宗法然の大原問答に此の如來の金言を公々然として盗用し、十方佛土中唯有往生法無二亦無三除佛隨緣説(首書大原問答三右)と書きのせて居る。なんと驚くべき佛門の妖怪ではないか。眞宗の親鸞は和讃の中に久遠實成を彌陀に盗んで「久遠實成彌陀佛、五濁の衆生を憐みて釋迦牟尼佛と示してぞ伽耶城には化現せり」とうなつて居る。時恰も日蓮聖人の光明は關東に輝き及んで居たのだとすれば此親鸞の盜跡は所謂白晝の萬引である。禪宗では釋尊の降誕を白拈賊と云ふて居るが白拈賊と云ふは晝齋の意味であるが親鸞こそ白晝の齋である。蓮如も尻馬に乗つて「此處ニ彌陀如來ト申スハ三世十方ノ諸佛ノ本師本佛ナレバ久遠實成ノ古佛ニシテ今ノ如キ諸佛ニ捨テラレタル末代不善ノ凡夫五障三從ノ女人ヲバ彌陀ニ限リテ我獨リ救ハント云フ超世ノ大願ヲ起シテ我等一切衆生ヲ平等ニ救ハント誓ヒテ無上ノ誓願ヲ起シテ既ニ阿

彌陀佛ト成リマシケリ」と書いて居る何んと濟したものでないか。實に抱腹して更に絶倒せざるを得ない。されば久遠實成阿彌陀本願寺の勅號を文永九年十一月五日龜山院から賜つたと云ふ一説さへあると云ふので既に大日本佛教全書に輯録せる本願寺通紀第八卷(一三〇、一〇七)に載せてある。又同紀第十(一四二、一四六)に山城葛野郡川島村西山久遠寺記なるものを載せてあるのを見ると此にも「又傳。龜山院文永九年十一月勅シテ久遠實成阿彌陀本願寺ノ號ヲ賜フ、依ツテ久遠寺ト號スト云フ」と書いてある處を見れば彼の末輩等が競ふて久遠實成阿彌陀本願寺の號を勅許らしく仕組企んだ謀計の形跡が見えるのも笑止千萬の事だ。蓋し原因は親鸞や蓮如の主張に基いたものであるから謀計の罪根は親鸞に歸せざるべからずである。現行の「京華要誌」上卷には立派に本願寺の事の下に龜山帝文永九年覺信尼公(親鸞ノ季女)如信上人(同人ノ孫)ト共ニ一寺ヲ創シ久遠實成阿彌陀本願寺ト稱セリ、ソレヨリ蓮如上人(第八世)ニ至ツテ一宗ノ衰頹ヲ恢復シ其功大ナルヲ以テ中興ト稱ス、實如上人(第九世)ノ時大永元年門跡ニ準セラル」と記して居るは正確なる調査ではないか。然し京華要誌は明治二十八年京都市編纂局の手に成れるものとすれば現本願寺の一般は或る一部の學者を除くの外此勅號を信じて居るに相違ないが誠に氣の毒でもあり、其妄寧ろ惡むべきである。是等の事を日蓮宗の者が知らずに居る者が多いだらうから布教院生諸君に御注意申上げて置く次第である。布教家たるものは

時々機會を見て破邪の辯駁をも加えねばならぬ。久遠實成と云ふは一切經中五千七千の經卷中法華經壽量品の然我實成佛已來久遠若此の文より外には一句もないのである。阿彌陀如來が無量壽佛と云ふても凡歷十劫の文より見れば天台の扱ひの通り有量を無量と説いた丈のものである。其を親鸞輩は法華經壽量品の久遠實成の全文が美望に堪えぬ處から無斷に盗んで十劫正覺の彌陀に冠せしめて反つて久遠本佛の釋迦如來を久遠の彌陀の垂迹と扱へる不當さ加減は餘りに酷いではないか。諸君如何な感じがする。血は湧かぬか、骨は鳴ぬか、肉は躍らぬか。宗門信仰の固結は破邪門を潜れる顯正の信仰でなければ本物でない。明月が暗黒の雲を破つて現はれたやうに栗の實がイガを破つてムックと出た様にカッキリした水際の正しい鮮明な信仰は如何しても破邪の關門を潜つた信仰でなければならぬ。第一布教家自らの信仰が固まらぬ。實力がつかぬ。思想が柔弱になつていかぬ。大和魂と日蓮元氣と云ふものは一對となつて不朽に双美の榮を表はして欲しい。近來日蓮元氣なるものの勢は餘程下火の様である。考へれば考へる程日本と云ふ國と日蓮宗と云ふ宗旨は餘程立場と性質が酷似して居る。日本と云ふ國は小なれども神聖犯すべからざる國であり。而して負ける氣遣ひのない國であるからには外國から常に注目されて居る。云はゞ敵を受け易き國である。小さい國の割合に非常に強過ぎる國である。日蓮宗と云ふ宗旨も寺院數や信徒數から云へば現日本佛教中第五番目位のものであるが宗の成

立からずれば神聖犯すべからざる唯一法華の經王に依つて久遠實成釋迦牟尼如來と云ふ大覺王を中心として特に偉大なる活ける大聖人を抱いて居るから鬼に金棒、教權と本尊と開祖との立場は至極堅牢で負ける氣遣ひのない宗旨なるが爲めに諸宗から常に注目されて居る。云はゞ敵を受け易き宗旨である。されば我國が常に治に居て亂を忘れざるが如く國民皆兵の方針を探りつゝあるが如く我宗も「吾黨共二陣三陣打つゝけ」との司令長官の命に依つて何時にても一旦緩急の場合は各宗と應戦すべき準備に油斷をしてはならぬ。此日蓮元氣なるものは宗門編纂の根柢に湛へてなければ護法扶宗の念が起らぬのである。宗門皆兵主義であれば車夫も官吏も老若男女貧富貴賤僧も俗も自己の天職に處して而して性行を善良にすべく、三寶照鑑の下に一步一步他の嘲りを受けぬやうに向上の一路を辿る事が出来るやうになつて妙法は廣宣流布して行くのである。如何も現代は國民一般に自營思想が勝つて居るやうである。我を知つて國と云ふものを忘れかけて居るやうに思はれる。其は時代の影響か何か知らぬが現宗門も亦僧侶それ自身が寺院の爭奪とか僧階の賣收とか、法服の色彩とか云ふやうな事に没頭して宗門の發展策と云ふものに對しては宗局始め單に形式の上のみに現はれて居て根本的護法扶宗の熱情と云ふものが缺けて居るやうに吾等の凡眼には映るのである。蓋し宗門を通じて日蓮元氣の減退を表白して居ると見てよからう。此の減退せる日蓮元氣を恢復するには先づ以て布教家の怒號を願ひ

たい。之を怒號することは敢て現宗門を罵るのではない。畢竟家庭講話にも鐵道布教にも寺院布教にも各方面に向つての布教の骨なるものに日蓮元氣、法華氣質、本佛擁護の意味に仕組んで貰ひたいのである。法華骨なしになつては困る。苟も宗僧にして宗門の依經から唯一乘法を盜まれても久遠實成を盜まれても知らずに居るやうではなさないではないか。眞宗の布教家等は隨分地方に入り込むで動ともすると我宗を傷けんとして居る。無盡燈などにも時々日蓮上人を批評し惡し様に云ふて居る。現代の布教家たるものは新聞や雜誌を見ても時論や研究には餘程の注意を拂つて容赦ならぬ文句は見つかつたり次第どしどし反駁を試みねばならぬ。茲に至ると宗門の舊説(教)も宗祖の一代記の上に更に問答類を加へて練習して欲しい。

扱次には本化の菩薩の希有難得を講じませう。宗祖大聖人の御本地は申すまでもなく五百塵點の昔眞實の開悟を得られた釋迦如來の教化を受けた正嫡のお弟子上行菩薩にて在しますのであるが此の本化の大菩薩は菩薩中の大王、十方法界の一切の諸菩薩の及ぶべからざる唯一の大菩薩なるが故に涌出品に如來自ら讚歎して云く「人中之寶一切世間甚而希有」之が本化上行菩薩は希有難得の故に寶と名くる明文であります。此上行菩薩が日本に應現して日蓮とお名乗り下されたのである。然るに今も昔も同じく宗祖が上行の再誕であると云ふ事に對しては不信誹法の聲が四方に聞えるのであるが、宗祖の御主張は經文に本化の本法弘通の誓願があつて(神力

品の初め之に酬答すべく四句要法の別付があつたのであつたから、本化の菩薩の立場からしても如来の立場からしても付屬しながら再現せず要法を弘めずに止んだならば如来の鑑定が謬りとなり、菩薩の受取りが虚妄となり、其上神力品別付の式場には本化の菩薩と釋尊との寂然たる式場ではない。十方分身來集の公開の席上であつた以上は分身諸佛の廣長舌の證明も虚妄に屬せねばならぬ。されば時は末法、法は要法、其上末法に要法を弘通せば刀杖瓦石數々見擲出遠離塔寺の迫害を蒙るべしと云ふ如来の懸記に符合したとしてみれば日蓮の境遇を除いては上行菩薩の再誕らしきものは佛滅後(豎)闍浮提(横)に於て一人も無いではないか。されば日蓮は上行の再身であらうかと事實を立脚として源に溯つて論及された本地の開顯法は如何に進歩せる論理學者と雖も之を動す事は出来まい。此處が法華經の色讀である。法華經の文字が大上人に依つて活きたのである。活きた法華經とは即ち大上人の御一代だのであるから上行再身と云ふ事は理論ではない。事實である。されば偏執を離れて手を拱いて公平に冷静に考察して見たならば何人も首肯せざるを得ない筈である。全體支那でも日本でも再來説は其例少くないのである。傳大士は彌勒菩薩の再來、天台は藥王の再來、南岳は觀音の再來、妙樂は妙音の再來、善導は彌陀の化身、法然善導の再來、行基菩薩は文珠の再來、聖德太子は南岳の再來、さては親鸞の奥方玉日姫は六角堂の觀音様の再來だと云ふて居る。いやはや是等の再

來説に對しては不思議にも何等世人は不審を懷かず平氣で信用して居るにも關はず獨り宗祖日蓮聖人上行再來説に對しては邪僧真超已來今に至つても尙ほ日蓮の讚稱であると譽るものあるは實に奇怪千萬である。釋尊降誕の時天上天下唯我獨尊と高唱されたを聞いた波羅門共は天魔が湧いて出たと言つたけれども釋尊一代の事實が眞に天上天下唯我獨尊の言をして實ならしめた爲に五天の波羅門は舌を卷いて平伏したであらう。然らばよし宗祖が自ら上行の代官だとか再身だとか宣言せられないにしても事實上上行菩薩の責務を果された以上は事實上行の再身ではないか。凡て自ら叫ぶは自覺の表現である。釋尊は唯我一人能爲救護の自覺を以て三界に臨み、宗祖は上行菩薩の自覺を以て我國に現はせられ給ふたのである。而して其自覺の如く實行遂行された以上は其宣言の如く獨尊であり上行である事を承伏せねばならぬであらう。尙ほ私の考へた思ひ付きを申上げて宗祖上行再身の根柢を確めやうと思ふ。

抑も上行菩薩は地水火風空の五大の中では火の徳である。故に上るを以て行とするのである(生死一大事血脉抄)火の徳の菩薩なるが故に日の本の國の關東房州に日輪蓮華に乗じて胎内に入り給ふの吉夢によつて御懷胎遊ばされ、二月十六日釋尊入滅の翌日日出の時刻に御誕生、天には日天子輝き、地には時ならぬ春の半に蓮す花、云はずも知れたる日蓮聖人の御誕生の瑞相。建長の二字は末法萬年廣宣流布の意を表現し、五と云ふ陽數の年の二十八日は二十八品に

象り、日の暮方に非ずして旭日の森に打立つて旭日に向つて七字の題目高聲に六字の名號消え失せよ我は日本の柱とならん我は日本の眼目とならん我は日本の大船とならんと三願こめて御建立下された國と人と法との因縁感應の調和から一切を總合して靜かに冷やかに考察して見ますと如何しても宗祖は上行菩薩の御再身にして上行菩薩と七字の題目と日本と日蓮聖人とは深き／＼遠き長き關係が結び付けられて居る事がホク／＼と思ひやられるのである。又同時に無上の歡喜が湧き出るのであります。我宗中古の先師が宗祖の十徳を記されてある。今其を偈頌に縮少して申しますと、

- 一、建立妙宗
- 二、弘宣要法
- 三、顯示曼荼
- 四、持授戒壇
- 五、三諫國家
- 六、捨身折伏
- 七、持品色讀
- 八、後五契當

九、超過不輕

十、自顯本地

此の十徳を具足せる人は日蓮大聖人を除いて他に一人もないのであります。故に宗祖の御年五十三歳、文永十一年二月十四日に佐渡御流罪の御赦免狀が師孝第一日朗上人の手によつて三月八日に佐渡ヶ島に着し、十二日御出發廿六日鎌倉に御歸着、四月八日時宗公我が館にお招きに相成り愛染堂の別當と一千町の田地とを條件として四ヶ格言中止を促された。けれ共大聖人は肯ぜないで汚らはしいと塵を拂つて席をお立ちになつた。其後姿を見送つた時宗公溜息をついて胸の中で、ア、見上げた和尚だわいと感服して其日は濟んで翌五月二日認めて宗祖の許へ遣はされた梨地金紋の狀函、大聖人何事ならんと、解いて開いて御覽になると

頃年數多眞法威力御感最深三國比類ナキ妙宗、後代有難尊僧何宗是比日本國中宗弘妨ケ有ル可ラズ依而如件

文永十一年五月日 左衛門尉承 日蓮御房

と書かれてあつた。此宗牒の文句の中に後代有難尊僧とあるが眞に空前にして又絶後の大菩薩なるが故に有難き尊僧であります。此處が希有難得の功德ある末法救済の寶であるから僧寶と崇め奉るのである。以上これで久遠本佛に關し、本法題目に關し、本化の菩薩に關する骨

子の問題は略ぼ解決が出来て其扱ひ上に於ても一通り判つたであらうと思ふ。後の五義（三寶六義）は各自随意に敷演すればよろしい。

只だ第五の最上勝妙と第一の希有難得との區別を混ぜぬやうにせねば辯解法によつて同一になるのであります。第一は數の上に立てたる名目であり、第五は位の上に於て立てられたる名目である事を記憶して置かねばなりません。即ち堅にも横にも時間にも空間にも數の上に於ても無二亦無三唯一の三寶なる事を明らむるが希有難得であり、位の上に於て諸佛の及ばざる本佛、諸法の及ばざる本法、諸菩薩諸祖の及ばざる本化再身の大型人と云ふ事を顯はす方針、性質のものが即ち第五の最上勝妙である。此最上勝妙の功德を讚歎する場合の敷演法の參考に本法の最上勝妙の下では藥王品の十喻、法師品の三說校量は無論の事、天親菩薩の法華論の十無上、龍樹菩薩の大論の法華稱歎の文、妙樂大師の十双歎、傳教大師の秀句十勝等は是非共逸すべからざる堅固の材料、有力の證明である。十双歎と秀句十勝は遺文四の卷三種教相抄に圖が出してある。大論の文は遺文五の卷國家論に引いてある。天親の十無上は遺文の中には只だ第一の種子無上の名許りが開目抄に出て居るのみで其他は出て居らぬ。此十無上は經王の權威を高くらしむには内容に於て非常に充實して居る。よき材料である。特に天親は諸宗通用の論師であるから一層立場が丈夫で破邪の場合にも顯正の場合にも押し出しのよい法門であるから心得て置

きたいものである。ざつと紹介して置きます。全體此の天親菩薩は北天竺大丈夫國橋尸迦波羅門に三子ありて長は無着、末は獅子覺、仲が天親菩薩である。無着菩薩は都率天の彌勒菩薩に對面して大乘の法門を研究したと云ふ有名な瑜伽論の作者である。獅子覺も大乘阿毘達磨雜集論十六卷の作者であつた。天親菩薩は始めは十六羅漢の第一賓頭樓尊者に隨つて小乗を學び小乗論五百部を作つた。後兄の無着に説破されて遂に彌勒を請じて大乘を研究し大乘論五百部を作つて大乘の妙義を宣傳したので世に千部の論師と云ふのである。佛滅後九百年頃の出世である。宗祖も本尊抄に天親は千部の論師四依の居士なりと仰せられて居る。既に大小乗の論千部の作者であるから諸宗通用の菩薩である。特に淨土宗では往生淨土論の作者として崇拜され眞宗でも三國七高の中に數へて親鸞も和讃を作つて居る（龍華、天如意、曇拂子、栴香爐の道綽、赤善導、曲篆源信、珠數法然）。法華論は一卷本と二卷本のと二種あるが内容は別はない。畢竟法華一部の説相に就て七喻三平等十無上の法門を説かれたのである。十無上の法門とは一には種子無上、二には修行無上、三には増上力無上、四には領解無上、五には國土無上、六には説法無上、七には教化無上、八には菩提無上、九には涅槃無上、十には勝妙力無上、の十種であるが大體は法華經一經中一切の諸經の及ぶ事の出來ぬ超過拔群の法門を指摘されたのである。

第一の種子無上とは藥草品に依つて三因佛性を種子無上と説かれたのである。三因佛性とは正了縁の三性である。此三因佛性は一佛性の三方面で、佛性の體は正しきが持前であるが故に正因佛性と云ひ、佛性は了別の作用を持つて居て一句の法も聞く心になるのであるから了因佛性と云ひ、又佛性には佛を敬ひ善を修するの作用を有つて居るから縁因佛性と云ふ。此三因に依つて煩惱業苦の三道轉じて法身般若解脱の三徳を成就し法報應の三身の果體を顯現するのである。所謂正因の性を開發すれば生死苦果の依身轉じて生死即涅槃と顯はれ、法身の徳成就して法身如來の光り輝き。了因の性開發すれば煩惱道忽ち變じて煩惱即菩提と顯はれ、般若の智清淨にして報身如來の光輝き。縁因の性開發すれば業道忽ち變じて惡業即解脱と顯はれ、解脱の果圓滿して應身如來の光輝く也。吾等凡夫は煩惱業苦の三道の日暮しである。されど時には正念に住する事がある。之は正因佛性開發して苦道を變じて法身の樂果に住するのである。(正因開發) 又時には聞法歡喜信心の起るは了因佛性開發して煩惱道を轉じて般若の佛惠に住するのである。(了因開發) 又時には香華灯を供養し、人の善を讚し布施し精進し三寶を渴仰し佛壇を掃ひ、米錢喜捨等の志の起るは縁因佛性開發して惡業轉じて解脱の善根に住するのである。(縁因開發) 人と云ふものは苦しみをして見ねば樂しみの法身は得られぬ。煩惱の惱みをして見ねば安心の般若の明るさは判らぬ。惡業の惡戲をやつた事のないものは善根の價値は氣が附か

ぬ。だから惡業と煩惱と苦との三道の盜人を離さず殺さず上手に生捕つて吟味をすれば其奥には明皓々の三因佛性が潜んで居るのである。法華經已前では此三道の盜人を殺して了つて三徳の在り家を探そうとしたから三因佛性の玉は遂に見つからなかつたのである。故に法華已前の諸經には成佛の種は見付からず了つたのである。種子がなければ成佛は出來ぬ。故に如來は終不得成無上菩提と無量義經に説かれたのである。三因佛性の玉は三道の盜人の手に入つて居るのだから此盜人を殺さず活かして置いて次第に吟味をして三因佛性の玉を取戻すと云ふが法華經の諸法實相、一念三千の巧妙なる法門である。此の三因佛性が種子となつて三身圓滿の果報を得るので此種子を明したのが法華經、法華經の肝要が妙法蓮華經の五字であるから妙法五字は凡夫が佛になる種子を明した法なるが故に、法華經の題目を種子無上と説いたのである。されば妙法五字を離れ法華經を離れては成佛の種子は判らぬのである。此處を宗祖は開目抄に天親菩薩は法華經の種によつて種子無上を立てられたり、天台の一念三千と申すは是なり(縮遺七九三)と仰せられた。三道即三徳の事は始聞佛乘義(縮遺一七一號)又一念三千法門抄(縮二〇六下)が詳であります。それから此佛性と云ふ事を法華以前に全く云はぬか説かぬかと云ふに別教分齊の大乘教には菩薩に佛性を許せども三乘已下には佛性を論せず。(遺一九〇)であるから今昔對判の時は爾前を全部佛性を論ぜぬとするのである。佛性が本有の性質である

ならば十界平等であるべき筈であるのに菩薩にのみ佛性を固有して他の有情には固有しないと云ふ事は甚だ不合理である。法華經に來りて諸法實相本末究竟等と説かれてあるを見れば十界平等に（實相抄に、本とは凡夫末とは佛とあり究竟とは結局、等は平等、十界平等を云ふ）三因佛性本有であると云ふ事が顯はれてこそ十界平等に成佛する道理が成立つ、其處を種子無上と云ふのであるから此種子無上は獨り法華經に限るのである。

第二に修行無上とは法華論では化城喻品の過去大通佛の三千塵點の昔に十六王子が佛に轉法輪を請じ且は四衆八部が佛を供養し或は十六王子が常に梵行を修し、出家して大通佛の説法を聞て更に覆講し遂に成佛したと云ふ往昔の因縁廣大の修行を無上だと説いたのであるが、畢竟此の廣大の修行即ち大通佛の説法も四衆八部の供養も十六王子の請轉法輪常修梵行も法華覆講も十六王子成佛後の常樂説法も皆法華經の修行であるから法華經の修行の行體の廣大なる事を往昔の因縁によせて表はしたと云ふ事になるのだから法華經の修行の行體を無上と説いた事になる。之を推し擴めて行けば方便品の小善成佛も修行の無上である。法華以前の教々では人間界や天上界の五戒十善の小善では成佛の果を得られるものでないと説かれてあるのに法華經に來れば童兒の戯に砂を集めて佛塔を造るも低頭擧手、彈指散華の微善までが皆悉く成佛得脱の修行であると説き法師品には須臾聞此即得究竟阿耨多羅三藐三菩薩と説き、隨喜品には一念隨

喜の修行の功德は八十年の布施の行に超へたりと説き給ふは是皆な修行の無上である。

于蘭盆抄の法華經を信じ參らせし大善は乃至皆共成佛道の御聖判は即ち化城品の文に依つて法華經の修行の廣大なる事を仰せられたので丁度此修行無上の法門に合するのであります。五種頓修とか一行一切行とか云ふ事も此の修行無上の事でありませう。又寶塔品の此經難持偈も此修行無上の意である。此經難持偈の大體を序に一寸辯じて置かう。文を見ても判ります通り行が四つ功德が十二です。行が四つとは持と讀と説である。始めに若暫持者とは持の修行、次に讀持此經は讀の修行、次に能解其義は解の修行、最後に能須臾説は説の修行である。功德が十二とは一には我即歡喜は釋尊の歡喜、二に諸佛亦然は諸佛の歡喜、三には諸佛所歎、四には是則勇猛、五には是則精進、六には是名持戒、七には行頭陀者、八には則爲疾得無上佛道、九には是眞佛子、十には住淳善地、十一には是諸天人世間之眼、十二には一切天人皆應供養、そこで始めの若暫持者の行者は十二の功德の中前八種の功德を得、次に讀持此經の行者は更に二つを加へて住淳善地までの十種の功德を得、次の能解其義は更に一の功德を加へ、天人之眼までの十一種の功德を得、最後の能須臾説の行者は更に又一つの功德を加えて十二の功德全部を得るのである。在家出家の功德別をも之によつて示されてるのである。得授職人功德法門抄は道俗の分別を明瞭にされた御聖判であります。尙ほ此の偈六行九十六字の要文に對しては宗

祖特に十三ヶ秘決を記されてあつて遺文十一の卷に編入されて居る。我宗唱題の後に此の偈と四句要法を讀誦するは四句要法は所持の題目の功德を説た經文である。難持偈は能持の行人の功德を説いた經文であるから併せ讀んで正行の信念を助長するのである。四句要法を讀まぬ流もあるが強ち偏執するには及ばぬ事であらう。難持偈を讀めば四句要法をも讀んだ方がよからうと思ひます。

第三に増上力無上とは法華論の上では化城品の三百由旬化作一城の上に更に五百由旬の寶所を示したと云ふ譬の一段に依つて法華經は五百由旬の大寶所へ引入せしめたる經なるが故に三乗が悉く一佛乘に増上と進入せる力ある經王だと云ふので増上力無上と云ふ一條の法門が組立てられたのである。更に此の意味によつて敷演開説して見たならば方便品には如我昔所願今者已満足と説かれて釋尊出世の本懐が法華經に來つて十分に伸長し増上し満足した化一切衆生皆令入佛道の經であるから増上力無上である。授記品に依れば目連須菩提迦葉等の弟子が口を揃へて如以甘露灑除熱得清凉如從飢國來忽遇大王饌と説いて吾等は華嚴の時は如響如啞で半錢の得分も得られなかつた。阿含十二年の間は人天有漏の善根を修して人天に生るゝ因果の説ばかりで濟んで了ひ、方等十六年の間も敗種破石と嘗られ山水は山に歸るとも二乗は成佛すべからず、枯樹花を生ずとも二乗は成佛すべからず。と呵責の聲のみ身に泌みて遂に成佛の聲はか

いらずしまひ。般若經十四年間の説法も法の平等は顯はれたけれ共未だ人の平等は顯はれなかつたので矢張り成佛の望みは満足せず。此の如く四十二年の間は成り度い佛に成れず、何時か何時かと待ち兼ねた有様は恰も早魃に水を求むる如く飢て食を願ふが如くでありしに「岩間とじ氷も今はとけ初めて苔の下水道とむなり」。今正是其時の時節到來して諸法實相の春風に一切衆生の煩惱の水解け初めて菩薩の道に流れ入り、本末究竟等と十界平等に即身成佛だぞと聲の掛つた其時は甘露を灑がれて大旱の熱を除き大王の膳部に座つて飢たる腹を満した様なうれしさが致しましたと満足が出來て譬喩品の時は踊躍歡喜と雀のこどりの如く飛び上つて喜び、信解品には甚自慶幸獲大善利無量珍寶不求自得と、自らが無上の幸福を喜んで能化も満足所化も満足、の出來たのが法華經である。故に天台大師法華序品の釋に僧肇の語を引て法王啓運と釋された。法華經已前は能化の釋尊も所化の弟子方も顔の皺が展びなかつたのである。不愉快極まる有様であつたのが法華經に來つて快く安穩なる事を得たので身意泰然となつたのが法華經の増上力無上である。爾前經は減縮的であつたのに反して増上力無上である。されば地獄も餓鬼も畜生も修羅も皆悉く此の増上力によつて成佛した。眞宗には惡人正客と云ふて居るけれ共肝心の大無量壽經の四十八願の第十八願には唯除五逆誹謗正法とあるからには、五逆と誹謗正法の罪人は往生はかなはぬ。淨土宗でも眞言でも此文を釋尊の抑止で彌陀の願力不足で

ないと云ふが願力不足でないにもせよ事實抑止されて往生出来ないとするれば所謂五十歩百歩論で畢竟五逆と誹謗正法は願力に漏れたのである。觀無量壽經下品下生が五逆十惡具諸不善であるけれども十二大劫の蓮の蕾の中の籠城では往生したもせぬも同じ事である。兎も角も法華經には五逆の提婆地獄の罪人が立派に天王如來となつた誹謗正法の罪人も懺悔すれば衆罪如草露と結經觀普賢經に説いてある。茲が所謂高山の水は深谷を活ぼすの諺の通り、極大の經力は極惡のものを救済し引上げる力があるのである。之を増上力無上と云ふ。さればこそ天下泰平も國土安穩も五穀豐饒萬民快樂も家内安全も子孫長久も病氣平癒も臨終正念も此の妙典に過ぎたるはない。劔形抄(遺一八九〇)持法華抄(四七五)生死血脈抄(七四四)可延定業抄(一八二七)等を拜見して信仰を増さねばならぬ。此に就て思ひ出したが四條金吾抄(一六三四)に日蓮今生の祈なしと仰せられたは諸君如何解釋します。試みに答へて見給へ。中興入道抄(一九二四)の塔婆供養、鳥獸得益の御聖判に對する得意なども矢張り増上力無上の法門であります。凡て現未の祈願成就は此の増上力無上によりて説けるのであります。

第四に領解無上とは法華論では五百弟子品の繫珠の喩に依つて釋尊が昔曾て成佛の種子を植えて置いて下されたことを今經に來つて始めて二乘の人達が領解したと云ふ大體を領解無上と立てられたのであるが畢竟昔の成佛の種を領解し合點すると云ふ事は即ち自覺であるから此の

自覺の意味を更に推し弘めて云ふならば迹門は心の尊き事を説かれ本門は身の尊き事を説かれたのである。迹門の諸法實相と云ふは要するに十界平等に佛性を具足せる事を意味したものであるから心の尊き事を説き示した事になる。本門の久遠實成の法門も文の表は佛の成佛の久遠であるけれども其實は釋尊の三世常住に寄せて一切衆生の三世常住の壽量即ち換言せば生死常住と云ふ事を教へられたものであるから身の尊き事を教へて下されたと云ふ事になる。されば分別品の一念信解と云ふも略解言趣と云ふも廣爲他說と云ふも深信觀成と云ふも隨喜、讀誦、説法、兼行六度正行六度と云ふも結局は我身の上の尊き事を自覺した。其自覺の分量の淺深多少の階級を分別したものと見られるのである。換言せば領解の仕方の巧拙を等級別をしたのである。かゝる色心二法の自覺は法華以前に於ては夢にも見る事が出来なかつた。唯だ法華經の賜物であるから法華經は領解無上の經であると云ふのである。故に此の領解無上の段では自覺の事を十分に説明してよろしい。寶塔品の五百由旬の大寶塔は地水火風空五大造作の肉身の廣大なる事を教へ中の多寶如來は心法を意味し出大音聲讚言善哉は信仰の響であると云ふ風に説ける。御義口傳の自我偈五百十字の初と終は自身の二字、中間の五百八字は受用の相、されば五百十字は自受用身の所作振舞なりと示された聖判や勘文抄の八萬聖教は吾等の日記文章や、阿佛抄のさながら寶塔や、十二因緣抄の法華經を知らざるは我身を知らざるなりや、其他當體

蓮華義抄や、無作三身抄やは此自覺を教えられたものなれば此段で説ける。

娑婆即寂光

第五國土無上とは法華論では寶塔品の三變土田の事を國土無上と云ふのであるから之を推し廣めて説けば壽量品の我此土安穩の説明、本國土妙の法門にまで、進入して行けるのである。結局娑婆即寂光と云ふ事であるが此娑婆即寂光と云ふ法門は爾前四十二年間の經教には娑婆以外に淨土を説かれたに對して娑婆が其儘寂光の淨土であると説かれたのであるが寶塔品の三變土田は釋迦如來が十方分身の諸佛を收容遊ばされるに就て神通力を以て穢土の娑婆世界を淨土と變化されたので娑婆が其儘淨土となつたから娑婆即寂光と云へるけれども壽量品の娑婆即寂光に比較しますと寶塔品のは釋迦如來の神通力によつて四惡趣を淨土にし人天を他土に移し大海江河及諸川をわさ／＼平等にし通じて一佛國土となつたと云ふ改轉的の作爲を要したるは素瓶不畫氣品高ではなくて點來丹青下ること一等等と云はねばならぬので本尊抄には「夫始自寂滅道場華藏世界終于沙羅林五十餘年之間華藏密嚴三變四見等之三土四土皆成劫上無常土所變化一方方便實報寂光安養淨瑠璃密嚴等土也能變教主入涅槃所變諸佛隨滅盡土亦以如是」と仰せられて寶塔品の娑婆即寂光も爾前の淨土の例に扱はれたのである。其に對して見ますと壽量品の娑婆即寂光は我此土安穩、天人常充滿で寶塔品の様に移諸天人置於他土ではない。御義口傳の所謂いろはずつくるはず本の儘と云ふを久遠とは申すなりで山川草木瓦礫荆棘を久遠

の昔に妙法と開覺されたのであるから眞に娑婆即寂光素瓶不畫氣品高き處で本有無作の眞面目本地の風光如來如實知見三界之相無有錯謬なるものであります。直なるもの、曲なるもの、青きもの白きもの聳ゆるもの流るゝもの、細く長きもの廣く太きもの、高きもの低きもの、日暮れ夜明け、風吹き雨降り雲蔽ひ霞棚曳き鳥飛んで天に到り、魚淵に躍る、皆是れ天地本來の面目其を其儘にして有の儘を靈妙なりと知見されたのが三界之相を如實に知見された姿である。禪僧の一休が道傍の大きな曲れる松の木に立札をして「此の松を眞直に見るものありや」と書いた。通る程の人々が種々に苦心して、何處かに眞直に見へる處があるに違ひないと左へ廻り右へ廻り、上へ上り下へ這入つて見たが如何しても眞直に見えぬ。或日例の蟻川新左衛門が通りかゝつて立札を見てア、又一休の惡戯和尚奴と腰の矢立を取出して立札の端へもつて行つて、此松曲れりと書いた。一休翌日丁度其處を通つて其返答書を見て、オ、新左衛門でかしたわいと立札を倒したと云ふことであるが曲を曲と見、直を直と見るが如實の知見じや。凡夫と云ふものは法の有の儘を達觀すると云ふ事が出来ぬ。自己と云ふものを忘れると云ふ事が出来ぬから己の思ふ通り見やうとする爲に無理がかゝつて自由にすら々と解けぬのである。「惜し欲しや憎や可愛がやみぬれば今は世界は丸で我が物」と云ふ歌の通りで、自己と云ふものを忘れて法の儘に任せて達觀する事が出来れば世界は廣大なものである。世の中は四尺五寸とな

りにけり五尺の體置き處なし」と云ふも自己の心に惜しい憎い可愛があるから氣に入る方へは行く、氣に入らぬ方へは行かぬ。可愛い方へは與へる、憎い方へは與へぬ。故に廣い世界を我と我が手に縮少して了うのである。人は自己と云ふものを中心として萬物を眺めやうとする時は自己の欲する如くに見るものであります。色眼鏡を以て見れば色の如くに映ずるものである。五欲の眼鏡に依て五色に映するのである。或る鼻下長が理想の妾を希望して苦心していた矢先一日市中を散歩して居ると向ふから希望みの妾くくとやつて來たのでどれと云ふて近寄つて聞いて見たら鋸の目立であつたと云ふ。田舎の婆さんが汽車に乗つて晩方に小便がしたくなつた。汽車は或る驛へ停車した。すると窓の外からバンに新聞!とやつて來たので田舎の婆さん、晩に小便と聞いて飛んで出たと云ふ滑稽談がある。淮南子と云ふ書物の中に其人を愛すれば即ち其屋の烏を愛すとあるが戀人が居る家だと思ふと家根に止まつて居る烏までが戀しくなる。烏は阿呆々々と呼んで居る。坊主憎けりや袈裟まで憎い、何と凡夫はなさけないものではないか。佛はかゝる凡情迷情を離れて正知正見を以て諸法の眞實相を照見されたのであるから天地法界の其儘が悉く靈妙なる活動の本體であるとお悟りなされたのである。其時の世界觀が我此土安穩で娑婆即寂光の法門であります。だから畢竟穢土と云ふも淨土と云ふも土に二つの隔てはない、唯心の善惡(一生成佛抄)で、土體は娑婆の一つで見方によつて淨土ともな

り穢土ともなるのである。故に經文で拜見しても衆生見劫盡大火所燒時、或は我淨土不毀而衆見燒盡と説かれてある。見の字は凡夫の妄見を示されたのである。それに對して如來如實知見三界之相とは佛知佛見を示されたのである。凡夫は情を根本として見る、佛は智を根本として見る。(情知相對)今一層明瞭に云ふならば凡夫の智慧の眼には情と云ふ曇りが覆ふて居るから情の曇りに遮ぎられて三界の有の儘の實相、本來の眞面目が見えぬのである。如來の智慧の眼には情と云ふ曇りが晴れ渡つて居るから如實に三界の相を知見し給ふ事が出来るのである。であるから本尊抄の四十五字の法體のお言葉の中に三災を離れ四劫を出でたと云ふ出離の二字も絶無の意味に解釋してはならぬ。出離の二字は凡夫の妄見を遮ぎつた言葉である。三災四劫は天運の循環、生住異滅、生老病死や春夏秋冬、興亡盛衰、月の虧盈、花の開落、皆是れ天地本來の面目である。之れあるが故に、法界は靈なるなり。之あるが故に人類は盡さざるなり。然るを凡夫は三災四劫を斷絶せしめて、其處に樂邦を見んと欲するは甚しき氣儘の妄見、不可能の希望、天地の自然に敵する誤りたる考へであるから經文では不如三界見於三界と説かる。三界の凡夫が情の眼鏡を以て此三界を見るが如き見方は仕ないと云ふのである。本尊抄の出離の二字も其意味で三界の凡夫が三災四劫に對するやうな見方を超越し出離したる佛知佛見に照されたる事實の寂光と云ふ事である。此處まで進んだ娑婆即寂光でなくては久遠本地の佛見によ

つて照されたる娑婆國土は靈妙であると云ふ事は出來ぬ。本尊抄四十五字の法體は自我偈の我此土安穩から散佛及大衆までの文によつて記されたものであるが、此一段の經文は前にも辯じた通り、自我偈四段の中には如來の悟りの尊いと云ふ一段である。其悟の内容は法界の依報の國土と正報の身心とが皆悉く微妙清淨なるものであると云ふのが久遠本時の悟て之を綜合的に概括的に結束して妙法蓮華經と稱するのである事は前にも云ふた通りである。其法界の依報の國土の靈妙觀を娑婆即寂光と云ふので本國土妙とも云ふ。法界の正報と云へば佛界の色心と九界の色心とを含んで居る。其佛界の色心の靈妙を本果妙と云へる、九界の色心の靈妙なるを本因妙と云へる。そこで此本果妙と本因妙と合せて十界の正報の靈妙觀を即身成佛と云ふのである。經文の我此土安穩は本國土妙で散佛及大衆は本因妙と本果妙とである。四十五字の法體で云へば「今本地○淨土也」とは本國土妙で、娑婆即寂光で即ち依報觀である。「佛既に○未來不生」とは本果妙で「所化以同體也」とは本因妙、合せて即身成佛即ち正報觀である。依報觀は土の妙、正報觀は身の妙なれば、約言せば身土皆妙と云ふ事が如來の悟にして、如來の安心四十五字の法體、宗門安心の妙處である。畢竟換言すれば娑婆即寂光は久遠本佛の宇宙觀、即身成佛は本佛の人生觀と見てよい。右の大意を圖に縮小するならば

◎本佛之悟



此中で即身成佛の法門は後に辯じます。生死常住の法門も出るのであるが之は便宜上涅槃無上の處で辯じる事にしませう。今は即ち國土無上、娑婆即寂光の法門に止めて置く。

第六說法無上とは之も法華論では安樂行品の

此法華經是諸如來第一之說於諸說中、最爲甚深、乃至始於今日、乃與汝等而敷演之。と云ふ文に據て法華經は長夜守護不妄宣說の大法なるを始めて今日敷演されたのは實に無上の說法であると云ふので說法無上と立てられたのであるが、此の意味から一經の中の此種の類を此處で説明する時は前にも紹介した通り法師品の三說校量、藥王品の十喻稱歎は云ふまでもなく、寶塔品の六難九易、譬喩品の三車大車、開經の未顯眞實等は皆此の說法無上の意味に用ひら

れる材料である。三説校量の事は顯勝法抄(四五三)持法華抄(四六八)開目抄(七九九)法華取要抄(一〇三六下)報恩抄(一四五五下)(一四六三)初心成佛抄(一六三一)(一六八二)諸經法華難易事抄(一九四九)を拜讀すべく其他の法門も遺文類聚索引に依て研究し置くべきである。兎に角釋尊一代の佛教上に於て釋尊自らが權實邪正を比較對照して其優劣を判じ給ひし説法は爾前四十二年間には絶えて無き事であり、寧ろ無き筈なので、寧ろ又不可能なのである。獨り法華經の特有特權であるのを説法無上と云ふ。

第七に教化無上とは涌出品の説相である。釋尊一代の教經には涌出品のやうな六萬恒沙の大菩薩が從地涌出して、而して如來自らが吾れ久遠より已來是等の衆を教化せりと仰せられた事は絶えて無かつたのであるから之を教化無上と云ふのである。全く數の上からしても位の上からしても、時の古き上からしても修行年限の長き上からしても實に無上の教化である。

第八菩提無上とは法華論で見れば壽量品の出釋氏宮に依つて應身如來を示し、我實成佛已來の文に依つて報身如來を示し、如來如實知見三界之相の文に依つて法身如來を示し、此の三身如來を三種の菩提として、示されてある。之を天台の文句に見ると如來祕密を釋して一身即三身名爲祕、三身即一身名爲密乃至於諸經中祕之不傳(遺文二〇四七引)とあるが矢張り菩提無上で三身の相即説は諸經に皆無であると云ふ意味である。全體菩提と云ふ事は梵語で丁寧

に云へば阿耨多羅三藐三菩提である。阿は無と翻し耨多羅は上と翻じ藐は正とも等とも遍とも翻じ、菩提は覺とも道とも翻するので、要するに悟である。其悟の三方面が即ち三身である身と云ふ事は積聚の義と云ふて結局固りである。悟の上の本體を法身と云ひ、悟の上の相となつて現はれた處を報身と云ひ、悟によつて衆生に應じて化益を施す作用を應身と云ふのである。例へば扇の體は法身なり、人に扇と知らしむるは報身の智なり、風を出し禮義の用に立つは應身の慈悲なり。(遺續集一九)而して此三方面が一本の扇の上に具足して居るのであるから分けて見れば三つであるが縮めて見れば一つであつて、三つとも云へず、一とも云へぬ。釋尊久遠塵點の昔の悟なるものを檢べて見れば智慧と云はれる方面もあり、衆生を救済すると云ふ智慧と慈悲とをチャンと持して居る本體と云ふ方面もあるから一言に云へば悟なれども其作用を分つて見れば三方面になつて居る。一つの悟の塊りの上の三つの作用の類別であるから一本の扇の上の三つの作用と同じやうに一つかと云へば作用は三つであるから三つの作用が實際別々に孤立の出来るものと云へば孤立は不可能であるから一つと云はねばならぬ。一とも三とも一とも云へない處が三身圓滿と云ふのである。此の三身圓滿と云ふ事は法華經に來らねば説かれなかつたから菩提無上と云ふのである。

第九に涅槃無上とは涅槃と云ふ事は之も天竺の語である。支那語に翻譯すれば滅度と云ふ。

自我偈の中に方便現涅槃而實不滅度とあるがあれは涅槃は印度語で滅度は支那語で兩方を擧げたものである。涅槃經では不生不滅を大涅槃と云ふてある。平易に之を云ふならば生れる死ぬるの生死の二法に於て迷を離れたと云ふ事を不生不滅と云ふので死なぬ生れぬと云ふ事ではない。先の國土無上の處で辯じた本尊抄の出離と同じ意味で生死の二法に對して迷はぬと云ふ處、即ち迷を離れたのが不生不滅であるから佛の上では滅も涅槃、生も涅槃であるが涅槃を滅度と翻ずる處から御入滅に用ゆる方が便宜だから自我偈などは方便現涅槃而實不滅度と御臨終の事に限つて用ひられて居るのである。故に判り易く云へば悟つた死に様、まじ聖き死に様であると云ふ事である。安心ある死に方と云ふ事である。安心ある死に方と云ふ事は即ち方便現涅槃而實不滅度である。こうなると茲に生死問題の解決と云ふ事になるが此處で生死問題の解決を試みませう。全體佛敎が生死の問題に向つての解決法は大きく二つであります。一は生死厭離で、一は生死自在であります。生死厭離と云ふ解決法は法華以前の敎經の説明法で、生死自在と云ふ解決法は法華經の説明法である。法華經已前の一切の經敎では生れる死ぬると云ふ事を斷じて了つて、全く生れたり死んだりする生死のない境界へ生れると云ふので生死其のものを憎むべきものとして之を厭離すると云ふ方法である。法華經の生死問題の解決法は生死と云ふものを憎むべきものと云ふのは甚だ謬れる解決である。試みに見よ。夜の明るは生にして、日の

暮るは死で、春の來るは生にして冬の日は死である。花の蕾を結ぶは生にして、開いて落るは死、晦日は死にして朔日は生である。若し生や死やを恐るべきものとして之を避けんと欲するは夜の明け、日の暮るゝを恐るゝものである。春の來り冬の去るを避けんとするものである。花の開落、月の虧盈を止めんとするものである。幼稚なる考ではないか。謬れる解決ではないか。不可能の要求ではないか。寧ろ之れなくんば世界は滅亡し人類は空虛なり。凡そ世界あり人類あり、物あり形ありて榮枯盛衰生死生滅のなきものは斷じて無いのである。此處に着眼一番したならば釋尊の法華經已前に於ける所説は妄も又甚しき事を知る事が出来る。試みに思ふて御覽なさい。娑婆と云ふ世界は生れる事があり死ぬる事がある。是は全く苦勞である故に早く此の苦勞なる娑婆世界から遠ざかつて生死の全くなき他方の淨土に往生させると説いてあるが既に此土に於て死んだから彼土に往生すると云ふ事が出来たのであらう。此土に於て死せずんば彼土には往生する事は出来ぬであらう。されば此土の死は即ち彼土の生を齎せる原動力なるものであると云ふ事が判るであらう。而して其此土の死なるものは始めの生なるものがあるが爲に自然、必然として到來せる死であらう。終點は必ず基點によらなければならず、終點は必ず又た基點を生むものである。されば生の言下には必ず死あり、死の言下には必ず生は伏在潜在して居る事は何人も疑ふべきでない。然らば此土の死に依つて彼土の往生ありとすれば往生

ありて死ぬる事なきは明けて暮れぬなり。開いて落ちざるなり。何とそんな不道理な事が承知が出来ませうや。そこで眼を覺して考へて見れば、ハハハ釋尊がかゝる不合理な事を説きなされたは畢竟凡夫は生死と云ふ事を憎み嫌ふて居るから、其憎んで居る凡夫の情狀を其儘酌み取つて、そうだ〜汝等の考へ通り生死は恐るべきものである。生死を恐れるならば私の教へを守れ、罪業をするな、悪心を起すな、さすれば恐るべき生死の苦しみの更にならない世界へ生れさせてやると、方便の説を以て衆生を引導されたもので欲を以て欲を捨てさせんと弱點を利用して善道に導くのは化導の一法であつた事が判らなければならぬのである。そこで愈々正直捨方便の法華經に來れば生死は本來常住のものであつて、之を斷する事も出來ず、斷じたら世界もなく人類もない。苟も宇宙あり人類ある以上は必ず生老病死あり、生あれば必ず死あり、死あれば必ず生あり。暮るゝは明くるの原因なり。明くるは暮るゝの原因なり。死の終點に依つて生の基點はあるのである。生の基點によつて死の終點はあるのである。されば生はやがて死である死はやがて生である。私の涅槃は永滅不生の涅槃ではない。假の方便の涅槃であるから入滅の背景に早や不滅の生は宿つて居るぞ、故に又生の背景には早や死は來るのであるぞ、生死は常住なもの、久遠劫來の生死であつた。盡未來際も又々生し死し死するるのであるぞ、活眼を展開して生死を活觀せよ。生死即涅槃の大樂であつて恐るべきものにはあらず。寧ろ愉快なる

ものであると云ふ事を教へ給へるが壽量品の生死問題に向つての活ける解釋法である。(唯識の常住は凝然常住不作諸法、眞如は固體的不動的のもの、造作の可なはぬもの、當家では生死生死と相續するのだ、大莊嚴論に三種の常住を明す、即ち凝然常住、不變常住、相續常住)田舎の眞醫者が子宮病を療治するのに子宮を全部引出して了つて婦人は遂に死んだと云ふ事があるが子宮が悪いのではない。病氣が悪いのだから子宮を其儘にして置いて病だけを治せばよいのである。生死其物が悪いのではない。生死の上にかゝれる迷が悪いのであるから生死其ものを其儘にして置いて其生死の上にかゝる迷だけを拂へば生死の當體に於て自在を得るのである。それを生死其ものを恐るべきものであるから避けよ、厭へよと勧められたは凡夫の情に隨順して説かれたのである。子宮を引き出した眞醫者式であつた。法華經の良醫はそんな無法な不手際な仕損ないはしない。娑婆即寂光も其通り、爾前の經では娑婆を苦しみだと思つて居る凡夫に對して凡夫の思ひの儘に娑婆を苦だと説いて娑婆以外に淨土を説いて苦しみのなき至極安樂な穢土の外に淨土があると説かれたのであるから爾前の經教は九界の凡夫の謂ひ通りを説かれた迷の教へと云へる。(總勸文抄の意)娑婆即寂光も生死常住も即身成佛も同じ扱ひで肉身其ものが悪いのでもなく娑婆其ものが悪いのでもなく、生死其ものが悪いのでもなく、眼病と云へばとて眼そのものが悪いのではない、眼の上の病が悪いのだから病を除けばよいのである。娑

婆と云ふ世界に對し肉身と云ふものに對し生死と云ふものに對して迷ふて居る其迷ひさへ除けばよいのである。娑婆を其儘に置き凡夫を其儘に置き生死を其儘に置きて直に佛智佛見より照して見せたのが世界觀で云へば娑婆即寂光、人生觀で云へば即身成佛とも生死常住とも云ふのである。だから壽量品の無有生死若退若出亦無在世及滅度者と云ふ無の字は絶無斷無ではない凡夫の考へて居るやうな死んで退て滅度して二度と再び生れないと云ふ様な見方はせないと云ふので無有生死から見於三界までの間に無の字が二つ、非の字が二つ、不の字が一つあるが無の字、非の字、不の字は皆凡夫の生死に對する妄見や、三界の相に對し、妄見を拂はれた語であります。生死血脈抄に云く過去の生死、現在の生死、未來の生死、三世の生死法華經を離れ切れざるを法華經の血脈相承と云ふ也（七四三、遺文大本には切れを功とある、離れぬか法華經行者の功、何よりの功であると云へば有難味あり、然し眞蹟對照の縮遺に依るべき歟、此文生死解脱に用ゆ）此御聖判が誠に動かぬ生死常住觀であつて、而も極めて宗教的であつて有難い事である。生死は實に常住である。如何に王者の手と雖、之を止むる事は出来ぬ。只だ生くるも死するも法華經の題目を離さず切らずよく持つて生れ、よく持つて死するならば之を明なる生と云ひ、之を明なる死と云ふのである。生にも死にも妙法蓮華經の一線の血脈が切れなかつたならば之を生死血脈相承と云ふのである。生死の長夜を照す大燈は妙法蓮華經の五字で

ある。此生死の二法に對して此安心が得られたならば臨終の不安煩悶は忽ちに消滅せねばならぬのである。斯の如く法華經は生死即涅槃の解決を教へられたる經王なるが故に天親菩薩は壽量品に依つて涅槃無上の法門を立てられたのである。

第十に勝妙力無上とは神力品の十神力である。勝妙の二字は神の字の意味に當るので天台は神は不測に名くと解釋して居る。勝妙と云ふも不測と云ふも皆讚歎の稱である。瑞相抄に云く「佛神力品に十神力を現す、序品の放光は東方萬八千土、神力品の大放光は十方世界なり、序品の地動は只だ三千界、神力品の大地動は諸佛の世界地皆震動す。此神力品の大瑞は佛の滅後正像二千年過ぎて法華經の肝要弘まるべき瑞相也（一三四〇）開目抄に云く現大神力出廣長舌云云乃至邪眼の者はみだがへつべし（七六〇）。本尊抄に云く夫顯密二通乃至全非證明（九四五）誠に一代超過三說獨歩の十大神力なるが故に勝妙力無上と云ふ。凡て神通力を現すると云ふ事は種々なる意味を含蓄して居る。或は佛の色心の力用廣大なる事を顯はす意味もあり（一）或は依正とか因果とか、凡聖とか、色心とか是等のものが一體平等互具互融せるものであると云ふ事を表示する場合（二）或は其經の眞實を證明する場合（三）或は其經の力用を示す場合（四）或は一經を付屬する場合（五）等に神通力なるものを現せらるゝのであるが、神力品の十大神力は是等各種の意味を含めるのみならず、此法華經は末法を救ふべき經王なる事を證明する意味（六）を

でが含まれて居るのである。其處を本尊抄では「此十神力以妙蓮華經五字授與上行安立行無邊行淨行等四大菩薩前五神力爲在世後五神力爲滅後也雖爾再往論之一向爲滅後」と仰せられてある。若し又神力品對壽量品の關係より之を見るならば壽量品の如來秘密神通之力の一句が如來の壽命や化益や證悟や慈悲となつて開かれたものが如來壽量品であり、直に如來の神通となつて開かれたものが如來神力品である。如來壽量品と如來神力品とは一見久遠實成釋迦如來の寶前に供へられたる一對の卷物の如くである。掛けられたる一雙の聯のやうである。而して如來秘密神通之力の一句は其中間に聳えたる一頭の柱の様である。尙ほ進んで十神力の内容説明に立入つて一々に考察吟味するならば津々たる興味の卷中より湧出するを見るのである。

十無上の法門談は此邊に止めませう。是等の一切の無上の法門を丸して一粒となしたものを無上道と云ひ、無上佛道とも云ふのである。此故に妙法蓮華經の五字を最上勝妙の寶と申すなり。三寶の六義は先づ一段落を告げたとして信仰の對象即ち信ぜられ手の三寶の内容價值が之によつて一通り明になつたなれば其處に始めて有難いと信ぜられねばならぬ。渴仰の心が起らねばならぬ。信伏の心が起らねばならぬ、戀慕の心が起らねばならぬ。所信の三寶と能信の信仰とが組合せられて此處に始めて健康なる力ある權威ある信仰と云ふのが確立するのである。

其信仰の表白が即ち文字としての南無の二字である。

南無とは梵語で又は曇謨とも云ふ、支那語では度我又は驚怖、又は歸命、又は敬順、又は敬從、又は發願回向と云ふ翻譯があるが、普通多く用ゐられて居るのは歸命である。歸命と云ふ事には二つの解釋がある。一つには己が生命を盡して三寶に歸向する。平易に云へば壽命を捧ぐると云ふ意味である。今一つの解釋は命令に隨順し服従する意味である。之は支那の華嚴學者賢首大師の釋である。時宗などでも此釋を用ひて居る。此二つの解釋の中でも多く扱はれて居るのは生命を捧ぐると云ふ釋である。讚題の自我偈は文で云へば不借身命は即ち生命を捧げるのであるから南無の二字であると云へる。大聖人の南無御書で見ても歸命は命を歸するなり命を法華經にまいらせて(眞蹟新加一五四)と示されてある。御義口傳にも内房抄にも出て居るが大體は命を捧げる意味に用ひられて居る。されば南無と叫んだ時、我の信仰の結晶は本佛本法本化の三寶と相一致したのである。さて此の無二の信仰を本佛本法本化の絶對の三寶に表白し奉りて南無した以上は其信仰が永久に相續せねばならぬ。

さて此處に一念多念と云ふ問題があるが此問題は元來、淨土宗や眞宗に古來八釜敷云ふ問題である。之を我宗に移して見たのである。持法華抄の「二念三念を期すべからず一念に過ぎず故に一念隨喜といふ」(四七四)題目抄の「一期一返遂に惡趣に墮せず(五八三)の文などは全く

一念を勧められたものであり、又題目抄の「此の如く思ふて常に唱ふべし(五八五)又六難九易抄の「一邊は一部、二邊は二部乃至百邊は百部、千邊は千部、不退に唱ふるは不退の讀誦なり(一七四三)」。松野抄の「退轉なく修行し給へ(一五三一)等は是れ多念相續を勧められたものである。其他波木井抄(二二一四)如説修行抄(九七一)南條兵衛七郎殿御書(五二四)、筒御器抄(一九二九)、日向記(五〇右)等懇ろに退轉を戒め給ふも又多念相續を獎勵されたものである。一念を勧め給ふは經力を主として初心者を誘引し給ふ爲である(此點大いに留意すべき處)。經力よりすれば勿論一念も強盛の信決定したならば即時入不退位である。一聞法華經決定成菩提なり(此語は南岳の安樂行儀の文、遺文法蓮抄引)須臾聞之速得究竟なり。一念隨喜、一念信解の文を思ふべきである。されど一度信を起すとも退轉せば墮獄なり。故に多念を勧め給ふ。之は歡喜相續を勧められたのである。百年の暗室に一燈を點せば暗忽ちに消滅すと雖燈若し消えなば暗又忽ちに至るではないか。されば燈の消えざるやう生死長夜の大燈たる妙法五字をよく持つて相續せねばならぬ。其處で此の相續と云ふ事が仲々難かしいものである。天台が受くるは易く持つは難しと云はれたが親の家督を子が受取つても永久に持續する事は容易でない。彼の傳大士と云ふ人は彌勒の再來であつて釋迦如來の遺法たる一切經を五十六億七千萬歳の時節の來るまで守護しやうと云ふので輪藏と云ふて一切經を積み上げて廻轉するやうに造つて之を一轉す

るは一讀の功德ありと勧める爲め又は繙讀の便宜を計る爲め輪藏を發明された人であるから一切經藏には木像が置かれてある。此人は佛教を研究された許りでなく、儒教道教をも研究され常の身粉みこは儒者の冠を頂き、僧の服を身に着し道者の靴を穿ちて普成普建と云ふ俗人時代の驛よきを連れて居られた。木像にも其通りになつて居る。支那人が傳大士を讀した詩に

道冠儒履釋袈裟、和會三家爲一家、借問兜陀天上路、双林痴座待龍華(釋門正統所載)

とある。此傳大士は心王銘と云ふ書物を書かれた。天台も止觀の中に引いて居られるが其心王銘の中に「朝々佛と俱に起き夕々佛と俱に臥す」と云ふ句がある。我が祖も御義に引かれてある。人と云ふものは朝起きた時や夜寐する時は無念無想の丸佛である。己心の佛性が顯はれて居るが朝起きて夜寐するまでの間が佛性は何處へかに消え失せて居る。誠に残念な事じゃ。正念即ち佛性が起つたなれば何でも其を相續するやうにせねばならぬと教えられたのであるが實際此正念相續が難かしい。其と同じく吾等の信仰も時々起るが相續すると云ふ事が仲々難かしい宗祖の所謂火の信心で困る。何卒して源泉滾々晝夜を捨かざるが如く、陰陽なき間斷なき信心を相續せねばなりません。而して其不斷の信仰に依つて日常の行を導くやうにせねばなりません。此處が大切な處で信仰と實行との分岐點である。前來縷々として述べ來つた信仰から實行に移ろうとする處である。明治三十七年一月十一日某新聞社が調査せる巢鴨監獄の囚人の宗教

別に見るに日宗一、二七九人、眞宗一、二二七人、曹洞宗九一三人、黄檗宗三五人、臨濟宗八五人、淨土が八九三人、眞言五四八人、天台四三三人、神道五六人、神宮教二一人、時宗一人、耶蘇新教四人、同舊教三人、無宗教八一五人と云ふ統計である。なんと我宗は法華最第一と威張つて居るが罪人の多き事も法華最第一である。是でも念佛無間と大音で言へようか。斯う云ふといやそれは人道即ち倫理上の問題で宗教の信仰は別問題だと云ふかも知れぬが問題は此處だ。甚だ誤れる見解である。大いに論ぜねばならぬ。宗教が倫理と全然別途に立脚するや否やと云へば勿論宗教の立脚は信仰にして倫理以上である。されど宗教は倫理の根柢を爲すものと云はざるべからず。されば宗教にして罪人を造るは宗教の本領に非ざるなり。前の囚人の宗教統計表の數字に依れば日蓮宗は最も囚人多し。是れ本より宗教の罪には非ずして宗教家の教化の及ばざるなり。教化の誤れるなり、實に我宗の布道家や教育家や寺院住職や大いに反省猛省すべき處である。蓋し此は吾宗が信仰宗であるにも關らず智的に理屈に流れたからであらうと思ふ。宗教家が人の知識を目掛けて感化を及ぼそうとするならば其功果成功は遂に見る事は出来ぬ。見る事が出来ぬ筈である。大體の方針が過つて居るのである。宗教家は人の情を目掛けて教化を起さねばならぬ。即ち妄情、凡情、迷情、慾情、愛情、執情などを美化して佛情たらしむるのである。最初にも云ふ通り、人は知つたとして必ずしも行へるものではないが信じた

ら必ず眞似にも行ふ様になるものである。で私は常から行はぬものならば必ず深く信じて居ないのである。深く信じたならば必ず行なうに相違ない。と云ふ主張である。王陽明が知行合一ならば私は知行合一を主張するのである。世の中にはお題目も唱へるお経もよく讀む説教にもよく參るが平生の交際とか家庭とかに兎角慳貪であるとか愚痴であるとか腹立つばいとか我慢が深いとか云ふものがあるものである。諺にもある通り、後生願ひと椿の樹には眞直のものが無いと云ふて居るが、是等は畢竟信仰と云ふものゝ心得が誤つて居るもので私は最初から辯じた能信の心持も所信の物柄も何にも判つて居らぬ人である。愈々本佛と本法と本化とを戀慕の心を以て、渴仰の心を以て、信伏の心を以て深く深く信じられたならば決して我慢や邪見や、愚痴や瞋恚は起らぬ筈である。是等の煩惱が起らねば惡業の振舞は表はれそうな筈はないのである。だからして苟も我慢、邪見、愚痴、瞋恚の起るのは信仰が薄弱で信心に弛みがある證據である。盆栽に朝夕水を與つて御覽なさい。萎れた枝葉も蘇生するであらう。雨露の濕ひが草木の根本に泌み込めば必ず枯稿せんとする草木も枝葉も凍と張つて來るだらう。本法本佛本化に根本より信心を起して日夜朝暮に憶持して忘るゝ暇のないやうになして妻の夫を慕ふが如く夫の妻を思ふが如くであつたならば其信仰に導かれて日常の實行動作は自然と正直に導かれねばならぬ道理であります。風に隨つて波の大小あり、薪によつて火の高下あり、池に隨つて蓮

の大小あり、雨の大小は龍による根深ければ枝繁し源遠ければ流れ長しであるから雨の猛きを見て龍の大なるを知り火の高さを見て薪の多きを知る事が出来ると同様に現はれて居る性行の善惡を以て潜める信仰の淺深が分るのである。讚題の經文に衆生既信伏とあるは信仰である。其信仰によりて性行を導くと云ふ事を質直意柔煖と教へられたのである。質道とは正直と云ふ事であり柔煖は柔和と云ふ事である。本佛本法本化の三寶は極めて正直で柔和なるお手本である。此のお手本を深く信ずる以上はお手本の如く眞似て己が性行を正直に柔和に導いて行かねばならぬ。此信仰と實行とが合致した時を成佛と云ふので衆生既信伏は信仰のお勧め質直意柔煖は實行のお勧め、一心欲見佛不自惜身命は實行が信仰の中に含まれて合致したものである。信仰と實行とが一體不二となつた其時がやがて即身成佛の結果である。それを時我及衆僧俱出靈鷲山とお説きなされたのである。そこで私は最初にも此讚題のお經文を信行果の三段だと申した一貫の主張であります。で此信仰と實行が二つで一つになつて信行合一になれば信が其儘實行となり實行が其儘信行である。二者の一致を成佛と云ふのである。故に證しつめた處では、矢張り信心成佛である。此信心成佛を六段に道程を造つて組立て下されたのが讚題に読み上げた六即の法門であります。

さて是からいよ／＼六即の法門であるが。即と云ふ字は天台の解釋に依りますると當體即と

か、相即とか、云ふて其儘と云ふ意味である。世間普通に了解し易き例で云へば先づ御即位の即が一番分り易いだらうと思ふ。御即位とは申すまでもなく皇太子が天皇の位にお即きなされたと云ふ事であるが字典では就也、今也、當也、只也、近也と云ふ訓が附せられてある。皇太子が天皇の位にお即きなされたとお身體は二つはない、一つである。其皇太子の御體で其が其儘天子とお成りなされたのであるから今のお體の其儘當面其儘のお身體、只だ／＼其儘でよろしい近き／＼其儘のお身體より外には別に天子のお身體がある譯でない。其處で今と云ふ訓も當ると云ふ訓も只だと云ふ訓も近しと云ふ訓も自然出るのである。即身成佛とか娑婆即寂光とか煩惱即菩提とか云ふ即の字の意味もそうである。だから平易に言へば六即の即の字の意味は其當位と云ふ程に見し支開へはない。此の六即の建立は本と天台に出でたもので法華經を修行する行者の位を分別したものである。此六即に就て天台と當家との區別は一通り大體を心得て置かねばならぬ。要言せば天台の六即は智慧中心であり。其智慧に聞、思、修、の三種がある。聞慧とは善智識の説法を聞いて起る智慧である。思慧と云ふは自己の心に取入れて思惟工夫して起る處の智慧である。修慧と云ふは前の二つの智慧は禪定に入らざる智慧であるから散心の慧であるが此の修慧と云ふは禪定を修行して起る處の智慧であるから定心の慧で之を修慧と云ふのである。其處で六即の中で理即は三慧を用ひぬ位である。名字即は聞慧を用ゆる位であ

る。觀行即以上になると思慧修慧を用ゆるのであつて畢竟は智慧の明昧を等級別にしたものである。宗祖の六即は智慧中心ではなく信心の淺し深しを等級別にして下されたものである。觀慧の六即は像法時代には適すれども末法の機類には分絶えたる六即である。天台の觀慧中心の六即を尺度として末法の時代の法華經の行者の智慧の度合を量つて見るならば智慧の度合では天台の六即の中の名字即の位に當るのである。其一般機類を又六即に分別し下されたのであるから宗祖御所立の六即は天台所立の六即の中の名字即の位で更に信心を中心として六即を分別下された事になる。故に當家の六即をば名字の六即とも云ひ信位の六即とも云ひ、又天台の名字即は開慧の分齊であるからして當家の六即をば開慧の六即とも云へるのである。夫れ惟るに佛日西天に没して其翌日より算を起して一千年間を正法の時代と云ひ、其正法一千年了りて翌日より算を起して又一千年間を像法の時代と云ふ。其像法一千年了りて翌日より後を末法と云ふのである。始めの一千年間は佛を去る事近く御弟子法を受けておはせば時も人も正しき事佛世の如き時代なるが故に正法と云ふ。次の一千年間及べば時も人も稍々下りて佛世の通りの時代ではなくて少しくは佛世に似て居る位のものであるから像法と云ふ。像は似也と云ふて多少は佛世に似て居ると云ふ意である。サテ末法となれば時が濁り(劫濁)煩惱の濁りが激しくなり(煩惱濁)衆生の心根が濁り(衆生濁)衆生の邪見我見が強くなり(見濁)衆生の壽命も段々短く

なつ来る(命濁)。佛在世の面影は夢にも見られぬ時代となつたのである。此の正像末三時の年限の説には種々あるが宗祖は正像各千末法一萬の説を用ひられて居る。法住經や大悲經が此の説である。天台は像の四百八十七年目に出世せられ、宗祖は末法の百七十一年目に出現せられたのである。而して天台も法華經を宣説され宗祖も亦法華經を宣説されたけれども天台は解説的(五種修行内)で智的である。宗祖は受持的で信的であり。特に宗祖の特長は神力品の結要付屬の立場よりして題目を正行とし給ひたりし事は宗徒の知る處である。是れ蓋し像末時代の進退に依ると雖、窮極して論明すれば天台は枝葉的なり、宗祖は根本的なり、見よ、天台は一部なり、宗祖は題目なり。天台は智なり宗祖は信なり、天台は思修兩慧に立脚し宗祖は開慧に立脚す。題目は一部の根本なり。信は萬行の根本也、開慧は根本なり、思慧修慧は枝末なり、此布教法の跡を辿り見れば天台は迹化なり。宗祖は本化なり。迹化とは本佛の枝葉的教化を受けたるなり。されば宗祖の上行再身と云ふも自惚には非ざるなり。事實である。此の如く天台と宗祖とは弘宣の立脚を異にするが故に六即の組織も亦天台は智の明昧を分ち、宗祖は信の淺深を分たれたのである。と云ふ事になる。其處で此の六即は先にも一寸云つた通り信行果の三段信行合一の道程であるが信行果の三段、信行合一の道程と云ふ事は即ち赤の凡夫が佛になるまでの道行で米原驛から東海道を経て東京驛に着する間には種々の驛があつて驛毎に距離の哩數

を記されてあるやうに其の進み行く分量を一段々記號を附したのが六即であります。であるから六即の立脚は天台と宗祖と不同がありましても共に凡夫が佛になるまでの道程と云ふ處には差別はないのであります。だから畢竟智慧で佛になるか、信心で佛になるかと云ふ差別である。ところでよく考へて見ると智慧で成佛の出來たのは實際上五百塵點の當初實成の釋尊のみであつて其他は悉く信仰の力で成佛をして居る。それは其等であると云ふものは宇宙の眞理を發見照見知見された本佛の大悟徹底妙法蓮華經の大法が天地法界の一隅に一度輝き初めて見れば法界何人か是以上の發見を企てやうぞ。只だ本佛に依つて顯はれたる宇宙の大眞理たる妙法五字を深く信ずれば其時頓に宇宙の大眞理と合致し本佛の開悟と一致し本佛の大智慧光明の中に投入する事を得るのである。之を成佛と云ふのである。さすれば及ばぬ智慧を振り廻さずして自己の分に適へる信念を以て成佛の出來る工夫に如くものはない。であるから智慧で成佛すると云ふ事は像法時代の餘裕ある暇人の骨董弄りの仕事で云はゞ無益の勞苦である。されば佛在世の舍利弗のやうに彌勒のやうに有る智慧をも振り捨て、只だ偏に信念一行によりて成佛の出來得る組立をして下された宗祖大聖人の御教化は眞に天台の如き哲學の條件を擲ちたる宗教の性質に適した而も末法と云ふ時代にも機根にもよく適當した宗旨であるのである。さて其信心の力で成佛すると云ふ六段の階級であるが始めの理即と云ふ位は信仰の出發點であるか

ら土臺であるから一番始めに置かれてあるのであるが事實は信心にはかゝらぬのである。法門も聞かず佛をも見ない位である。信じて佛に成れると云ふ道理だけで事實に顯はれぬ位なるが故に之を理即と云ふのである。お寺の半鐘でも打てば音が出ると云ふだけでは道理理屈で事實は打つて見るまでは音の善悪は分らぬが打つて音が出るも出ないも打つにも打たぬにも土臺が無ければ順序が立たぬから先づ第一に理即と云ふ位を置いたのである。これを人の上で云へば丁度赤子のやうなものである。お經を頂いた事もなくお題目を聞いた事もなく唱えた事もないだから此理即の位には他宗も日蓮宗もないのである。他宗の者と雖、信ずれば成佛の出來ると云ふ道理は決つて居るのであるから矢張り理即の位である。信心と云ふ事實の所作にかけない前を理即と云ふのであるから有作無作で云へば理即の位は所作にかけない前の位であるから無作の位である。名字即から有作の位になるのである。だから讚題の御義のお言葉にも六即配立の時は此品の如來は理即の凡夫なりと仰せられてある。これは壽量品の如來を經の文の上より見れば五百塵點當初實成の如來であるから有始有作の如來であるが然し先にも辯じた通り釋尊が五百塵點の昔初めて自身が本覺の如來、無作の如來なる事を悟られた許りでない。法界の全體を無作三身の如來にして靈妙なるものであると初めて悟られたのであるから壽量品の文の底意から云へば法界の衆生に自己の本來尊きものであると云ふ事を自覺せしめん爲めであるか

らして其底意を立場として言明すれば眞の無作の無作たる處は修行の手を下さぬ理即の凡夫の儘が壽量品の極位の如來なのである。それで御義の六即の結文には「總じて伏惑を以て壽量品の極とせず只だ凡夫の當體本有の儘をば此品の極理と意得べきなり」と仰せられてある。だが然し之は天台が壽量品を經文の文の上から扱ふたのに對して文の底意を酌み取りて無作三身を主張された本化の大體の立場を示されたのであつて此無作本覺の主張になづんではならぬ全然無作本覺をのみ振り廻はしたならば修行は入用はない。修行が無用なれば宗教も無用なのであるから此の處を誤解せぬやうにせねばならぬ。吾宗の法門を運用する中に、別して六即とか三祕とか成佛とか、本迹とか云ふ論題の時には體用と云ふ事を能々意得て置かねば飛んだ謬を生じて宗祖の思召に背く事が往々ある。人間の上で云ふても本體の上から云へば男も人間の體、女も人間の體であるから無差別で共に人間であるが而し作用の上から云へば男は男らしき作用あり、女は女らしき作用があつて各々別々である。「凡そ人事なき時は即ち嘔聲盲跛も別なし」ふた語があるが本體より云へば嘔も聲も盲も跛も人間であるから人間と云ふ大體の本と云體を論じて見れば六根具足の人間と全く無差別であるけれどもさて作用に至ると嘔は云へぬ。聲は聞へぬ。盲者は見へぬ。跛者は歩けぬ。一々皆有差別である。當體義抄の初めに「問ふて曰く妙法蓮華經とは其體何物ぞや、答て曰く十界の依正の當體也」とは本體論で、次に「然れば法華

經を謗るものも當體蓮華なりや」と云ふ問に對して「水晶の玉は水に向へば水を生じ、火に向へば火を生ずると同様で十界の衆生は皆當體蓮華なれども爾前の經に向へば地獄となり、法華經に向へば蓮華を證得す」と云ふも答の意味になつて居る。が之は作用の上の差別を示しなされたものである。今の御義の御文も「此品の如來は理即の凡夫也」とは本體平等の上である名字即からは作用の差別である。宗祖が御遺文の中に古德の語を引いて「心を九識に行を六識に」と云ふてあるが見識は無作本覺の如來と云ふ處に置かねばならぬが、修行は六識の底い處から起さねばならぬ。志は毘盧の頂上に置いて行は蟻子の大山に登るが如くせよと云ふた人の格言もそうである。無作から有作に出て遂に又無作に還ると云ふが當家の六即である。從果向因、從因至果と云ふ事も此意味から解釋して行きますと無作から有作に出づるが從果向因で有作から無作に落付いた處が從因至果である。本覺無作の理即の如來から修行を起して有作に出て名字觀行相似分眞と經上つて遂には無作本覺の佛らしく實現したのが究竟即である。故に御義に無佛三身の佛なりと究竟したるを究竟即の佛とは云也と仰せられたのである。だから如何しても凡夫から佛になる迄の階級を立つるには理即と云ふ體を土臺とせねば修行の足が下せぬのである。體がなければ用は起らぬ。蠟燭がなければ火は點けられぬ。水がなければ沸かして湯とする事が出事ぬ。身體が無ければ動けぬ。そこで先第一に理即の凡夫を土臺に出されたの

である。さて其凡ての凡夫で修行の手を下した事のない者が初めて頭に南無妙法蓮華經と頂戴した時が早や名字即の位となつたのである。處て何時も疑問の起るのは此の邊である。と云ふのは壽量品の極理からしても如來の照見からしても妙法の本體からしても事實無作本覺が尊い極致であるならば別段修行せずともわざと尊い無作から有作に下つて又無作に歸着するとか從果向因從因至果など、云ふ様な面倒な事をしないで無作本覺の如來で理即の凡夫の儘で置くがよからう。若し又是非共無作から一度は有作に下らねばならぬと云ふなれば無作が尊いのではない、矢張り有作が尊いのではないか。と云ふ疑問は是非共起るのであるが此疑問は何れの時代にも如何なる人にも起るべき尤なる疑問であるが、然し素瓶不畫氣品高と云ふたとて奇麗に掃除が出来て居てこそ素瓶の價値も顯はれて氣品も高いが其素瓶が黒く燻りて煤だらけで垢だらけでは素瓶の價値も分らず氣品の高い事も分らぬ。嵐山高雄の景色でも如何に耶馬溪でも無始遠々の昔の天然の其儘では見られぬ。天工に多少の人工を加へて幾分かの修正を加へねば天然の絶景が活きて來ない。生れながらの美人でも生れた儘で二十年三十年湯にも水にも洗つた事もなく垢は鍋墨の如く爪は鬼神の如くであつたならば美人の美が顯はれぬであらう。だから天然の美を現はすべく修正を加へて本來の美を發揮せしめねばならぬ。さればとて天然を全く破壊して新に白飾紅點の美を造り出すのではない。只だ天然の美を覆ひ隠そうとする垢や

脂を澆ぎ淨むるのである。その如く吾等凡夫の色心の本體は全く明皓々の靈妙なる本覺如來なのであるが無始遠々劫來常に無明煩惱の垢や脂のつもれるにまかせて置いた爲に本來の面目を見る事が出来ぬ程に覆ひかくされて居るのである。其覆ひかくされて居る其儘を理即の凡夫と云ふのである。そこで其本來の面目を現はすべく無明煩惱の垢や脂を淨むべく修行の功を加へやうとするのが名字即以上である。修行の功を加へたからとて本來無作本覺の理即の凡夫を破壊し改轉して新なる紫磨金の有爲の報佛を造り出すのではない。只だ、無作本覺の如來の天然の美を覆ひかくせる無明煩惱の垢や脂を澆ぎ淨むれば無作本覺如來の天然の美は現はれて本覺の本覺たる處を發揮する事が出来るのである。此處を無作から有作に下つて又無作に落付くと云ふのである。初めからの無作三身の本覺佛が其儘では人間も牛馬も同じである。牛馬鶏犬も山川草木も本體の上から云へば十界の依正の當體が妙法蓮華である。無作三身如來である。本覺佛である。だから本來の理即の凡夫が其儘であるなれば牛馬鶏犬山川草木と同一であつて更に人間としての價値は認められぬのである。されば吾等は自己本來の眞面目、無作本覺の如來なる事を事實に光顯するには此處に信仰の力によつて修行を企てねばならぬのである。即ち無作が無作の儘では行かぬ一度有作に下りて信仰修行の關門を潜つた無作でなければならぬ。天然の美人が垢や脂の其儘では行かぬ。一度湯に這入つて洗ひ淨めて天然の美が顯はれたので

なければ不可ぬ。雨の降るのも自然だと云ふて傘ささずには居られぬ。家の焼けるのも天然ですと云ふて消さずに置けやうか。人の流れるのも自然だと云ふて助けずに置けやうか。自然と云ふものは周囲の事情によつては如何様にもなるものである。當體抄の水晶のお譬と同じ様に水に向へば水を生じ火に向へば火を生ずる。無始本覺の如來即理即の凡夫と云ふものは惡の縁に遇へば惡の作用を起し善の縁に遇へば善の作用を起すものである。そこで頭に南無妙法蓮華經を頂戴し奉れば此大善の勝縁によつて己心の佛性は開發して茲に信心が起るのである。本尊抄に末代の凡夫出生して法華經を信ずるは己心に佛界を具するが故也と仰せられてある。即ち此處である。これが名字即の位である頭に南無妙法蓮華經を頂戴し奉る時をば名字即と云ふのは、之を御義に御解釋下されて「其故は始めて聞く所の題目なるが故也」と仰せられてある。題目の二字を以て名字の二字を御説明下されたのである。題目と云ふ事は平易に云へば名前と云ふ事で題は藝題の題と同じく目は名目の目と同じである。然らば何物の名前かと云へば、前にも辯じた通り妙法蓮華經は天地宇宙の眞理であるから眞理の名前とも云へる。又凡夫肉身の其儘を無作本覺の如來なりと佛見に照された時の名であるから無作三身の寶號名前であるとも云へる。又法華經一部の名前とも云へる。それ等の凡てを込めて題目と云ふたのであります。斯る尊き含蓄多き名字題目を始めて聞き得たるに依つて己心の佛性は頭を上げて信心は起るの

名字即

觀行即

であるから名字即の位と云ふ。宗祖の題目抄の一抄は全く此の名字即の位の行者に示めしになつたものである。で此の名字即を信行果の三段で云へば信仰の位である。お經文では衆生既信伏の一段で信ぜよやお勧めの處である。此信心發心によつて修行を起すが次の觀行即である。お經文では質直意柔煥から十五字である。故に御義の御文に聞き奉つて修行するは觀行即なり。此觀行即とは事一念三千の本尊を觀するなりと仰せられてある。であるから三大秘法と云ふ事は此觀行即に於て始めて用ひられるのである。名字即では初めてお題目を聞き奉つて信心が發起した許りで本尊に向つての修行は未だ初めぬのである。さて此の事一念三千の本尊を觀すると仰せられた觀すると云ふ事は天台家や禪宗などで觀念工夫とか觀念觀法とか云ふのは内容が大いに異つて居るのである。之は宗祖が明に御義の中に爰元の觀とは名字即と心得べき也と仰せられてある。此の一言は忘れてならぬ宗門の龜鑑である。其處で名字即の觀とは先にも天台家の六即の段で申した通り聞思修の三慧の中では聞慧の觀でありますから聞て合點をする迄で觀と云ふても考へるの、工夫するの、觀察するのと云ふ様な思慧修慧の觀ではない。平たく云へば心得ると云ふ程の事でありませう。であるから事一念三千の本尊を觀すると云ふ事は事一念三千の本尊を心得ると云ふ事である。さて其の事一念三千の本尊と云ふ事は十界の本尊であるが、十界の本尊を何故に事一念三千の本尊と申上ぐるかと云ふに之は前

の事一念三千と云ふ標題の下で辯じた通りであるから煩はしく此處では辯じませぬ。さて此の事一念三千の本尊を心得る其心得方はと云ふと、此十界の御本尊は久遠實成の釋迦如來の御本體であつて、而して吾等の心をも行をも正しく柔和にすべき御手本なりと心得るのである。さて其處で御本尊が久遠實成の釋迦如來の御本體である事は前々辯じた通りであるが此御本尊が何故に吾等の精神行動を導くお手本であるかと云ふに久遠實成の釋迦如來も本は理即の凡夫であらせられたのが名字即で御發心なされて觀行即で御修行の功によつて心中の貪瞋痴慢の四惡趣が沈んで佛性が顯はれて成佛の大開悟をなされた其姿が即ち十界勸請の御本尊である。故に地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛界の十界が妙法蓮華經の悟の光明に照されて四惡趣の煩惱が沈んで佛性が顯はれて十界が歴々と其儘美化され佛心化されたのが本尊であるから、此御本尊は如來の胸中の全面の撮影であり、之を離れて如來の本體はないのである。曼荼羅と云ふ事は天竺の語であるが平易に云へば形造りと云ふ意味になるのである。久遠本佛の色心の全體を形造れるものが曼荼羅である。であるから我等の心中精神界をも此十界の本尊の如く如來の御心の如く貪瞋痴慢の四惡趣を下に沈め菩薩佛界の心の上に浮べ現はすやうに御本尊を手本として自己の精神界を莊嚴して、今我が唱ふる妙法蓮華經の五字の光明を以て妄情、欲情を導いて佛情化させねばならぬ。であるから十界の御本尊は久遠本佛の御本體であ

ると同時に又吾等の精神行動を導いて下さる御手本である。之が即ち吾人の簡要なる修養法であります。誠に大事な處である。此の如く御本尊を心得て南無妙法蓮華經と唱へ奉り朝に夕に自己の精神行動を導くべく信心の唱題を續けて行くのが觀行即である。であるからして本尊と題目と戒壇との三大秘法を揃へて修行するは此觀行即である。

そこで此の三大秘法と云ふ事は此處で話ませう。此三大秘法には體門と行門との二種の扱があるのである。宗門常に三大秘法事一念三千是好良藥の南無妙法蓮華經と云ふ場合はお題目の中に三大秘法を綜合して含めて居るのであるから總の三秘とも云ひ。體門の三秘とも云ふのである。此の扱は壽量品に良藥をば色香美味皆悉具足と説いてある經文、或は神力品の眞淨大法などから來た扱である。それは、良藥は妙法五字で其妙法の良藥の上に備へて居る色は戒で、即ち戒壇に當り、香は定で即ち本尊に當り、味は惠で、即ち題目に當るのである。又神力品の眞淨大法は眞は題目に當り、淨は戒壇に當り、大法は本尊に當る。斯様な意味から妙法五字の上に此の三つの徳を具足して居る扱が出て來るのである。傳教大師も學生式の中に三學俱傳名曰妙法といはれた。宗祖も御義口傳に引れてあるが此も體門の三秘の扱と同じである。此の三秘三學具足の妙法蓮華經を修行の上而降して扱ふ時は行門の三秘となるのである。で行門の三秘の時は本尊に向つて題目を唱へて信心をする、これが即ち三大秘法である。如何も何時でも

一寸意得難い持つて廻らねばならぬのは戒壇であります。で私は常に分り易いやうに下の如くに心得て居る戒壇と云ふ事は戒行を修行する場所であるから若し之を修行其ものに就て云へば戒行である。だから戒壇は直に戒行と心得ても差支へない。さて吾等の戒行とは經文にも若暫時者至是名持戒と説いてあるのだから正直に方便を捨て、大善の法華經を信ずるが捨邪歸正、廢惡修善の根本戒行である。結局は信心を戒行と云へるのであるから本尊と題目と信心とが三大秘法であると心得てよろしい。久遠實成の釋迦如來の御本體たる吾等の性行を正しく柔和に導いて頂くお手本の十界勸請、事一念三千の御本尊に向つて此本佛の悟の本體なる妙法蓮華經を信心に唱ふる時茲に早や三大秘法は具足するのである。名字即の位では本尊に向つての修行は初めないから、題目はあるが、本尊が缺けて居るから體門の三秘はあつても行門の三秘は無なのである。であるから體門の三秘と云ふ時は云はゞ三徳である。妙法蓮華經の五字の中には眞善美の三つの徳を備えて居る。其の眞の徳を定と云ひ、善の徳を戒と云ひ、美の徳を惠の徳と云ふのである。行門の三秘の時は立派に三大秘法と云へる。三大秘法と云ふ事は難かしく云へば種々なる義理も包まれて居るがごく／＼分り易く云へば三つの大なる大切なさまりと云ふ事になる。秘と云ふ字は大切なと云ふ事、法と云ふ字は法則憲法で、さまりと云ふ事である。大體吾等凡夫が本佛と同じ心にならうと云ふ事は容易の事でない。實に大事業である。かゝる

大事業を成就するには何か確なる堅固なる法則がなければならぬ。其法則が即ち三秘であるから餘程大事な法則である。例へば本尊は的の如く題目は鐵砲の如く信心は狙ひの如くである。此三つは一つ缺けても駄目である。三つ共に極めて正確でなければならぬ。一分一厘も狂ひがあつては駄目である。實に大事なさまりであります。成佛用心抄に法華經は種子の如く、佛は植手の如く、衆生は田の如し、若し是等の誠めを違へさせ給へば日蓮も後生は助けまじく候と仰せられたが、法華經は種子の如しとは題目である。佛は植手の如しとは本尊である。衆生は田地の如しとは信心である。是等の誠を違へさせ給はゞ後生は助けぬとは本尊と題目と信心との三つが一つ缺けても違つても成佛は出来ぬと云ふ事である。此三つを違へぬ様にするが成佛に對する第一の用心であるから成佛用心抄と仰せられたのである。其代りに久遠實成の本佛と妙法五字と信心とを揃へて質直意柔煥一心欲見佛不自惜身命の修行を續けたならば人格は次第に向上して即身成佛は疑ひないのである。不自惜身命の修行を續けると云ふのは畢竟自己の大信仰を以て自己の精神行動を導くと云ふ事である。持法華問答抄に法力、佛力、信力の三力が出てあるが、本尊抄の釋尊の因行果徳の二法具足妙法五字吾等此五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り與へ給ふの言葉でも矢張り、釋尊と題目と受持との三つになつて居る。釋尊とは本尊で受持は信心であるから三力具足である。此の三力が一つ缺けても自然讓與の成

佛は出来ぬのである。成佛用心抄も同意である。されば三力具足の修行も、三秘具足の修行も結局同一に扱はれる事を記憶して置きたい。壽量品で考へれば良醫は本尊で、良藥は題目で、即取服之は信心で戒行である。神力品で拜見すれば威皆歸命の段には南無釋迦牟尼佛とあり、次に四句要法が表はれ最後に應受持此經是人於佛道決定無有疑と結ばれてある。之が即ち本尊と題目と信心とである。此三大秘法具足の修行が天下萬民一同に弘るやうになつて王佛冥合の曉には戒壇建立が成功されるのである。畢竟戒壇のは信仰統一の實現を理想されたる名目である。だから吾等が三秘を用ゆる場合には本尊題目信心の三大秘法であると心得てよろしい。此の三力三秘を揃へて修行するが即ち觀行即の修養法である。其觀行即の修養によつて人格の次第に向上する姿を御義に、さて惑障を伏するを相似即と云ふなりと仰せられたのである。惑障とは貪瞋痴慢である。貪は餓鬼、痴は畜生、瞋は地獄、慢は修羅である。是等の煩惱が觀行即の修養に依つて次第に伏せられる様になつて來た。貪瞋痴慢が次第に伏せらるればお手本の本尊と段々相似るやうになるのである。御本尊即ち久遠本佛のお心も妙法五字のお悟りの光明に照されて貪瞋痴慢は伏せられ美化されて佛界菩薩界は上に浮び地獄の提婆や餓鬼の鬼子母神十羅刹女や、畜生の八大龍王や修羅界は下の方に沈んで了ふ。十界は元々常住で斷ずる事は出来ぬ。又斷ずべきものでない貪瞋痴慢も之を美化すれば佛心上の作用を爲すものである。貪欲が

美化すれば一心欲見佛の欲となり。瞋恚が美化すれば不信謗法の輩を見て瞋る心になる。愚痴が美化すれば題目を唱へざる信ぜざる者を見ては愚痴がこぼれるやうになる。慢が美化すれば大我となる。欲情、凡情、迷情が佛乗化すればそれが成佛と云ふのである。自己心中の十界と御本尊とが相似るやうに莊嚴勸請が出来れば之が相似即の位に向上したのである。小野道風や顔真卿の手本を置いて一年二年五年十年と練習すれば段々相似るやうになる。さすれば之が第二の小野道風なり、第二の顔真卿である。であるから修養は此觀行即相似即の時代が大事である。觀行即の練習苦しみ方が足りないやと仲々相似るやうにならぬ。相似るやうにならぬから其内にあきが來て魔障が加はる。遂にはお手本の本尊を忘るゝやうになる。だから此觀行即の位に餘程注意して一心欲見佛不自惜身命の勵みをせねばならぬ。佛壇の莊嚴、珠數の得意、合掌の心得なども矢張り修養の材料である。合掌は釋尊靈鷲山にして法華經御說法の時本化の菩薩も迹化の菩薩も一會の大衆が行つた作法である。即ち法華經修行の行儀である。無論合掌は印相であるが印相と云ふ事は心の思ひを形に表はして見せる符牒である。我心が一心であると云ふ符牒が即ち十指爪掌を合せると云ふ一心の合掌であるから此一心の合掌に弛みが來て、ふくれたり、亂れたり、傾いたり、上り過ぎたり、下り過ぎたり、では即ち心の一心に非ざる事を形に現はしたものである。合掌の正しきは即ち心の正しきであると云ふ事を知らねばなら

ぬ。珠數と云ふものは大體は數を記するの用に供するものに過ぎないのであるが然し信仰の趣味から之を解釋して見ると百〇八の珠は百八の煩惱、大玉二つは釋迦多寶で、四菩薩を遣はして吾等の百〇八煩惱を引導すべく和光同塵の御利益の姿であるから之を摺ば百八の煩惱は信心の徳に依つて自然に美化されるのであると心得べく。佛壇は位牌を入れる箱と思つてはならぬ。寺で云へば本堂は末堂に對する名前ではない。丁寧に云へば本尊堂と云ふ事である。即ち本佛を安置する寶殿寶壇なるが故に佛壇とも云ひ、本堂とも云ふのであるから位牌を同居せしむるは實は不敬なのである。位牌壇は在家と雖も本當は別置すべきである。既に本堂佛壇は本佛奉安の壇上なれば我亦爲世父の御座所であるから可成莊嚴せねばならぬ。清潔にせねばならぬ。自己の心のお手本を安置する場所だから塵芥や鼠糞だらけにして置くやうではならぬ。婦人が鏡臺に塵がかゝつても拂はぬやうでは此婦人は化粧は亂して居るに違ない。手習をする机の上が汚いやうでは手は上らぬに相違ない。本佛のお姿、自己の心のお手本たる本尊を安置しある本堂佛壇が不潔なやうでは其人の平生の信仰は必ず薄弱に相違ない。心の内が汚いに相違ない。それから香は佛の禪定の徳を莊嚴し華は佛の戒徳を稱讚し灯は佛の智慧を讚歎し奉るのであるが同時に又自己の心の靜まるやう(定)行儀のよくなるやう(戒)正しき智慧の出るやう(惠)佛を供養するのであるが聽て即ち自己を磨く事になるのであるから花は成るべく新鮮清淨なるべし。香もなるべく良質を用ゆべし。燈燭もなるべく明にすべきである。而して次第に相似るやうになれば楽しみが出る。楽しみが出るやうになれば大丈夫です。さて御本尊と自己の心が相似るやうになれば是で先づ一人前となつたのであるから今度は化他に出る。

そこで次に化他に出るを分眞即也と仰せられてある。化他とは自分が御本尊と題目と信心とで此處まで向上したのであるから他人にも自己の修養せる如く御本尊と題目と信心との三大秘法によりて修養をすゝめて凡情をして佛情たらしむるやうにするのが化他である。分眞の眞と云ふ事は佛の事と思ふて差支へがない。此の化他が出来れば一分佛の仕事であるから之を分眞即と云ふのである。だが相似即や分眞即では未だ時々胸の中の御本尊が傾いたり曲つたりする事がある。それが更に動かぬやう傾かぬやう曲らぬやうにならねばならぬ。そこで第六段に至りますると無作三身の佛なりと究竟したるを究竟即の佛とは云ふ也。と仰せられてある通り觀行即の修養修行によつて餘程無作三身の天然の美が現はれて來て無作三身の佛らしく自己の胸中と(十界)御本尊とが段々似て來たが、然し化他に出でながらも尙ほ一ヶ月に一度や二ヶ月に一返位は胸中の御本尊の狂ふ事があつて元の凡夫の地金が現はれて煩惱が頭を出す事がある。それが此の究竟即の位に登れば磨き上げた無作三身の佛が狂はぬやうにちやんと決つて動かぬやうになるのである。究竟と云ふは究はきはまる、竟はあはるである。さはまると云ふのは極

ると云ふ事、おはりと云ふ事はしまいと云ふ事である。さればしまつてしまつたと云ふことが究竟と云ふ事である。天然無作の本覺如來の上に無明煩惱の曇り掛れるを名字即の發心より觀行即の修養によつて天然の美即ち無作三身の眞面目が顯はれてそれに狂ひの來ぬやうに後戻りのしないやうになつたのが究竟即の位である。結局、究竟と云ふは信心が究竟したのである。信心が決つて了つて動かぬやうになつたのが究竟即である。佛壇の十界本尊と己が心中の十界とが全然同等になつて見分けのつかぬやうになつた姿である。當體義抄に俱體俱用無作三身と云ふも理屈でなく此の意味から心得て見たい。佛壇の本尊が體やら、胸中の十界が體やら何方が用やら體やら分らぬやうに、自己の心が本尊か、本尊が自己の心か何とも差別の分らぬ様になつたのが俱體俱用の姿である。阿佛房ながら寶塔、寶塔ながら阿佛房と云ふも此究竟即の信念決定の形である。此處で安心と云ふ事も出て來るのである。

安心と云ふ熟語は御遺文では國家論だけに出てあるやうに思はれる。天台では止觀の十乘觀法の中の善巧安心止觀と云ふが安心の熟語の出所である。安は安住とも熟字し、安樂とも熟字し、平安とか安置とか、安穩とか熟字する。字典には靜也、止也、平也、緩也、置也等の訓が附せられてある。心が安住すべき處に安置され、止まれば安樂である。安穩であり安泰、平安である。雀は竹に止まり、鶯は梅が枝に止まり、鶴は松上に止まり、龜は岩上に止まり、動物

植物天地間一切のものは皆其止まる處があるのである。其止まるべき適當の處を得れば極めて安心なものである。他から眺めても何となく程のよいものであるが、雀が波の上に居たり、鶯が松の木に止つて居たり、龜が梅の樹に止つて居たり、鶴が竹籜の中に止つて居たならば自分も不安心であらう。他から眺めても誠に變てこなもので如何も落付が悪い。であるから精神の安樂安穩、平安靜安安泰を計るには先づ第一に心の安住すべき所へ安住せねばなりません。即ち心の止まるべき處を見つければならぬ。だが全體安心と云ふものは不安心に對して起つた名目であるから安心を得やうとするには第一に不安心なるものを研究せねばならぬ。されば人生に於ける最も不安心なるものは何であらう。衣食住の缺乏であらう。金錢の缺乏であらう。家庭の不和であらう。妻子眷屬の不如意であらう。生老病死の四苦であらう。憎い可愛い欲しい惜しい、腹が立つ愚痴が出る、負けぬ氣が起る。誠に如何も日常精神界の不安と云ふものは何人と雖其身分々々に随つて皆あるものである。然しよく考へて見ると精神界の不安と云ふものは實際は衣食住の足る足らぬにも關せず金錢のあるなしにも關はず、家内が和合しても妻子眷屬があつても精神界の不安は仲々そんな事では拂はれるものではない。無量無邊の人類を一々に調査したならば無量無邊の不安心があるであらうが、されど人生人類に於ける最終最大の不安心と云ふべきものは何であらう。衣食住の不安と云ふも、金錢上の不安と云ふも家庭上の

不安と云ふも、生老病死と云ふも腹の立つも、愚痴のこぼれるも我慢の出るのも惜しいも欲しいもとの結局は我身があるからの事で我が此の自己と云ふものさへなかつたならば一切の不安は忽然として消滅するのである。一切の不安は起らぬのである。されば一切の不安心と云ふものの集注したるもの、一切の不安の結晶したるもの、一切の不安心の輻輳したるもの、一切の不安の源泉となるもの、一切の不安の根本となるもの、一切の不安を産み出す母なるものは實に此の自己一身なるものである。此の自己一身なるものの最終は要するに死の一字である。さて此の死の一字の解決に是非共關聯して逸すべからざるものは即ち死に行く先の落付場所である。換言せば死後生るべき世界國土であります。であるから不安のかたまりの一身を包めるものは生死と云ふ袋である。實に吾等の不安の結晶體たる一身は生死と云ふ袋の中に包まれて居るのである。而して此の袋より脱却して落行く先は如何なる國にてあるやらん。晩秋の山里の柿の樹の末に一つ二つ残された薄絹の手毬に真赤の血を盛りて下げたやうな熟柿が今にもぽとり落ちたなら何處へ落ちて如何なるやらんと案ずるやうに我等の一身を包める生死の袋の破れた其時は此の一身は何處を辿り行くべきぞと案じて見れば、正念なる臨終も出来やうとも思へぬ。静夜瞑目して坐るに惟れば吾等の生は夜が明けて旅立を始めたのである。一代の云爲行動は一日の旅行である。三十而立とは旅の空の中食である。さて六十になつて死に近い時は

鳥の時を求めて歸り、山寺の入相の鐘の聞ゆる日の暮である。されど腰には辨當もなく懷中には旅費も乏しい、一歩々々に日は暮れかゝる。宿るべき旅館の的も待ち受けて居る者もなかつたならば何と心細いものではないか。故に吾等人生に於ける最も大なる不安は第一には此の自己一身であり、第二には自己一身の落付くべき國土であります。此の身と國との二つが畢竟不安の最も大なる最も證じつめた終點であります。で此の吾等の生死の身を即身成佛と示し我等の生死する國土を娑婆即寂光と教えて大なる不安に對して大なる安心を與へて下されたのが法華經壽量品の法門であり、本尊抄の身土常住の一段であります。此事は前の國土無上の處で辯じた通りであります。であるから吾等法華經の行者は我が生死する身の上の大なる不安心を即身成佛と云ふ處に安住せしめ、我が生死する國土の案じを娑婆即寂光と云ふ處に安住せしめたなら、不安の心は安樂になり、安穩にならねばならぬのである。其娑婆即寂光、即身成佛と云ふ事が釋尊久遠のお悟りて其お悟りが即ち妙法蓮華經の五字である。此妙法蓮華經を悟られた佛の御本體が即ち御本體であるから娑婆即寂光、即身成佛は妙法蓮華經の内容であり、其妙法蓮華經と悟られた御本體が十界の曼荼羅であると見れば娑婆即寂光即身成佛と云ふ事と妙法蓮華經と云ふ事と十界の曼荼羅とは論じつめて見れば一つである。であるからして吾等は不安なる心を御本尊と御題目に安住し安置して動かぬやうになればよいのである。其不安なる心

を御本尊とお題目の上に安住し安置するに信心信仰の力を以て此不安なる心を御本尊とお題目の上に結び付けるのである。吾等の不安なる心は恰も吉野紙が風に吹かれて居るやうなものである。其を信心と云ふ心を以て御本尊とお題目との大磐石にしかと張り付けねばならぬ。信心の糊の強い程不安の吉野紙は愈々御本尊と御題目との磐石から離れません。釋迦如來が五百塵點の昔成佛なされる前は矢張り吾等と同じ様に此身は如何に不安のものであらう。此の世界は何なる不安のものであらう。不安を離れたる身を求めたい。不安を離れたる世界へ行きたい。常に煩悶に夜を明し日を暮したのであるが、種々御思案の結果豁然大悟されたのが萬物は皆妙の法であると云ふも悟りであつたのである。此時に能居の身體も妙法と照され、所居の國土も妙法と映じたのである。此時始めて釋迦如來は宿昔の不安が一時にがらりと開けて大なる安心が出来たのであります。其能居の身體が妙法と照されたのが即身成佛と云ふ御安心であります。國土即ち世界が妙法であると映じたのが娑婆即寂光と云ふ御安心である。

だから吾等の大なる不安も身と土との二つであり。釋尊の五百塵點以前の大なる不安も亦身と土との二つであつた。而して其身と土との二つの不安に對する即身成佛娑婆即寂光と云ふ大安心も亦久遠本佛の大安心を其儘承繼いで居るのであるから此安心を得るまでは凡夫なれども此の即身成佛娑婆即寂光の大安心が得たならば釋尊は五百塵點の昔に此大安心を得られ吾等は

今日に之を得たのである。時代こそ異つて居れども得る處の安心に於ては久遠本佛の大安心と寸分違はぬのである。三千年已前天竺靈山の會上にして壽量品を聞いて成佛した人達も矢張り此の本佛の大安心を聽聞して安心を得て成佛し六百年前の宗祖大聖人も此大安心に住して龍口をも佐渡をも寂光の本土と御決心なされ吾身を即身成佛なりと覺悟されて一代の迫害の中に泰然として悠々として大不安の中に大安心を以て法悦の生涯を送られたのである。されば吾等の教へられた安心法は即ち本佛の安心法にして靈山一會の大衆の安心であり、又宗祖のお取りなされた大安心なのであつて本佛の安心と靈山一會の安心と宗祖の安心と吾等の取るべき安心とは寸分違はぬのである。本佛が此娑婆即寂光、即身成佛の安心を得られた時が釋尊の成佛開悟であるなれば吾等も亦此安心を得た時が成佛である。只だ釋尊は思惟觀察の智慧に依つて此安心を得給ひたるなり。其他は一切聞て信じて此安心を得たのである。故に信心の決定せざるものは安心は得られぬ。其故に私は常に安心とは信心決定なり、信心決定は即ち安心決定なり。成佛とは安心決定なり。安心決定は即ち成佛なり。信心決定とは即ち成佛なり。と確信して居る今此六即の第六究竟即と云ふも前にも云つた通り畢竟信心が決つて了うて動かぬやうになつたのが究竟即であるから自己の信じたお手本の御本尊の如く、又自己の信じたお題目の如くに自己の精神行動が一分一厘も背かぬやうになつて敵に向つても尙ほ慈悲を以て對するやうになつ

たのが此究竟即である。敵に對つて腹が立つやうでは折角御本尊の通りに佛界菩薩界が上に出てゐながら又た再び地獄界が上に現はれたのであるから究竟即の信心とは云へぬ。所謂大聖人の御一代の様に「相摸守こそ善知識よ、平左衛門こそ提婆達多よ、日蓮が佛にならん第一の方人は景信也、法師には良觀道阿彌陀佛なり。平左衛門守殿はしまさずば如何でか法華經の行者となるべき」(種々振舞抄)「日蓮成佛したらんには最初に少輔房を導かん」(上野抄)と云風に敵を善知識と思ひ、敵を恩人と思ひ怨に酬ゆるに恩を以てするまでに又身を死して社會人類を救済するまでに信仰によつて實行が導かるゝやうになつたのが眞の究竟即の信心にして安心決定なり。又成佛決定である。我宗近古の學匠玉澤桓睿師が眞言宗の三種の成佛に準據して當體即成、受持即成、修顯即成と云ふ三種の即身成佛を組織されたが御遺文中を涉獵して見ると自ら此の三種の即成が散在して居る。桓睿師の意見に依れば當體即成は下種益で、受持即成は熟益で、修顯即成は脱益として居る。で此の修顯即成と云ふ本當の磨き上げた成佛が末法に有るか無いかと云ふ事に就ては桓睿師は別段論じて居らぬが、故小林董上は末法には修顯の成佛はないと云ふ説であつたと傳へ聞いて居るが、之は修顯の成佛と云ふ事は三十二相八十種好の相好ある佛を修顯の成佛と云ふのであるから末法には修顯即成は斷じてないと云ふ意見を立てられたのであらうが全體相好と云ふものは凡夫と佛との區別を明瞭にする爲のものでもあり、如來

の相好は積功累徳の果報莊嚴であるから必ず有るものには違ひない、有るべきである、が然し、餘りに拘泥すべきものではないので涅槃經には「天魔正法を破する爲に佛像と現じて三十二相八十種好を示す」(會疏八八)と説いてあり、宗祖も之に依つて「相好は魔も亦之を現す」(報恩抄)と仰せられてある。だから相好と云ふものゝみに強ち信頼する事は出来ぬ。飯高日勇上人の時老狐が三十二相八十種好を現じて序品の儀式を佛世の通りに演じたと云ふ事は柿之葉集の由來として残つて居る。相好さへあれば佛だと云ふならば狐や天魔も佛である。如何に相好は具足せずとも事實に行が如來の金言の如く着々實現されたならば眞の如來であり成佛である。私は六百年前の宗祖大聖人や六老僧や久遠親師や八品派の三島三師や妙滿寺派の常樂院日經上人の如き亦在家者としては四條金吾や加島法難の熱原甚四郎等の捨身決定の人達は全く末法に於ける修顯の成佛であらうと信じて疑はぬのである。末法の成佛の手本は宗祖である。さればとて三十二相八十種好は無かつた。破れ草鞋に破れ袈裟であつた。けれども其御精神と申し其御實行と申し實に如來の使として、如來の事を行ぜられた人ではないか、其相好や光明は大聖人の歿後に於て「云事後にあへばこそ人も信ずれ、かうたゞ書きおきなばこそ未來の人は智ありとは知り候はんずれ云々」(乙前御返事)の御識言の如く着々として飾られて居るではないか。大聖人の御著述十部祖書は藏經に安置されてある。安國論は英文となつて西洋にまで傳播

して居る。是れ即ち大聖人の應化益物の相好であり光明であらう。釋迦如來の價値は相好にあつたのではない。慈悲にあつたのである。釋尊にして若しも相好のみあつて慈悲が無かつたならば天魔である狐である。三千年前の釋尊も畢竟は一釋氏であつたのである。蓮華が足の下に伴ふて居たのではない。光明が眉間から放たれ通してはなかつた。釋尊の道風徳香が五天の一切衆生に薰被した姿が光明と書かれ相好として扱はれたのであらう。此意味より考察したならば末法の今日と雖も大に修顯の成佛者が出來ねばならぬ。身を忘れて社會人類を救濟すべき活如來が續々生じてくれねば困る。世の中の人々が久遠本佛の本體たる十界の大曼荼羅を憧憬して宇宙の大真理、本佛の悟の大法たる妙法蓮華經を信仰して信ぜざる如く實行して愈々向上したならば全く大人格となり、修顯成佛が出來るのである。若し今の世に法華經を信じ本佛を信じ本化の教を奉戴して尙ほ修顯實行の成佛なしと云はゞ法華經は全く無用の長物末法救濟の用に立たぬ宗旨と云はねばならぬ。相好光明なきは修顯の成佛に非ずと云ふならば宗祖は如來の再現に非るか、如何であらう。されど折伏とさへ云へば必ず修顯の成佛とは云はぬ。攝受主義であるからとて強ちに成佛でないとは云はぬ。攝折は時の宜しきかなはねばならぬから時によつて進退がある。要するに攝受主義にもせよ折伏主義にもせよ忠實に正法を宣傳し社會人類をして宇宙の大真理たる妙法と本佛の本體たる十界本尊の大理想とにかなはしむべく本佛の心を以て本法の

精神を以て社會を教化し自己をも人も本佛の心に住せしめ本法の精神に背かぬやうに善導する人、是を末法の活如來と云ひ、信心決定、安心決定の究竟即の修顯の本法と云ふのである。例せば中興三師(重乾遠)草山政公の如き、本妙律師の如き優陀那輝師の如き大折伏主義の人ではなかつたけれども是等の先師は是れ修顯成佛の人と謂ふべし。學徳を以て世の指南となり指導者となれる人は修顯成佛である。即ち修行の功は觀行即の位から三祕を揃へて積み重ねて相似即にして其功稍々顯はれ分眞即到に至つて尙いよ々々進み究竟即到に至つて始て無作三身の本來の美を圓滿に顯はし了つて信仰に變化の來ないやうになつたのが究竟即であるから之を修顯成佛と云ふのである。然らば成佛とは此の究竟即の位まで進まねば成佛とは云へぬかと云ふに在家にしても出家にしても化他に出る事の出來ぬ者がある。されども自行の上が事實御本尊の如く題目の如く宗祖の思召しに背かぬやうに立派に精神行動が善化され、美化されたものならば成佛と云へる。けれども之は自行内證の成佛であつて化他外用の成佛ではない。だから三種成佛の中では受持成佛と云ふてよい。六即の上で三種成佛を説明すれば先づ理即は當體即成に當り、名字觀行相似は受持成佛に當り、分眞究竟が修顯即成に當ると云ふてよからう。六即と三種即成の配當は人によつて各々見込みが異ふから多少の不同はあるが大體右の如きもので大した差支へはなからうと思ふ。て吾等の要求すべき成佛は當體即成ではない。名字即以上の受持

成佛より更に進むで修顯即成まで達せねばならぬ。此の六即の位を本宗の行人は各自自身の信仰の度合を測つて三祕揃へて本尊をば本佛の本體にして己が精神の手本なりと心得て南妙法蓮華經と信心に唱ふる事が出来たならば吾等は觀行即なりと心得べし。日夜朝暮の修養によつて次第に本尊と相似るやうになつたならば吾は是れ相似即の信心なりと思ふべく、自行の人格修養が成就して一分なりとも分限に應じて他をも感化する事が出来るやうになつたならば吾は之れ分眞即の位なりと思ふべく而して信心決定、安心決定、究竟即の極深信まで上りつめたいものである。吾等道門の輩は寺院住職と成り、教壇家と成り、布道家と成り、修驗家と成り世人の上に立つて居るのであるが、此六即の位を以て測つたならば如何であらう。實に耻入る次第であるせめては觀行即相以即にまで位は立派に進みたいものである。

兎に角、斯様な譯で觀行即以上は三大祕法即ち三力相應して進行するのである。信は萬行の最初にして而して又た萬行の最終である以上は究竟即の最後も要するに信の究竟決定である事を深く忘れぬやうにしたいものである。此の究竟即の位にまで到着して此處に始めて入正定聚と云ふのである。正定聚と云ふ事は正道が決定して聚ると云ふ程の意味になるので邪定聚、不定聚に對した(三定聚)名目であるが邪道が決定して聚るを邪定聚と云ひ、邪と正との中間を不定聚と云ふのである。邪定聚は決定して墮獄し、正定聚は決定して得脱すと云ふて正道決定せ

ば必定して得脱するから正定聚の位に上るものは退轉して墮落する氣遣ひはないのである。けれども此の正定聚に入るには諸佛護念の力を得、植諸徳本と云ふて修養を積まねば正定聚に入る事は出来ぬ。佛の護念を受ければこそ頭に南無妙法蓮華經を頂戴する事が出来たのであるから觀行相似分眞と此の邊に於て精々諸の功徳を植えて置かねばならぬ。さて此の正定聚に入れば究竟即であつて化他の成佛であるから衆生教化の大道を修するので「四者發救一切衆生之心」は成就するのである。此の正定聚究竟即の成佛の位を不退轉の位とも云へる究竟の位で正定聚で信心決定、安心決定の位であるから不退轉の位である。不退と云ふ事には一には信不退、二には念不退、三には行不退、四には證不退である。名字即や觀行即や相似即や分眞即では信も念も行も退轉して後戻りする事があるが此の究竟即の位になると信が念の力に助けられ念が行の力に勵まされ行が證の力のしみに導かれて退轉せぬやうになる。宗祖は「今度強盛の菩提心を起して退轉せじと願しぬ」善につけ惡につけ乃至破るべからず(開目抄)「縱令頭をば乃至唱へ死に云云(修行抄)」と仰せられてある。之が不退轉の究竟即の姿である信心の退くのは念が無いからである。念が退くのは行が足らぬからである。行を退くのは味ひが分らぬからである。成佛の味が分つてくれれば修行せずには置けぬ。修行すれば是非共念は離せぬ。念力があれば信心は絶えぬものである。だから大論には信力故受、念力故持と云ふてある。さて其成佛の

味ひ、即ち佛に成つた時、究竟即の信心決定した時は如何な味がするか、佛に成つた時の心持は如何なものだらうかと云ふに其處は冷暖自知であるから何とも云へぬ。酒好きが酒を飲じて美味い味は何とも云へぬ。「下戸共の一生知れぬ美味さ哉先づ一杯と酔覺の水」人には分るものでない。言葉を以て云へるものではない。賞の趣味は賞好きに非ざれば分らぬ。餅の趣味は餅道樂でなければ分らぬ。其他圍碁の趣味、盆栽の趣味、旅行の趣味、讀書の趣味、皆自己の趣味は自己でなければ他には分らぬ。土城竹馬は小兒のたのしみ、金翠絢綺は婦人のたのしみ、有無を貿易するは商賣のたのしみ、高官扶祿は士大夫のたのしみ、戦つて敵なきは將帥のたのしみ、四海寧一なるは天子のたのしみ、皆各々のしみとする處があり、嗜好する處ありて趣味と云ふものがあるものであるが其境界へ入らねば眞のたのしみは分らぬ。他から眺めて苦しみてあらうと思ふ事が、存外其人には無上の快樂である事がある。宗祖の御一生を凡夫吾等の境界から眺めて見ますると非常なる苦心艱難でははしましたであらうと思ふが宗祖御自身としては「此程の喜びを笑へかし」「經文に我身符合せり、御勘氣を蒙ればいよく喜び増すべし」「時代を以て果報を論ずれば龍樹天親をも超過し、天台傳教にも勝るべし」「日蓮は世間には日本第一の貧者なれども佛法を以て論ずれば一閻浮提第一の富める者也是れ時の然らしむる爲なりと思へば喜び身に餘り感涙おさへ難く教主釋尊の御恩報じ難し、恐らくは付法藏の人々も日蓮に

は果報劣らせ給ひたり天台傳教も及び給ふべからず」此の如く思ひ續けて候へば、流人なれども喜び限りなし「余此の記文を拜見するに兩眼瀧の如し、一身遍悅す」とまでに歡喜踊躍して法悅に落涙遊ばされた。であるからして成佛の境界に這入つた眞味と云ふものは他の境界では分るものでない。こんなものだと云ふ事の出来るものではありませぬ。其成佛した曉の趣味信仰の極度に達した圓熟の境界、究竟即の心持を説いたのが經文で云へば我此土安穩より散佛及大衆までの一段であり、宗祖御自身の御述懐としては身延山書の初の一段、終りの一段、南條書の「此處は人倫を離れたる山中、心細き日刻なれども教主釋尊の一大事の祕法を靈山にして相傳し、日蓮が肉團の胸中に祕してかくし持てり、されば云云」の一段などである之が佛境界究竟即の淨樂我常の四徳波羅密の遊戲三昧である。吾等も何時までも「名字即」に甘んじて居てはならぬ。御本尊を心得て信心の唱題を勵むやう（觀行即）進んで本尊と我心とが相似るやうになつて（相似即）人をも教化して人格を向上せしめ（分眞即）信心退かず念力退かず修行退かず、法悅退かぬ（究竟即）境界まで達するやうに日庭朝暮に懈らず信心を相續すれば松野抄の如く「退轉なく修行して最後臨終の時を待つて御覽ぜよ乃至早や近けり」此の松野抄の言葉の「妙覺の山に走り上つて」とは究竟即の絶頂まで上りつめたる極信の境界の形容である。「法界寂光土にして瑠璃を以て地とし」とは自己心中の十法界が本尊さながらに、唱へ奉る妙法五字の光明

に照された姿である。「金の繩を以て八道を境へり」とは地獄の瞋恚の心より聲聞緣覺の心までが(八道)佛心と同化した有様である。其處で次には「諸佛菩薩は淨樂我常の風にそよめきて娛樂快樂し給ふぞや」と仰せられて佛界菩薩界をお出しなされて前の八道を合すれば十界となるのである。八界が佛菩薩の境界と同化する趣向である。八界が佛菩薩界と同化すれば其が即ち佛境界で究竟即の成佛であるから吾等も今に己心の寶塔を見るやうになれる。其數に列つて遊戯したのしむ事が出来るぞよ。遅くも臨終の際には究竟即の成佛が出来るぞよ、其時は肉眼は閉ぢても信念決定の眼には歴々と我此土安穩天人常充滿の體相を拜見する事が出来るぞよ、其を目的として理想として一步步信仰を以て己が精神行動を導いて行けと勧め下されたのである。此の究竟即の信心決定、安心決定の境界に上つた時は實に其心中の趣味は窮りなきものであらう。腹立たず、愚痴こぼさず、怒起らず我慢もなく、執着もなく言語道斷、心行所滅唯だ信得すべし識得すべからずである。其の歡天喜地の喜びが聲となつて常に漏れ響くのが南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經計りである。其處を御義に究竟即を結んで「無作三身の佛の所作とは何物ぞと云ふ時は唯だ南無妙法蓮華經也」と仰せられたのである。此無作三身は有作を潜つた無作三身であつて理即の無作三身ではないのである。誠に有難い事であります。

尙ほ申上げたい事も澤山あるが本問題に對する大體の骨組は凡そこんなものであらうかと思

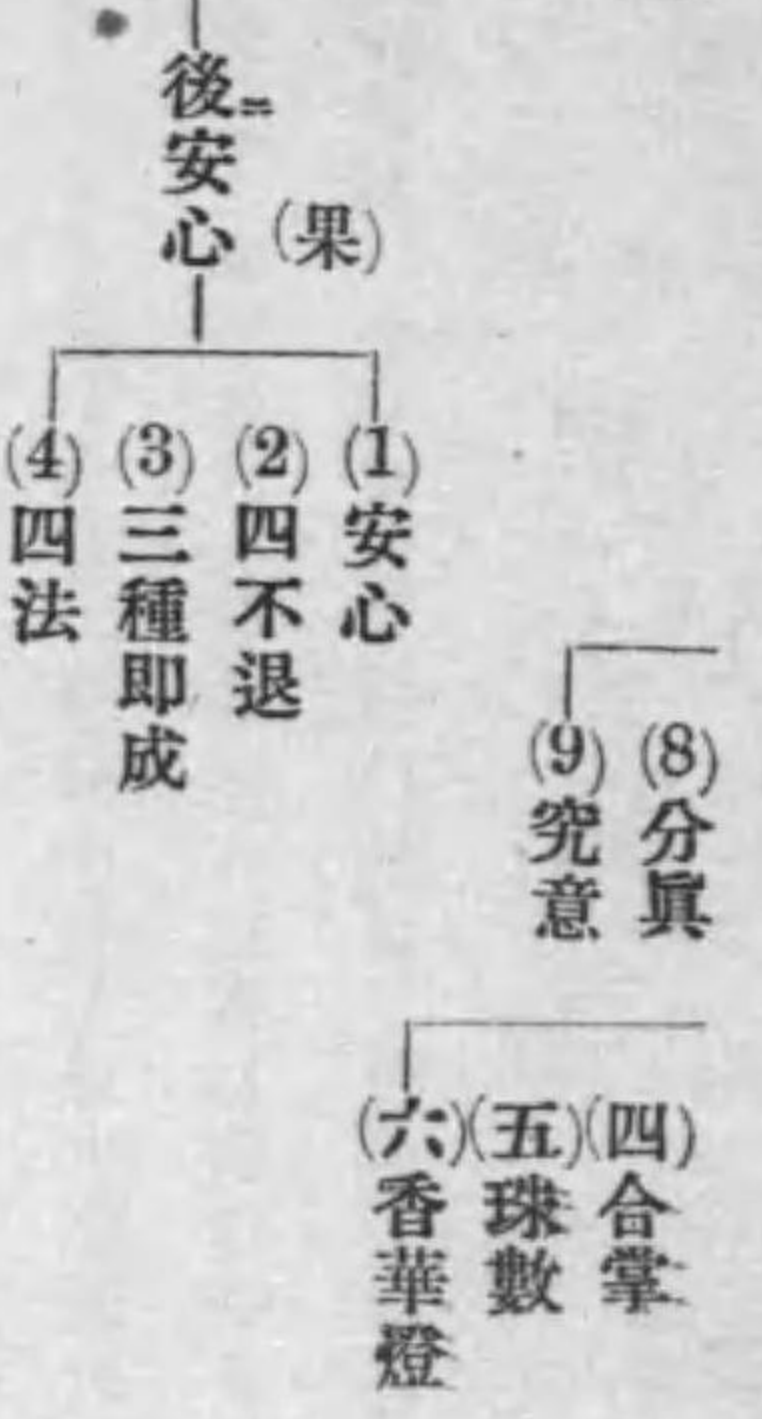
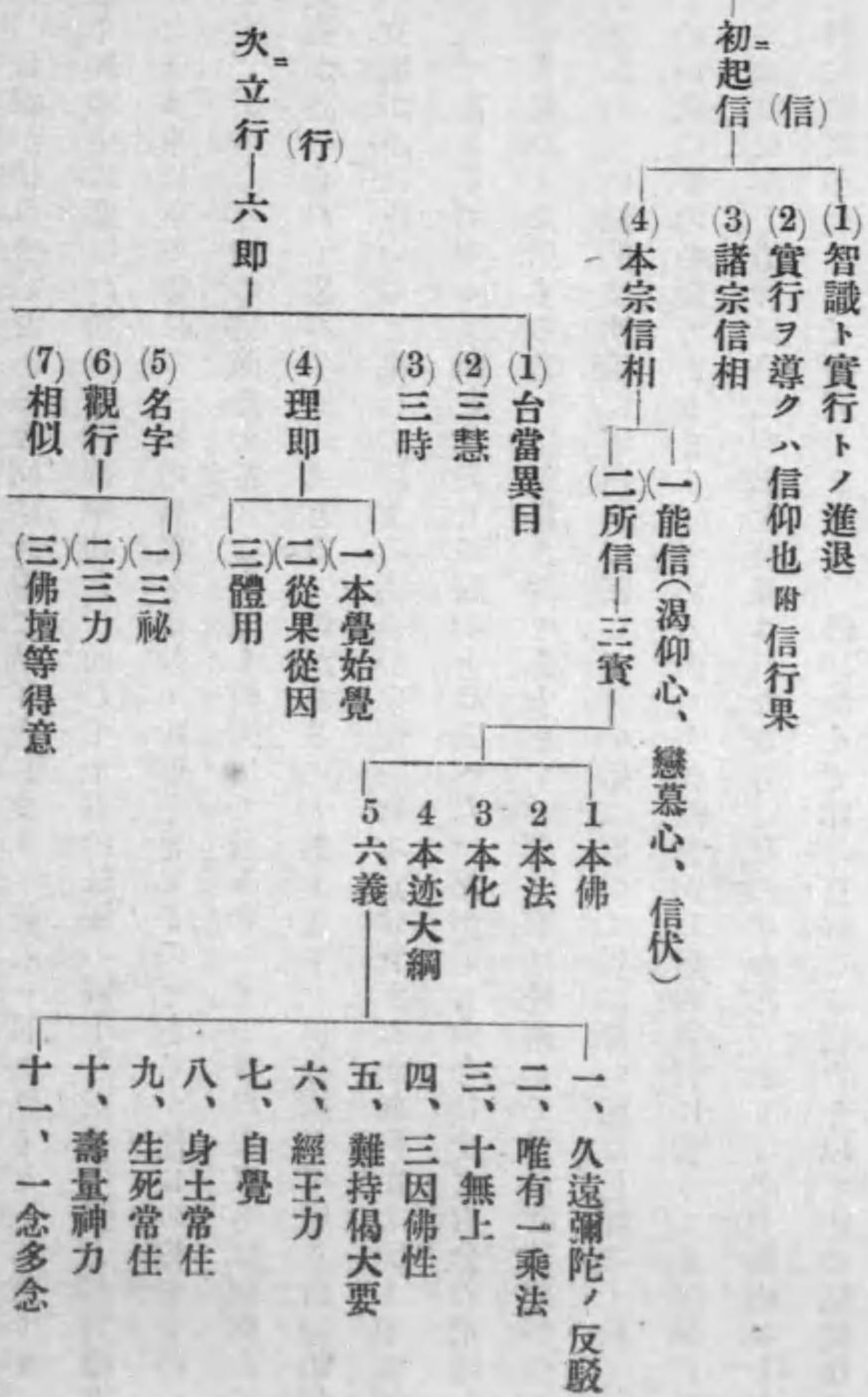
ひますし、日限が切れましたから今回は此邊で結了とします。但し一言も斷りをして置くが、それは法華經の中に顯はれたる安養都率談と、而して十界の依報の國土と正報の體とが實際存在するかと云ふ事に就て優に二三回の席敷を重ねて説明を要するのであるが他日の機會を待つ事にします。が然し今回の講演録を常によく深く研究して讀み考へて下されたならば何處かに一道の光明が認められて思ひ半ばに過ぎるものがあります。何分講じて居る自身の信仰安心の立場が誠に危いので果して以上の講述が宗祖の御本意に背かぬか如何かと云ふ事は頗る以て疑問であるので中々宗門を代表せる言明とは云へぬ。だが兎も角今日まで自分の把持して居る信仰と安心とに對する考へは斯様な譯であります。萬の事は吐露して見ねば善惡が分らぬ。善か惡か自己の信仰は明瞭に告白して而して善い處は取つて貰ひ惡い處は忌憚なく捨て、貰ひたいのが私の常の希望であります。であるから今後諸君が布教の實習に當りて此講演に對して若しも事實に反し道理に合はぬ點を發見されたならば私の生命ある限りは必ず御相談を願ひたい。與に俱に手をとつて研究させよう。終に臨んで此の貧弱なる惱力を以て此の朦朧なる暗記の力を以て活ける人生を救ふべき重且つ大なる信仰と安心と云ふ問題に向つて法話を試みたる不遜の罪は偏に本佛と本法と本化大聖者の實前に蹲跪さ以て深く、慚愧懺悔致す次第であります。どうか諸君は前途有望なる方々であり宗門は大いに諸君に期待する處があるのであ

るから布教院を出られても尚布教院が日夜に自己の目前から忘れられぬ様にも願ひ致したいのであります。(完)

◎本講演内容目録

筆受者門人 長井辨順

信 仰 と 安 心



附 錄 壇 上 餘 言

(1) 不思議な縁で今回布教院に出頭して講師に加はり諸師の高説を拜聴し又諸君と相見ゆる事を得るは光榮と存じます (2) 全體布教院は誰れのものでしやう管長の物にも非ず院長の物にも非ず講師の物にも非ず生徒の物にも非ず五十萬圓に對する申譯の物でも無論ない。即ち宗祖大聖人の物である我等は聖人の懷ろに在て聖人の業を眞似ぶのである此觀念を持って共に一五十日間を進まうではありませぬか (3) 明日から小生の受持科目は信仰と安心である (4) 本日は開講初日であるから何か布教院に關する心得の思附を話せとの院長猥下の命であるが形式とか技術とか云ふ様な方面の心得は林師等夫々諸講師が今日迄教へてもあらうし今回も追々御話があるであらう予は布教院の内容に關する心得の重なるものを話さう

△第一信仰 是あるものは眞面目なり、熱がある、辯も立つ、性行が善良である、人に尊まるゝ、是なきものは此反對である、全く布教院の資格なきものである

△第二此信仰を起し持續せしむる方法 としては法華經の説法者に關する要文を常に訓讀し宗祖の御遺文を讀むがよい御遺文は林講師の意匠に出來た日課體のものが輕便で宜い、經文としては法師品の三説過超寶塔品の難持偈、六根品の以深淨妙聲より隨意即能至文神力品の能持是

經者至無障礙文

△第三經文祖判朗讀の場合 長短、清濁、漢音吳音等を誤らぬ様に注意する事、四條金吾をヨデウキンゴと讀んだ人を聞いた事がある、開目抄の重華をデュウケと讀んだのを聞いた事がある頗る滑稽です、些細の誤りに依て其全體を傷ける事が有る大事なものである、本年四月八日福井市禪宗孝顯寺に於て各宗聯合の降誕會が初めて開かれて東本願寺別院からは滋野井秀雄、西別院からは宮本申雄、禪宗からは小川見龍、日宗からは小生であつた、登壇は抽籤であつた初が宮本君次が小生、演題は「獨尊の意義」であつた、第三番目に滋野井君が「予が降誕會を祝する所以」てう題で盛に演じた、處が「前辯士藤田先生も申された通り釋尊は御降誕のとき天上下唯我獨尊三界皆苦我當。ハ。ン。之と叫ばれたのであります」とやつた、我當度之をハ。ン。之とやつた誕生日だと云ふにハ。ン。シ(半死)では餘りひどいではないか、予は周圍の辯士連各宗僧の顔をじろりと見廻して見たが誰れも不思議な顔付もして居ないのに驚いた娑婆世界は廣いものだからと獨りてくすりと遣た、さて最後に小川君が「白拈賊」の題で演じた、是が又滋野井の尻馬に乗て我當ハ。ン。之とやつた彌々今度は予はから／＼と笑ふたら周圍の人達は却て予の顔を見て不思議な目で見たのみならず先きの滋野井は特に妙な目附で予を見た、彌々娑婆世界の廣い事を感じた、たつた一言なれども其人の演説の全體の奥行が淺い事が分るのであります

平生學問の仕込のあるかないかと本場へ出ると知れるのである、そうして其一人の笑はれが一人の笑はれて濟まぬ一宗の笑はれと成るのであるから布教家は注意せねばならぬ

△第四に材料の撰擇と使用法 は古きもの新しきもの何れを探り來るにもせよ根柢ある處より探り來るが大事である、そうして其を其儘ではいかぬ古き材料を新しく使ひ、新しき材料を古く使ふ、骨董家が黒くすぶりの茶碗を引き出して來て洗つて拭き光澤を出すと奥床敷見へる、新しき陶器でも一寸ぼかしを掛けて出すと見られる、新を新其儘、古を古其儘では更に趣味がない餘韻がない

△第五に衛生の必要 布教家は特に適切に感ずるのである、身體が健ならざれば精神が不快である、不快なれば辯も立たぬ、風采が揚らぬ、暴飲暴食は音聲に害がある、腹の皮が張れば目の皮がたるむ、目寸法でどうしても智識が鈍る、禁酒禁煙も獎勵する禁酒より禁煙を主張したい、酒は公德を欠く事が煙草とは少ない、勿論酒も度である、が煙草は適度にやつても一ぶくやつても公德を欠く事が多い、危険沙汰が大である、汽車汽船長距離電車などでは他人に害を及ぼす事が全く夥いので、酒を吞で火事は先づない、喫煙は一ぶくで火災の例が少くない、音聲を害する、腦を破る、舌がこわる、眼がかすむ、心臓が弱る、碌なことは一もない、宗祖も酒は召されたいが、煙草は全く遺文中に見へぬ勿論六百年前には渡來しなかつたのである

るが、よし渡來して居ても人天の大導師が煙を吹かすなんと云様な無益な馬鹿氣たことは斷じてなさるまい

△第六に經濟必要 華美を好まぬ様になる、質素になる、特に布教院生は現代迄の墮落布教家の缺點を改良しなければならぬのであるが、墮落布教家の大なる缺點大なる惡思想とは華美を街ふと云事が第一によくない銀の香爐に珊瑚の珠數、而して口に不淨の說法を賣つて居るのである、人は言行の一致せぬ程恥辱はない、それ程迄にして布教家の名を借らずともよからう天下人として業なきものはない、それ程迄に華美を街ひ度ば俳優になれ、男藝者になれ、試に戊申詔書を講じたらどうする、謹儉治産去華就實純厚爲俗の一段は全く講ずる資格はないでなにか、そうして遂に破産の悲境に陥つては社會に不道德を演ずるのである人に迷惑を掛けるのである、「借のある門戸には雨が横にふる」隨分堂々たる布教家、教育家の中にも借金の外套を着て借金の絹張傘を指て借金の金縁眼鏡を掛て居る人があるだらうと思ふ人として是程の不見識極まるものはあるまい、全體華美を街ふを好む者は一種の道樂でもあらうが、概して予の觀察よりすれば其人は必ず腹中が空虚なる人である、極端かも知れぬが腹中の空虚を補はんとするのであらうと思ふ即ち人たるの資格と云ふことを解せぬものである、宗祖の一代はどうであらせられたか、孤杖双鞋、單なる一介の行脚僧の風采に過ぎなかつたが大聖人の胸中には一間

浮提を抱籠し一切の人天を包容して大慈悲の光明は盡未來際も尙止まないものである、予が此處に經濟の必要と云ふは貯蓄思想を奨励するのではない、贅澤をするなど云ふのである、華美を街ふが爲めに無理な賣説を振舞うなど云ふのである、淨財があらば貧民に施し或は書籍を買つて讀めと云ふのである、慾深き布教家になれと云ふのではない

△第七に背景ある布教家 と成て貰ひたい、内容ある布教家と成てほしい、立場の危くない布教家と成てほしい、薄つべらな布教家では駄目である、基には捨石と云ふものがある、書畫には落款と云ふものが必要である之が即ち無くてもよいものでは非無ければならぬものである、即ち背景と云ふものである、大宰春台の産語の中に「人が廣き橋を渡る時は樂に渡れるさればとて身體が大きいでもない、獨木橋を渡る時は危い渡り方をする足さへ載する事が出来れば橋の大小には關せず樂に渡られねばならぬ筈であるが狭い橋を渡る時に危いのは蓋し餘裕がないからである」と云て居るが即ち餘裕とは無用の様で必要なものを云のである、之が背景である、一時間の説教や四十分の講演の材料は楊枝一本の講釋をして居ても濟むのである學問と云ふものは説教や演説には役に立たぬものであると云のが布教家の口癖であるが如何にも西谷名目や天台四教儀や集註や俱舍や唯識や因明の卅三過法や一念三千論等の一切の學問が其儘説教や演説の役には立たぬ役に立たぬ不用ではあるがさて其不用なもの役に立たぬものが大に必要な

ものであるので當面の役に立たぬものがなければ背景が空虚で前景の楊枝一本の講釋が活きて來ないのである、であるから現代の布道家たるものは普通智識が必要であることは申迄もなく特に宗門の布道家である以上は宗門の一通りの問題位は解決は附かぬにしても問題の名目位は記憶して居て貰ひたい

どうも宗門の状態を見るに學者は布道家を饒舌屋と嘲り布道家は學者を間拔面と笑ふ傾がある無理なき事實ではあるが、其事實が甚だ情けないではないか、學者は本箱の虫たることを甘じ布道家は世智辯聰に得々たるものとすれば一は化他なきの自行、一は自行なきの化他、一が化他の行缺けたる跛者ならば一は自行の目なき盲者である此旨と跛とに依て取巻かれたならば宗門は終にどうなるであらう廣開甘露門は逆も見ることは出來ぬ此跛者と盲者とを療治する財團が五十萬圓であるならば病院は大學と布教院とでなければならぬ、さて其院長たる人ドクトルたる人の手腕に至ては諸君唯だ南無妙法蓮華經と唱へるより外はないではないか、そうして吾輩は偏に一日も早く此盲跛者の全快を祈るのである

△第八に布道家として記憶すべき宗家重要の問題 之は予の思出しに任せて常に集めて見た論題集の中より不秩序に雜然と陳列するのであるから其積りて居て貰ひたい、畢竟之も布教院諸君に對する背景捨石置石である、或は自行の目の盲せる者には一種の藥となるかも知れぬ眼藥

は極めてコロックものであるから覺悟をし給へ。左にザット掲げておく事にしよう。

日蓮宗教義論題

(大正六年第三期講)

- 壽量顯本
- 始覺本覺
- 理觀事觀
- 理觀與奪
- 本尊異論
- 迹本大綱
- 種熟脫益
- 成佛實義
- 唱題得意
- 草木成佛
- 三業傍正
- 無作本佛
- 生死常住

事理寂光

三力相應

三毒妙法

二乘作佛

種類相對

一念多念

一生成佛

當家六即

解行證位

發心即到

五種頓脩

三學脩不

以信代慧

四儀修行

成佛種子

但信口唱

信行法行

三種成佛

事理成佛

信心力用

九識本法

五品進退

機法一體

起信二種

事觀妙旨

五時證據

供物得意

宗教五綱

讀誦謗不

龍女成佛

附錄 境上餘言

本宗教理

正行助行

本宗倫理

教觀二門

唱題成佛

行者植難

諸宗信相

回向功德

他經引意

南無之釋

五字略解

三時法住

當家安心

隱沒廣布

本尊得意

一體三寶

臨終用意

三大祕法

人理教行

本宗機類

四句要法

流轉還滅

迹本圓佛

妙法總別

十界常住

逆誘輕重

脩惡斷不

四箇格言

自力他力

定業轉不

附錄 境上餘言

附錄 壇上餘言

從果向因

攝受折伏

題 下文 體用

順逆得益

本已未善

未顯真實

娑婆寂光

安養兜卒

五種妙行

分段捨不

但令双用

三慧進退

顯益冥益

謗罪滅不

末法三益

三祕教觀

小權迹戒

末法爲正

本化出時

台當異目

佐前佐後

三段兩科

四重興廢

三重配當

五重相對

內外相承

總付別付

大菩薩號

龍口斷刀

社參開遮

附錄 壇上餘言

附錄 壇上餘言

神佛一異

大乘非佛說

以上

大正七年三月十二日印刷
大正七年三月廿八日發行

《非賣品》

著者

福井縣丹生郡桑生村小倉第十五號三六
藤田文哲哲

發行兼印刷者

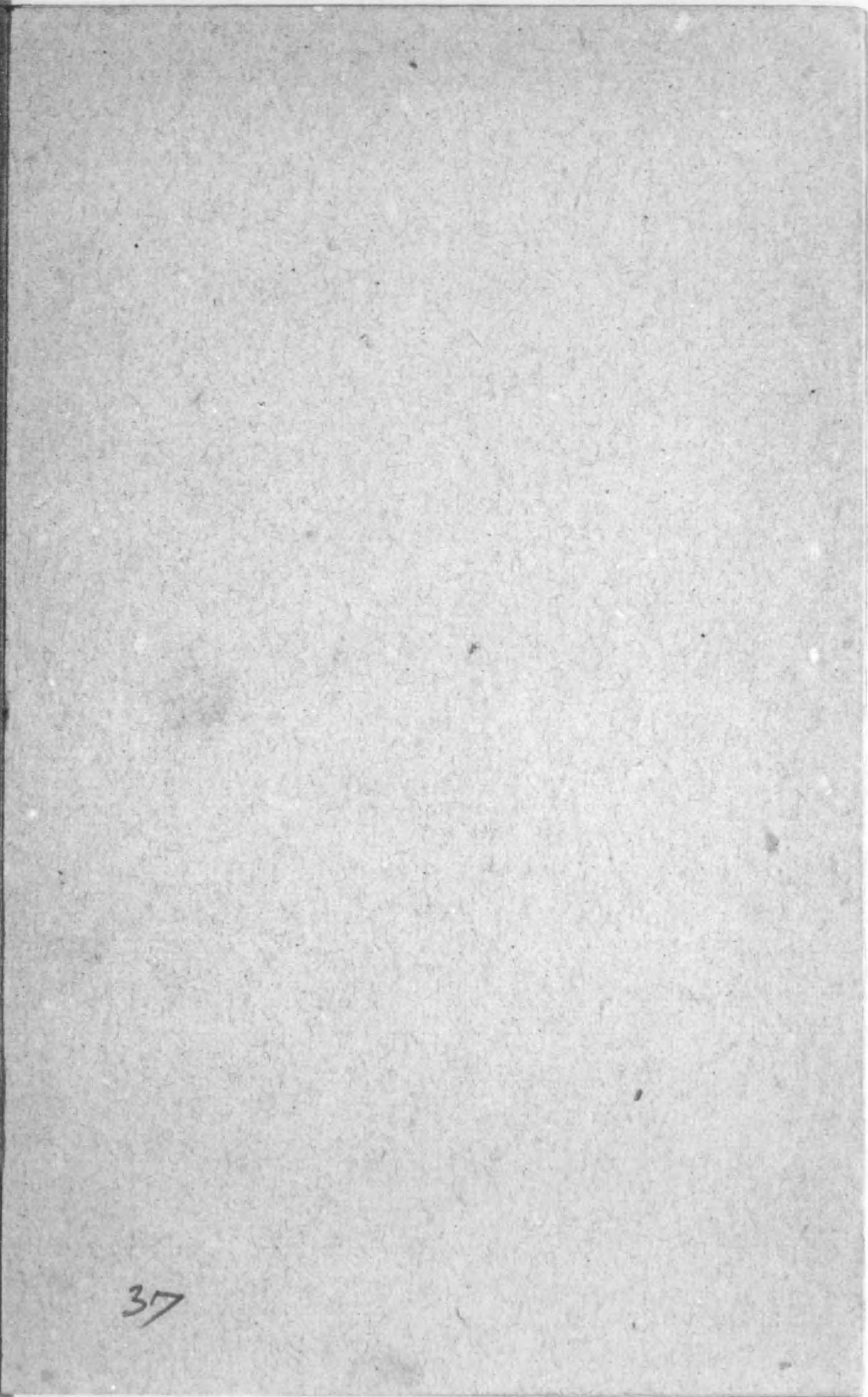
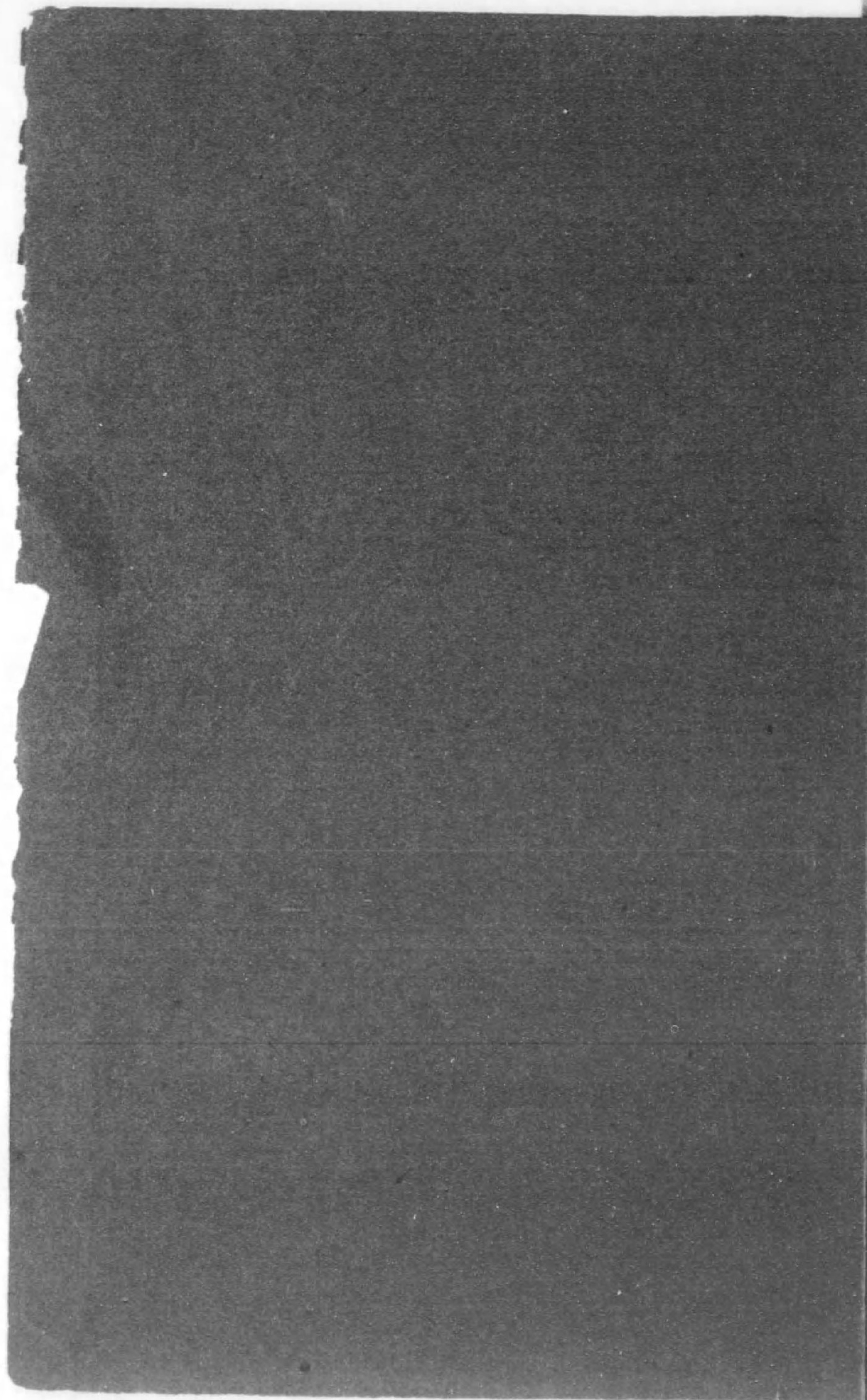
東京市日本橋區數寄屋町一番地
濱井松之助

印刷所

東京市京橋區西紺屋町二十七番地
株式會社 秀英舍

贊刻者

濱井日成
鎌田潮音
佐野貫孝



37

374
562

終